



JAPAN HERITAGE

日本遺産

日本遺産 木曽路物語 Kisoji's Story

木曽路はすべて山の中 ～ 山を守り 山に生きる ～

長野県南西部の木曽地域は、西に霊峰・御嶽山、東に秀峰連なる中央アルプスを仰ぎ、中央に深い谷を刻む木曽川と木曽路・中山道が続く。幾重にも重なる山々は豊かな森と水を育み、奥深い歴史と固有の文化・伝統を継承する古き良き日本の原風景を彷彿とさせます。

木曽地域文化遺産活性化協議会



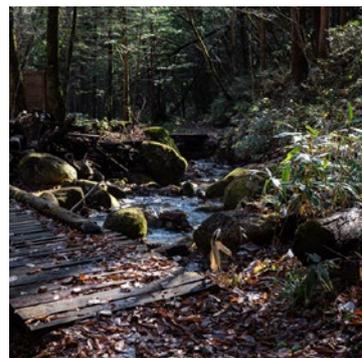
御嶽山靈神碑



表紙／恋路峠展望台から 大桑村、中央アルプスの眺望



阿寺溪谷



水木沢天然林

はじめに

木曾路はすべて山の中

～ 山を守り 山に生きる ～

私たちの暮らす木曾地域の多くの歴史・文化・構成文化財が日本遺産に登録されました。これは現在暮らしている私たちにとっても大変意義があり、先人たちが世代を重ね育んできた財産とも言えます。その暮らしや知恵を「木曾路のストーリー」として地域の思い等を子ども達に伝えるための冊子を作ることにしました。

この冊子を活用することにより、子ども達の郷土愛を育み、日本遺産木曾路の魅力を地域内外に発信出来たらと考えております。

子ども達が理解しやすく、学校教育や生涯学習といった場で活用できる冊子となる様に、木曾地域の関係者の協力により制作できました。

2023年(令和5)2月



塩尻市木曾平沢



職人によるお六櫛の製作



妻籠宿 脇本陣奥谷 林家の囲炉裏

目次

はじめに	1P
第1章:日本遺産とは、日本遺産「木曾路はすべて山の中」の紹介	
・日本遺産(Japan Heritage)とは	4P
・日本遺産木曾路 構成文化財42項目の紹介とマップ	5~10P
第2章:江戸時代以前の木曾の暮らし(縄文時代、木年貢、神木、義仲など歴史)	11P
・縄文時代の木曾⇒縄文土器、悠久のほほ笑み(大野遺跡)、クリ(お宮の森裏遺跡)	12~14P
・武士の時代へ 木曾義仲の活躍 ⇒木曾馬、らっぽしよ祭り、木曾踊りと木曾節(伝承、郷土との関わり史跡など)	15~21P
・戦国時代と木曾ヒノキ(寺社仏閣、城郭建築。木曾式伐木運材法。武田家と木曾氏。) ⇒そば切り発祥の里、木祖村史跡鳥居峠、鳥居峠のトチノキ群、妻籠城跡	22~30P
第3章:尾張藩による森林保護と地場産業の奨励(木曾ヒノキをめぐる歴史、加工品産地として発展)	31P
・尾張藩による森林保護政策 ⇒山村代官屋敷、水木沢天然林(水木沢郷土の森)	32P33P
・今に息づく木材の活用 ⇒塩尻市木曾平沢、曲物、旧中村家住宅、木曾塗の製作用具及び製品(木曾漆器等) - お六衛の技法、南木曾ろくろ細工、蘭桧笠、木曾材木工芸品(桶樽など)、木曾馬、田立の花馬祭り、県宝山下家	34P~57P
第4章:宿場の賑わい・繁栄	58P
・宿場と街道の発展 ⇒福島関所、史跡中山道、一石栃立場茶屋 (宿場におかれた「本陣」と「脇本陣」、中山道の参勤交代、中山道を通りご降嫁した姫君、皇女和宮の大行列)	60P
・歌人・俳人に愛された木曾 ⇒中山道を旅した著名人(句碑、歌碑、文学碑、(紀行文・小説など))	66P
・文化の行き交う木曾に見る浮世絵 ⇒木曾海道六拾九次・木曾路11宿(歌川広重・溪斎英泉)、葛飾北斎(諸国滝廻り。木曾海道小野の瀑布)	70P
・中山道六十九次-木曾路11宿	72P
⇒江戸時代の街道旅行、現在も営業する主な歴史的建築物の宿	74・75P
木曾路11宿 紹介	
・費川宿	76~79P
・奈良井宿	80~84P
・数原宿	85~86P
・宮ノ越宿	87~90P
・福島宿 ⇒高瀬家	91~94P
・上松宿	95~97P
・須原宿 ⇒定勝寺本堂・庫裏・山門、白山神社	98~102P
・野尻宿	103~105P
・三留野宿	106~109P
・妻籠宿 ⇒妻籠宿保存地区、林家住宅	110~113P
・馬籠宿 ⇒島崎藤村宅(馬籠宿本陣)跡	114~117P



.....
第5章: 明治以降の木曾檜活用、森林鉄道 118P

- 神宮備林 (伊勢神宮の式年遷宮、神宮備林の時代、御料局木曾支庁、国有林の時代) 119~120P
- ⇒ 赤沢自然休養林、旧帝室林野局木曾支局庁舎 121・122P
- ⇒ 木曾の森林鉄道 (各路線、鬼淵鉄橋、滝越地区、森林鉄道を描いた原田泰治の絵本の紹介) 123~125P
- 電力王・福沢桃介の偉業達成の地 126P

.....
第6章: 木曾の暮らし、風土、宗教 (御嶽山信仰) 127P

- 木曾の食文化 ⇒ 手打ちそば、すんき漬け、木曾の朴葉巻、五平餅、おおびら、 127~134P
- 笹巻き、三岳寿司、イタドリ、王滝村の万年鮓など
- 御山と山岳信仰 ⇒ 木曾御嶽山、御嶽信仰、木曾御嶽山霊神碑群、御嶽神社里宮、清滝、新滝、百草元祖の碑 135~142P

.....
第7章: その他 (観光宣伝など)

- 木曾八景 143・144P
- 德音寺晩鐘 (德音寺の晩鐘 とくおんじのばんしょう) 德音寺 (木曾町)
- 駒岳夕照 (駒ヶ岳の夕照 こまがたけのせきしょう) 木曾駒ヶ岳 (木曾路の各地)
- 御嶽暮雪 (御嶽の暮雪 おんたけのぼせつ) 御嶽山 (山麓周辺の地域)
- 掛橋朝霞 (棧の朝霞 かけはしのあさがすみ) 木曾の棧 (上松町)
- 寢覚夜雨 (寢覚の夜雨 ねざめのやう) 寢覚の床 (上松町)
- 風越晴嵐 (風越の晴嵐 かざこしのせいらん) 風越山 (上松町)
- 小野瀑布 (小野の瀑布 おののぼくふ) 小野の滝 (上松町)
- 与川秋月 (与川の秋月 よかわのしゅうげつ) 与川地区 (南木曾町)
- ⇒ 寢覚の床、木曾の棧 143~148P
- 溪谷美 ⇒ 阿寺溪谷、柿其溪谷 149~151P

.....
巻末・記録 152P



開田高原九蔵峠から望む御嶽山

第1章

日本遺産とは
日本遺産「木曾路はすべて山の中」の紹介

日本遺産 (Japan Heritage) とは 主旨と目的

我が国の文化財や伝統文化を通じた地域の活性化を図るためには、その歴史的経緯や、地域の風土に根ざし世代を超えて受け継がれている伝承、風習などを踏まえたストーリーの下に有形・無形の文化財をパッケージ化し、これらの活用を図る中で、情報発信や人材育成・伝承、環境整備などの取組を効果的に進めていくことが必要と考えられています。

文化庁では、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産 (Japan Heritage)」として認定し、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の様々な文化財群を総合的に活用する取組を支援しています。

日本遺産 木曾路

日本遺産木曾路は
STORY #028 に
登録されています

木曾路はすべて山の中～山を守り山に生きる～

戦国時代が終わり新たな町づくりがすすめられると、城郭・社寺建築の木材需要の急増は全国的な森林乱伐をもたらしました。森林資源が地域の経済を支えていた木曾谷も江戸時代前期に森林資源の枯渇という危機に陥り所管する尾張藩は、禁伐を主体とする森林保護政策に乗り出し、木曾谷の人々は、新たな地場産業に暮らしの活路を見出しました。

そして、江戸時代後期、木曾漆器などの特産品は、折しも街道整備がすすみ増大した御嶽登拝の人々などによって、宿場から木曾路を辿り全国に広められました。

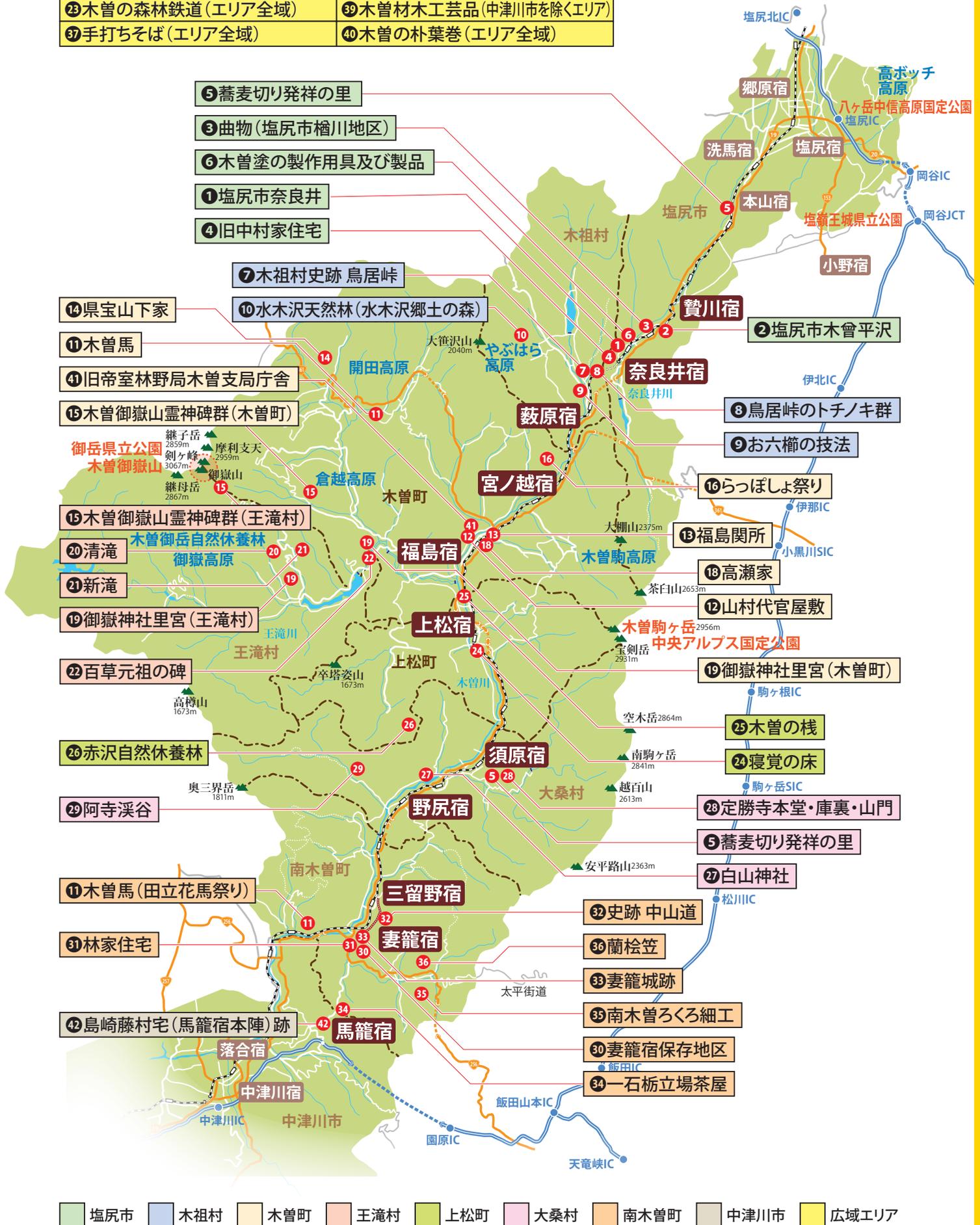
江戸時代、全国に木曾の名を高めた木曾檜

や木曾馬、木曾漆器など伝統工芸品は、今も木曾谷に息づく木曾の代名詞です。



日本遺産 木曾路 構成文化財位置図

17 木曾踊りと木曾節 (エリア全域)	38 すんき漬け (南木曾町・中津川市除くエリア)
23 木曾の森林鉄道 (エリア全域)	39 木曾材木工芸品 (中津川市を除くエリア)
37 手打ちそば (エリア全域)	40 木曾の朴葉巻 (エリア全域)



日本遺産 木曾路 構成文化財一覧 ①～⑬



① 塩尻市奈良井

しおじりしならい

指定等の状況 国重要伝統的建造物群保存地区

中山道の難所の一つ、鳥居峠の北麓にあたる宿場町であり、棺物細工や漆器、塗櫛等の木工業で賑わいました。現在も町のつくりや家並みは当時の面影を色濃く残しています。

塩尻市



② 塩尻市木曾平沢

しおじりしきそひらさわ

指定等の状況 国重要伝統的建造物群保存地区

漆器の生産によって生計を立てる産業の町。店舗をはじめとして塗蔵等の作業場や職人の住まい等、漆器業にまつわる建物が建ち並びます。

塩尻市



③ 曲物

まげもの

指定等の状況 県伝統的工芸品

木曾桧を木理に沿ってへぎ、熱湯浸漬により曲げ加工を行い、そば道具や茶道具等を作る伝統工芸です。

塩尻市



④ 旧中村家住宅

きゅうなかむらけじゅうたく

指定等の状況 国重要文化財

近世奈良井宿において塗櫛問屋を営んでいた家です。外観の意匠や間取りなど、奈良井宿の町家のもっとも一般的な規模の建物です。

塩尻市



⑤ 蕎麦切り発祥の里

そばきりはっしょうのさと

指定等の状況 未指定

現在のように蕎麦を切って食すようになるのが、いつどこで始まったのかについては諸説あり定かではありませんが、文献で塩尻市の本山宿、大桑村の定勝寺を発祥とする記録が残されているなど、木曾谷が蕎麦切り発祥の里の有力地の一つとして考えられます。

塩尻市

大桑村



⑥ 木曾塗の製作用具及び製品

きそぬりのせいさくようぐおよびせいひん

指定等の状況 国重要有形民俗文化財

木曾塗りの製作に係る木地・下地・塗り・加飾・販売・職人の生活・信仰用具・製品など3,729点が国重要有形民俗文化財に指定されており、木曾漆器館に展示されています。

塩尻市



⑦ 木祖村史跡 鳥居峠

きそむらしせきとりいとうげ

指定等の状況 村史跡

松尾芭蕉が訪れ「ひばりより上にやすらう峠かな」の句碑があります。御嶽遷拜所があり、霊神碑や神像が立ち並びます。

木祖村



⑧ 鳥居峠のトキノキ群

とりいとうげのとちのきぐん

指定等の状況 村天然記念物

松尾芭蕉が訪れ「木曾の枅うき世の人の土産かな」の句碑があります。樹洞に入れた子が元気に育った言い伝えから、木の皮を煎じて飲めば子宝に恵まれるという言い伝えがあります。

木祖村



⑨ お六櫛の技法

おろくぐしのぎほう

指定等の状況 県無形民俗文化財

お六櫛の名の起りは、頭痛もちのお六が、家の近くのミネバリの樹を櫛にして髪を梳いたことにより全快した伝説があります。現在の主産地は藪原。実演見学や体験もできます。

木祖村



10 水木沢天然林(水木沢郷土の森)

みずきさわてんねんりん(みずきさわきょうどのもり)

指定等の状況 未指定(現中部森林管理局との保存協定)

江戸時代、城や城下町を造るために木曾山の木が皆伐された後、僅かに残された木から自然に種が芽生え、現在の森が形成されました。現在樹齢約550年の大サワラを始め、300年以上のヒノキやブナ、ミズナラ、トチノキなど針葉樹と広葉樹が混交する森林です。

木祖村



木曾町「木曾馬の里」 南木曾町「田立の花馬祭り」

11 木曾馬

きそうま

指定等の状況 県天然記念物・県無形民俗文化財

北海道の道産子や宮崎県の御崎馬と並ぶ日本在来馬種で開田高原に「木曾馬の里」があります。南木曾町に伝わる「田立の花馬祭り」では木曾馬が集落を練り歩きます。

木曾町

南木曾町



12 山村代官屋敷

やまむらだい官やしき

指定等の状況 町有形文化財

江戸時代を通じて木曾谷の統治と福島関所の関守を世襲した、木曾代官山村家の屋敷。かつては広大な邸宅を構えていましたが、現在は、下屋敷の一部と、築山泉水式の庭園が残っています。

木曾町



13 福島関所

ふくしませきしよ

指定等の状況 国史跡

江戸時代を通じて「入鉄砲・出女」を取り締まった関所で、現在は門や木柵などが復元されています。第9代木曾代官・山村蘇門が「山河の固め」と表現したその様相は、まさに山と川とに挟まれた天然の要害といえます。

木曾町



14 県宝山下家

けんぼうやましたけ

指定等の状況 県宝

山下家は、江戸中期から大正初期にかけて栄えた大馬主の家で、「伯楽」と称する馬医を兼ねていました。住宅は、江戸時代末期に建築されたもので、人と馬とが一つ屋根の下で暮らしてきた民家の特徴をよく示しています。

木曾町



15 木曾御嶽山霊神碑群

きそおんたけさんれいじんひくん

指定等の状況 未指定

御嶽講の人々により死後魂が御嶽に還るよう願って建てられた石碑群です。

木曾町

王滝村



16 らっぽしよ祭り

らっぽしよまつり

指定等の状況 町無形文化財

本来は山吹山麓の徳音寺集落の子供たちのお盆行事で、木曾義仲一行に扮する武者行列が町を練り歩きます。

木曾町



17 木曾踊りと木曾節

きそおどりときそぶし

指定等の状況 木曾町無形文化財

全国に知られる木曾踊りは、木曾義仲の供養のために行われますが、木曾節は「おんたけ節」に篠師の労働歌「なかのりさん節」などを取り入れたものです。

塩尻市・木祖村・木曾町・王滝村
上松町・大桑村・南木曾町・中津川市



18 高瀬家

たかせけ

指定等の状況 未指定

「木曾路はすべて山の中である」で有名な文豪島崎藤村の姉である團の嫁ぎ先で、高瀬家は、山村代官の家臣で代々関所番を務めました。

木曾町

日本遺産 木曾路 構成文化財一覧 19～36



19 御嶽神社里宮

おんたけじんじやさとみや

指定等の状況 未指定

室町時代後期頃から信仰を集め、江戸時代には御嶽山頂に祀られた御嶽山座王大権現の里社として全国にその信仰が広まりました。

木曾町

王滝村



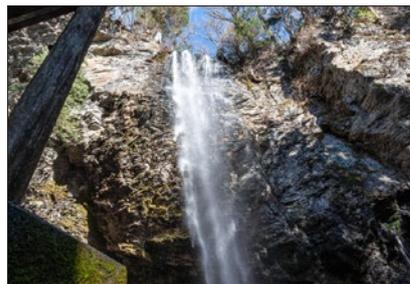
20 清滝

きよたき

指定等の状況 未指定

江戸時代、水行だけの軽進でも御嶽登拝ができるようになり、庶民の信仰も集め、木曾谷を訪れる人が増加しました。

王滝村



21 新滝

しんたき

指定等の状況 未指定

清滝と同じく、御嶽山修験者が修行する場所で、木曾谷を訪れる人が増加しました。滝裏に小さな岩祠があり、滝を裏側から見る事ができるので裏見滝とも呼ばれます。

王滝村



22 百草元祖の碑

ひやくそうがんそのひ

指定等の状況 未指定

「百草」は、三岳黒沢口を開いた尾張の行者・覚明(かくめい)と、王滝口を開いた武蔵国の行者・普寛(ふかん)によって伝授されたといわれ、御嶽信仰の普及とともに、「御神薬」として行者たちによって全国の信者に配布されるようになったと伝えられています。

王滝村



23 木曾の森林鉄道

きそのしんりんてつどう

指定等の状況 未指定

小川、王滝森林鉄道を中心に木曾谷一帯に建設されました。今も観光用に樹齢300年の天然林が茂る森林浴発祥の赤沢自然休養林の中を走り抜けています。

塩尻市・木祖村・木曾町・王滝村
上松町・大桑村・南木曾町・中津川市



24 寝覚の床

ねざめのとこ

指定等の状況 国名勝

木曾八景のひとつ。木曾路を通る旅人が訪れ、数々の歌を詠みました。松尾芭蕉も訪れ「ひる顔にひる寝せふもの床の山」の句碑があります。奇岩の渓谷美の景観と浦島太郎伝説があります。

上松町



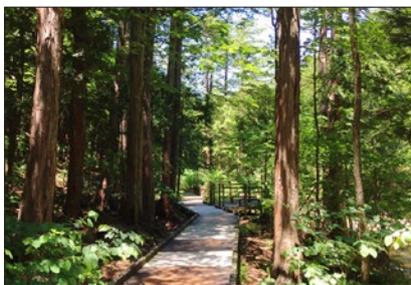
25 木曾の棧

きそのかけはし

指定等の状況 県名勝

上松町道長坂沓掛線(旧国道19号)の下にある橋跡で、長野県の史跡、日本百名橋の番外の1つ。古くは「木曾の棧、太田の渡し、碓氷峠がなけりゃよい」と言われたように中山道の三大難所でした。

上松町



26 赤沢自然休養林

あかさわしぜんきゆうようりん

指定等の状況 未指定

赤沢美林とも言われ樹齢300年を超える木曾ヒノキの天然林があり、2001年に環境省のかけり風景100選に、2006年に林野庁の森林セラピー基地に指定されています。

上松町



27 白山神社

はくさんじんじや

指定等の状況 国重要文化財

1344年(元弘4)に創建された信州最古の社殿。蔵王神社、白山神社、伊豆神社、熊野神社の社殿が鎮座し、4社殿ともに国の重要文化財の指定を受けています。

大桑村



28 定勝寺本堂・庫裏・山門

じょうしょうじほんどう・くり・さんもん

指定等の状況 国重要文化財

定勝寺には、1574年（天正2）に仏殿修理を行った際に「振舞 ソハキリ 金永」（金永さんが蕎麦切りを振る舞った）との記録が残されています。蕎麦を切って食べたことを記した文献としては最古になります。

大桑村



29 阿寺溪谷

あてらけいこく

指定等の状況 未指定

ヒノキ・サワラ・ネズコ・アスナロ・コウヤマキの木曾五木に囲まれた溪谷で、美しい木曾檜の林があります。

大桑村



30 妻籠宿保存地区

つまごじゅくほぞんちく

指定等の状況 国重要伝統的建造物群保存地区

江戸から42番目の宿場として1601年（慶長6）に制定され、江戸期を通じて宿駅としての機能を果たしてきました。宿場景観地区は、江戸期の趣を今も色濃く残した宿場町です。

南木曾町



31 林家住宅

はやしけじゅうたく

指定等の状況 国重要文化財

妻籠宿で、代々、脇本陣・問屋を勤めてきました。将軍家茂の御簾中として御降嫁した皇女和宮が、中山道で通行の折妻籠で昼食をとりました。その際拝領した車付長持をここで見る事ができます。

南木曾町



32 史跡 中山道

しせきなかせんどう

指定等の状況 国史跡

中山道は、1601年（慶長6）に徳川家康により五街道の一つとして、江戸から京都までの重要な街道として整備されました。馬籠峠から根の上峠までの総延長19.6kmのうち、中山道の旧態が良く残っている8.5kmが史跡です。

南木曾町



33 妻籠城跡

つまごじょうあと

指定等の状況 県史跡

戦国時代に整備された城跡。1600年（慶長5）の関ヶ原の戦いの時も妻籠城に軍勢が入っています。曲輪や空堀などは原型をよくとどめています。

南木曾町



34 一石柵立場茶屋

いちこくとちたてばちや

指定等の状況 国重要伝統的建造物群保存地区指定家屋

中山道沿いにある一石柵は、古くから旅人が疲れをいやす休憩地として栄えたところです。現存する建物を無料休憩所として開放し、旅する人を温かくもてなします。

南木曾町



35 南木曾ろくろ細工

なぎそろくろざいく

指定等の状況 国伝統的工艺品

厚い板や丸太をろくろで回転させながらカンナで挽いて形を削り出す伝統技術。「木地師の里」で実演を見ることができます。

南木曾町



36 蘭桧笠

あららぎひのきがさ

指定等の状況 県伝統的工艺品

1662年（寛文2）に飛騨の落辺から来た人によって技法が伝えられた、「ひで」（桧を薄く削って細長い短冊状にしたもの）で編まれた手作りの笠。「笠の家」で実演を見ることができます。

南木曾町

日本遺産 木曽路 構成文化財一覧 ③7～④2



③7 手打ちそば

てうちそば

指定等の状況 県無形民俗文化財

御嶽山修験者に所縁(ゆかり)のある「そば」は開田高原特産となりました。木曽谷は「そば切り」の草分けの地と言われ、蕎麦が木曽の生活に根差した特産品であることを示しています。

塩尻市・木祖村・木曽町・王滝村
上松町・大桑村・南木曽町・中津川市



③8 すんき漬け

すんきづけ

指定等の状況 県無形民俗文化財

御嶽山麓が海から遠く、塩の調達が難しいため、木曽町などでかぶを漬けて発酵させ、塩を使わず酸味を旨味として食べる食文化がうまれました。芭蕉一門も食し、「木曽の酢茎に春も暮れつつ」と門人が詠みました。そばと合わせて食べる「すんきそば」や「とうじそば」は、木曽谷の冬の風物詩になっています。

塩尻市・木祖村・木曽町
王滝村・上松町・大桑村



③9 木曽材木工芸品

きそざいもくこうげいひん

指定等の状況 県伝統的工芸品

木曽五木(ヒノキ・サワラ・アスナロ・コウヤマキ・ネズコ)を素材として作られる木工芸品。江戸時代から作られていた桶樽類、箱物類をはじめ伝統建具やまな板、箸などの日用品まで木製の工芸品が今に伝わっています。

塩尻市・木祖村・木曽町・王滝村
上松町・大桑村・南木曽町



④0 木曽の朴葉巻

きそのほおばまき

指定等の状況 県無形民俗文化財

木曽地域の名物の一つ。米の粉を練ったものに、餡をつめて朴の葉で包んで蒸します。朴の葉が柔らかい5月～6月の餅菓子です。

塩尻市・木祖村・木曽町・王滝村
上松町・大桑村・南木曽町・中津川市



④1 旧帝室林野局木曽支局庁舎

きゅうていしつりんやきょく きそしきょくちようしゃ

指定等の状況 町有形文化財

木曽ヒノキを基軸に森林鉄道等による近代的経営を行った拠点。1927年(昭和2)の大火により焼失しましたが、わずか半年で再建され、木曽山の歴史と皇室の威光を今に伝えています。

木曽町



④2 島崎藤村宅(馬籠宿本陣)跡

しまざきとうそんたく(まごめじゅくほんじん)あと

指定等の状況 岐阜県史跡

馬籠宿の本陣で、隠居所は馬籠宿に残る江戸期の建造物です。

中津川市



水木沢天然林(水木沢郷土の森)

第2章

江戸時代以前の木曾の暮らし
(縄文時代、木年貢、神木、義仲など歴史)

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

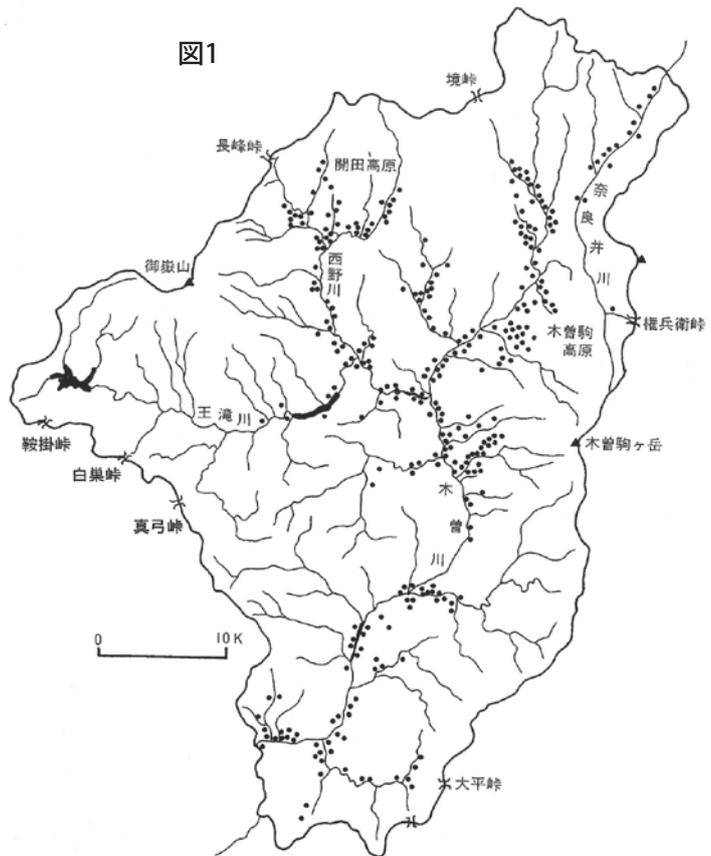
第7章
その他
(観光宣伝など)

縄文時代の木曾

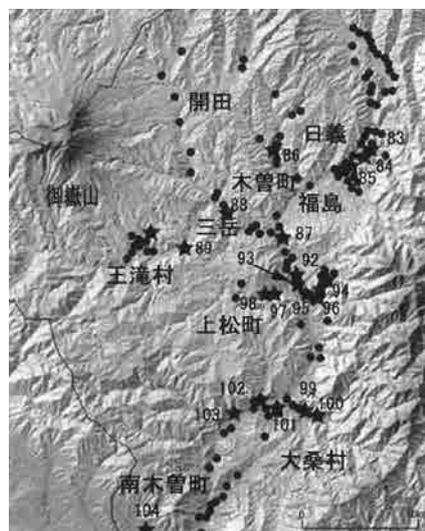
木曾の縄文人の往来と遺跡分布

旧石器時代から獣を追う移動は獣道けものみちを辿って往来していましたが、やがて川沿いを往来し、人の道ができました。川の本流沿いが主な道筋で支流も遡りました。上流では山並みの中に峠を見つけて山越えをしました。

木曾の遺跡は、木曾川や王滝川などの支流に沿って分布しています(図1)、遺跡から出土する土器は峠を越えた地域(松本・伊那・飛騨)で作られたものも多く、当時から峠越えの往来があったことがわかります。



縄文中期遺跡一覧		
番号	遺跡名	所在
83	上の原	
84	お玉の森	木曾町日義
85	マツバリ	
86	島尻	木曾町
87	板敷野	
88	小島	木曾町三岳
89	崩越	王滝村
90	里宮	
91	徳原 A	
92	金比羅	
93	お宮の森裏	
94	日向	上松町
95	田代(井口原)	
96	吉野遺跡群	
97	最中	
98	最中上	
99	大野	
100	田光松原	
101	清水	大桑村
102	万場	
103	川向	
104	太田垣外	南木曾町



■主要参考文献／『村誌大瀧歴史編Ⅰ』(長野県木曾郡王滝村発行 2020 神村透 執筆部分引用)

図2木曾の中期遺跡分布
(『長野県考古学会誌』143,144号表1より抜粋)

ゆうきゆうのほほえみ

悠久のほほ笑み

じんめんそうしよくつきゆうこうつばつきどき

人面装飾付有孔罎付土器

■基本データ

- 種類 人面装飾付き有孔罎付土器
- 発掘場所 大野遺跡・竪穴住居跡より出土
- 年代 縄文時代中期(約4000～5000年前)
- 指定 県宝(2018年)

- 展示 大桑村歴史民俗資料館
木曾郡大桑村殿(大桑スポーツ公園内)1-58
／TEL 0264-55-3550
営業時間 3月上旬～11月下旬



マップQR

- アクセス JR「須原駅」から徒歩10分

人面装飾付有孔罎付土器は、1999年(平成11)大桑村^{おおのいせき}の大野遺跡で発掘された縄文時代中期(約4000～5000年前)の竪穴住居跡から出土しました。現在“日本一大きな顔”とされ、全国的に注目を集めています。2018年(平成30)には、長野県宝にも指定され、愛称も公募の中から“悠久のほほ笑み”に決まりました。



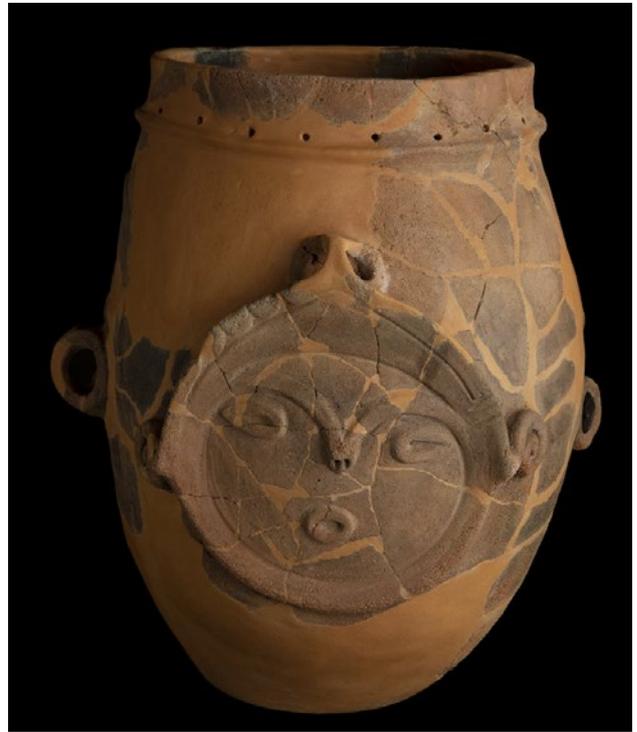
▲有孔罎付土器の特徴を示す部分



▲土器が出土した竪穴式住居の跡(22号住居址)

大野遺跡は1999年(平成11)に発掘調査に着手し、ストーンサークル(環状列石)がほぼ完全な形で残っており、それを取り囲むように建物や竪穴式住居の跡が見つかるなど際立った特徴を見せる遺構が出土しました。

土器は竪穴式住居群の一つから出土したものを復元し2001年(平成13)10月に大桑村指定の有形文化財として指定しました。



大桑村では1996年度～2010年度(平成8～22)に県営中山間地域総合整備事業(ほ場整備)を行いました。この事業と同時に、予定地内にある遺跡の埋蔵文化財^{まいぞう}について記録保存するため発掘調査を行いました。

調査は153遺跡、総面積約38,000㎡にのぼり、どの遺跡からも当時の生活の様子を知る貴重な資料が出土しました。

大桑村歴史民俗資料館

大桑村は縄文時代の遺跡が数多くあり、人々の生活の跡が村内の各所の遺跡に見られます。

大桑村歴史民俗資料館は森林と道をテーマとした村内の埋蔵文化財、中山道、大正時代以降の日用品を展示しています。

ホール天井は、伝統的な小屋組技法によって建てられています。この天井を支えるのは、木曾五木(ヒノキ、コウヤマキ、サワラ、アスナロ、ネズコ)の大木です。



大桑村歴史民俗資料館

おみやのもりうらいせきしゅつどつのくり

お宮の森裏遺跡出土のクリ

■基本データ

- 種類 考古資料
- 発掘場所 お宮の森裏遺跡・竪穴住居跡より出土
- 年代 縄文時代草創期(約12,900~12,700年前)
- 指定 町指定有形文化財(2018年)

所蔵 上松町公民館
木曾郡上松町小川1706/TEL 0264-52-2111



寸法・材質・形状
1 高さ13.2mm、幅12.9mm、厚さ7.9mm、0.34g
2 高さ11.7mm、幅12.5mm、厚さ8.6mm、0.55g

国道19号線のバイパス工事の着工に伴い、1992~1993年(平成4~5)に「お宮の森裏遺跡」の発掘調査が行われました。縄文時代草創期の竪穴住居跡から原形をとどめている縦横約1センチのクリの実2個と、数ミリのかけら約40g(クリの実約90個相当)で、実は皮がむかれた状態でした。

発掘した遺物は町教委が保存。発掘調査報告書においても最古の資料であることが記載されていましたが、2016(平成28年)に放射性炭素年代測定を行った結果、約12,900~12,700年前のものであることが判明しました。クリの子葉しょうとしては国内最古。縄文時代初期の食生活を知る上で貴重な資料だといえます。

がんめんそうしよくつきふかばちけいどき

顔面装飾付深鉢形土器

人面様の装飾が口縁部外面の四方(少なくとも三方向)に施された深鉢形土器で、吉野遺跡群から出土しました。約7.5haという大規模な発掘調査の際、縄文時代中期前葉と位置づけられる礫集中を伴う竪穴住居跡が複数検出され、そのうちの一軒からみつかったものです。悠久のほほ笑み同様、信州の特色ある縄文時代中期の土器として長野県宝に指定されています。

■基本データ
種類:考古資料 発掘場所:吉野遺跡
年代:縄文時代(約5,000年前) 指定:県宝(2018年9/27)
展示:上松町公民館 木曾郡上松町小川1706/TEL 0264-52-2111

おおたがいといせきこはくたいしゅ

太田垣外遺跡琥珀大珠

太田垣外遺跡は、縄文時代中後期を中心とする遺跡で、1994(平成6年)に発掘調査が行われ、住居跡21軒をはじめとした多くの遺構のほか、多数の遺物が出土しました。なかでも琥珀大珠は全国で3番目に大きなもので、琥珀の出土例が多い諏訪方面からの搬入品と推察されています。このことは、これほどの宝玉を所持する特別な祭祀者が太田垣外遺跡に存在したことを示すとともに、この遺跡が木曾南部の拠点集落であったことを裏付けるものです。

■基本データ
種類:考古資料 発掘場所:太田垣外遺跡
年代:縄文時代(約5,000年前) 指定:町指定有形文化財(2004年7/7)
寸法・材質・形状:大きさ一縦4.7cm、横4.2cm c m、厚さ2.7cm
木曾郡南木曾町吾妻2190(南木曾町博物館)

ゆうぜつせんとうき「やなぎまたポイント」

有舌尖頭器「柳又ポイント」

尖頭器(ポイント)という石器は、日本では主におよそ3万から1万1千年前頃(旧石器時代から縄文時代草創期頃)に狩猟に用いられたとされる石製の槍先です。木曾町開田高原は柳又遺跡をはじめとするこの時期の遺跡の密集地で、逆三角形の短い舌部(槍の柄に付ける部分)が特徴的な有舌尖頭器が出土しており、遺跡名を冠して「柳又ポイント」と呼ばれています。当時は氷河期で、寒冷な気候でありながら高原を活動の場としていることから、寒冷環境に適応した大型の動物を狙って狩猟をしていたのかもしれませんが。

氷河期が終わり、温暖化しつつあった約1万1千年前頃になると縄文時代早期となります。この頃には、尖頭器を用いた槍の使用は少なくなり、石鏃を用いた弓矢や犬を使用した狩猟、定住的なムラの生活が本格化し始めます。木曾地域では遺跡の分布が高原から谷地域へと拡散し、環境の変化に伴って生活が大きく変わったことが想像できます。



■基本データ
種類:考古資料 発掘場所:柳又遺跡 木曾郡木曾町開田西野6503-1(ほか)
年代:旧石器時代(約20,000年前) 展示:開田考古博物館

武士の時代へ

きそよしなか みなもとよしなか しなのげんじ かわちげんじ よしかた

木曾義仲の活躍

信濃源氏の武將で 朝日将軍と称された



木曾義仲公(徳音寺所蔵)

木曾義仲(源義仲)は、平安時代末期の信濃源氏の武將です。河内源氏の一族、源義賢の次男として生まれ、源頼朝・義経兄弟とは従兄弟にあたります。『平家物語』においては朝日将軍(旭将軍とも)と呼ばれています。

幼名は駒王丸といい、1155年(久寿2)駒王丸が2歳のとき、大蔵合戦がおこりました。この戦いで義賢やその一族のほとんどが討ち死にし、幼い駒王丸もあやうく殺されてしまうところでした。しかし、畠山重能と斎藤別当実盛のはからいにより駒王丸と母・小枝御前は助けられました。実盛は信濃国(現在の長野県)木曾の中原兼遠に駒王丸の養育を頼み、駒王丸は自らの姓となる木曾の地へ来ることとなります。

『吾妻鏡』(鎌倉時代に成立した日本の歴史書)によれば、駒王丸は乳父である中原兼遠の腕に抱かれて信濃国木曾谷(現在の長野県木曾郡木曾町)に逃れ、兼遠の庇護下に育ち、通称を木曾次郎と名乗りました。諏訪大社に伝わる伝承には一時期、下社の宮司である金刺盛澄に預けられて修行したといわれています。後に手塚光盛などの金刺一族が拳兵当初から中原一族と並ぶ義仲の腹心となっています。

以仁王の令旨(皇族の命令を伝える文書)によって拳兵、都から逃れたその遺児を北陸宮として擁護し、俱利伽羅峠の戦いで平氏の大軍を破って入京しました。連年の飢饉と荒廃した都の治安回復を期待されましたが、治安の回復の遅れと大軍が都に居座ったことによる食糧事情の悪化、皇位継承への介入などにより後白河法皇と不和となります。法住寺合戦に及んで法皇と後鳥羽天皇を幽閉して征東大將軍となりますが、源頼朝が送った源範頼・義経の軍勢により、粟津の戦いで討たれました。

木曾馬と義仲 俱利伽羅峠の合戦

「弓馬の道」といわれたように、義仲の時代、合戦は騎射の争いでした。戦闘能力の優劣は馬と、それを乗りこなす者の力量で決まり、優れた馬を放牧しているところには優れた騎手が育ちます。

拳兵した義仲は信濃と上野の御牧(古代の朝廷の直轄牧場)を押さえることで最強の軍事力を手に入れようとし、32あった全国の御牧の8割を支配下に置きました。

この戦力が威力を発揮した代表的な例は、俱利伽羅峠の合戦です。義仲の先方は、騎乗した勢子(馳せ馬)と馬に乗った射手(待弓)を配置し、平家の大軍を俱利伽羅峠に追い落としました。

義仲をめぐる人々

源義賢 (みなもとのよしかた)

木曾義仲の父。在京時代は東宮御所の舍人(とねり)の長だったことから「帯刀先生(たちはきせんじょう)」と呼ばれました。義仲が2歳のときに、兄である義朝の長男義平に攻められて討たれます。

小枝御前 (さえごぜん)

木曾義仲の母。1155年(久寿2)、夫の義賢が殺されたとき、二歳だった駒王丸(後の義仲)を抱いて武蔵国大蔵から木曾の地まで逃れました。義仲にとっては幼い命を守り通してくれた母といえます。義仲が元服して間もない1168年(仁安3)に亡くなりました。

中原兼遠 (なかはらのかねとお)

木曾義仲の養父。齊藤実盛に懇願された兼遠は、父を討たれ逃れてきた駒王丸を25年間木曾の山下の屋敷に隠して密かに養育しました。

源行家 (みなもとのゆきいえ)

本名を義盛といい、源為義の十男。義仲の叔父にあたります。行家は後白河天皇の第三皇子以仁王(もちひとおう)の平家追討の令旨(りょうじ)を、木曾義仲をはじめ諸国の源氏勢力に伝えた人物です。

義仲四天王と女性武者

根井行親 (ねのいゆきちか)

平安末期佐久地方の根々井に栄えた豪族。1180年(治承4)、木曾義仲が平家追討の挙兵をすると一族で活躍し、勲功をたてました。

樋口次郎兼光 (ひぐちじろうかねみつ)

中原兼遠の次男。義仲の乳母子(めのとご)の一人で、1180年(治承4)義仲に従って上洛した武将です。1183年(寿永2)の俱利伽羅峠の戦では三千騎を率いて大勝利のもとをつくりました。NHK大河ドラマ「天地人」の主人公、直江(なおえ)兼続(かねつぐ)(樋口兼統)は樋口兼光の子孫と言われています。

今井四郎兼平 (いまいしろうかねひら)

中原兼遠の四男、義仲の乳母子の一人で、義仲の最も信頼した豪勇の武将。1184年(元暦元)、近江粟津原の戦での兼平と義仲最期の場面は、「平家物語」に感銘深く描かれています。

楯六郎親忠 (たてろくろうちかただ)

根井行親の子で義仲のために活躍した有力武将。1181年(養和元)、横田河原の戦で親忠は、義仲の命を受けて敵情を偵察し報告したことが「源平盛衰記」に載せられています。

齋藤別当実盛 (さいとうべつとうさねもり)

平安後期の武将。1155年(久寿2)、源義賢が討たれたとき、2歳だった駒王丸の殺害を命じられた畠山重能(はたけやましげよし)は、幼子を殺すのは気の毒だとして齊藤実盛に逃がすよう命じます。実盛は木曾の中原兼遠を頼って駒王丸を密かに逃しました。28年後、義盛は加賀篠原の戦で義仲軍に討たれます。その首が白髪を染めていた命の恩人実盛だと知り、義仲は涙を流したと「平家物語」に記されています。

義仲の妻 伊子 (いし)

関白藤原基房の姫で義仲が入京後妻にした女性。結婚から半年足らずで義仲は討ち死にし未亡人となります。その後久我通親の側室になり、男子を出産。この男子がのちに曹洞宗永平寺を開いた道元です。

義仲の妹 宮菊 (みやぎく)

宮菊は義仲の異母妹で「菊女」とも呼ばれています。宮菊は源頼朝の妻政子と猶子(ゆうし)の契りをしていたといわれます。中津川市馬籠に創建した法明寺は、現在、五輪塔が数基残されている付近がその跡とされています。

巴御前 (ともえごぜん)

義仲の養父中原兼遠の娘で、義仲四天王といわれた樋口次郎兼光、今井四郎兼平兄弟の妹。武術を身につけた美貌の女武者だったと「平家物語」は伝えています。義仲最期のとき、巴は獅子奮迅の働きをします。義仲とともに死ぬことを願いましたが、義仲に諭され涙ながらに落ち延びます。その後、和田義盛の妻となり、91歳で生涯を終えたといわれています。

葵御前 (あおいごぜん)

義仲の挙兵にしたがって戦った女武者。市原の戦のとき義仲側で戦った栗田寺別当範覚の娘といわれています。俱利伽羅峠の戦のとき砺浪山で討死したといわれています。

山吹姫 (やまぶきひめ)

義仲が平氏追討の挙兵をしたとき、これに従って上洛した女性の一人。山吹姫は多様な伝承を持った女性であり、それだけ謎めいた人物でもあります。

木曾義仲ゆかりの中原兼遠、巴御前の歴史を残している 王滝村の秘境 滝越

中原兼遠を祭神として祀る王滝村滝越の八王子神社

王滝村滝越は栄村秋山郷、下伊那の遠山郷と並ぶ秘境の地です。滝越の八王子神社の祭神は、巴御前の父親で義仲を養育した中原兼遠が「祭神」として祀られており、武将が祭神の神社は木曾では唯一の例とされています。

滝越は鎌倉幕府の御家人の対立による敗者が、滝越の奥約10kmの三浦ダム湖底になっている「三浦平」に落ち延び、その後寒冷の三浦平から生活しやすい滝越へ移ったと伝えられています。

1935年(昭和10)頃、三浦ダム建設で王滝森林鉄道が水没するため、路線変更の工事中、三浦平から刀剣16振りが出土。当時の福島警察署へ王滝村役場から届けた書類が残っています。

三浦太夫伝説(地域の落人伝承)が江戸時代の地誌に収録

木曾を領有した尾張藩が、1757年(宝暦7)、家臣松平秀雲に命じて木曾の状況を調査記録し、『吉蘇志略』として刊行しています。秀雲は滝越を訪れ、滝越だけでなく、10km以上奥の三浦山(三浦平)にまで足を運び、吉蘇志略に『和田義盛は戦いに敗れ一族死せり、ただ朝比奈三郎義秀終わるところを知らず。義秀の母は巴女なり。巴女は木曾兼遠むすめの女なり。義秀は外孫なり。滝越の百姓、兼遠を地主神として祀る。』と書いています。これは1213年(建保元)、和田合戦に敗れた和田一族のうち、朝比奈三郎義秀(和田義秀)が三浦平へ落ち延びてきたという滝越の伝承を基に書いたと思われます。和田義秀落人説の他にも、宝治合戦に敗れた三浦家村落人説なども伝えられています。



義仲館

郷土愛が地名に

1874年(明治7)11月7日筑摩県筑摩郡 原野村・宮ノ越村が合併して日義村となりました。村名の由来は木曾義仲が平家討伐の旗挙を行った地であることから、朝「日」將軍木曾「義」仲にちなんで「日義村」と命名されました。現在は木曾郡木曾町日義という地名でその名を残しています。



笹竜胆(ささりんどう)紋
木曾義仲の家紋

木曾義仲関連史跡

木曾町日義周辺



3 旗拳八幡宮 はたあげはちまんぐう 木曾町日義 2150

木曾義仲が、養父中原兼遠と共に京へ上った時、源氏一門が崇敬する石清水八幡宮を勧請したと伝えられています。この辺りは宮ノ原と呼ばれ、木曾義仲が1166年(仁安元)13才で元服した折、館を当地に構えたといわれています。1180年(治承4)当地にて、以仁王(もちひとおう)の令旨を受け千余騎を従えて、平家打倒の旗拳をしました。以来、旗拳八幡宮と呼ばれています。

また、大櫓は、元服を祝って植えられたとも旗拳をした時に植えられたとも云われ、義仲七本櫓といわれた櫓も現存するのは、この櫓のみです。2002年(平成14)3月、日義村の文化遺産として枯幹の保全事業が行われました。大櫓の傍らには、樹齢150年余りの2代目櫓が大櫓からの実生で生育しています。

木曾町新開周辺



1 徳音寺 とくおんじ 木曾町日義 124

源義仲一族の菩提寺。元は、上流の巴ヶ淵近く、山吹山の麓の集落に栢原寺(かやはら)がありましたが、土石流の被害により現在地に移し、徳音寺としたといえます。栢原寺があった集落の地区名は徳音寺といえます。1579年(天正7)大安和尚が中興し、現在の堂宇(どうう)は幕末の再建です。

伝承 義仲が亡くなると、役目を終えた巴御前は竜神の姿に戻り、再び巴ヶ淵の川底に戻りました。その後、その遺徳をしのび、戒名「龍神院殿真藏玄珠大姉」が与えられ義仲の菩提寺である徳音寺に供養塔が建立されました。

宣公郷土館 せんこうきょうどかん (現在、拝観不可)

徳音寺の境内にある1967年(昭和42)開館の歴史博物館。木曾義仲公の遺品を中心に、中山道の宿場町として栄えた宮ノ越宿の民俗資料を展示しています。

木曾義仲の遺品、義仲の守り本尊(兜観音菩薩)、宿場関係資料、義仲・巴御前・樋口次郎兼光・今井四郎兼平らの画像があります。

2 義仲館 よしなかやかた 木曾町日義 290-1

木曾町にゆかりを持つ木曾義仲公や巴御前の存在を後世に継承することを目的に1992年(平成4)に開館した資料館です。開館から30年近くが経過する中、地域内外からの要望を受け、これまで以上に地域に愛され郷土に誇れる施設となることを目指し、2021年(令和3)7月4日にリニューアルオープンしました。



4 巴ヶ淵 ともえがふち 木曾町日義

伝承 巴御前はこの淵で泳ぎの鍛錬や、武芸の修練などを行ったと伝えられています。また、この淵に住む竜神で、義仲の守護神となる為に中原兼遠の娘として生まれてきたという伝説が残されています。

5 林昌寺 りんしょうじ 木曾町日義原野 4296

木曾義仲を養育した中原兼遠(なかはらかねとお)の菩提寺です。1180年(治承4)、義仲が挙兵すると子の樋口兼光と今井兼平はこれに従い、兼遠は出家して林昌寺を建立したといわれています。境内には薬師寺・観音堂・中原兼遠の墓などがあります。

6 中原兼遠館跡 なかはらかねとおやかたあと 木曾町新開

駒王丸(木曾義仲の幼名)が中原兼遠によって源氏からかくまわれ、13歳の元服(げんぶく・公家や武家で、成人になったことを示す儀式)までの幼少期を育てられた屋敷跡といわれています。正面の古松は義仲元服の松と呼ばれ、水田の中の竹林には兼遠塚の碑があります。

7 手習天神 てならいてんじん 木曾町新開町組

町組の旧中山道東側に建つ。山下天神とも呼ばれていました。木曾義仲を養育した中原兼遠が、学問の神として勧進したのが始まりと伝えられています。江戸末期の上田村の宮大工武居仙右衛門作の社殿があり、その横には樹齢千年のイチイの大木が立っています。



8 興禅寺 こうぜんじ 木曾郡木曾町福島 5659

永享6年(1434)木曾氏12代・木曾信道が鎌倉建長寺5世の円覚大華を迎えて創建したと伝わります。

木曾義仲の御影観音は1492～1501年(明応年間)に木曾義元が興禅寺を中興した際に勅使門とともに城山から遷されました。木曾義仲、木曾義康・義昌父子、山村氏歴代の墓地がある。寛永、明治、昭和に3度の大火で往時の面影はほとんど残っていません。

9 長福寺 ちょうふくじ 木曾町福島門前 5690

長福寺には「巴御前の長刀」と伝えられる刀剣があります。1927年(昭和2)の火災で木曾義仲の陣太鼓や馬具などの寺宝を消失しましたが、焼け跡から拾い出された中にこの長刀がありました。



10 定勝寺 じょうしょうじ 大桑村須原 831-1

国指定重要文化財(本堂・庫裏・山門)の定勝寺は、木曾三大寺中の最古刹です。

1387～1389年(嘉慶年間)に木曾家第11代の源親豊が祖先菩提のため木曾川畔に創建しました。

その後、木曾川の洪水により3回流失し、1598年(慶長3)に現在の場所に移建されました。

また、定勝寺には戦国時代木曾谷を支配した戦国大名「木曾義昌」の位牌が安置されているほか、東洋一の木曾ひのき製「定勝だるま」大坐像があります。

日本遺産木曾路 構成文化財 28 定勝寺 99P参照

11 天長院 てんちょういん 大桑村長野 1850

室町時代に木曾家祈願所として建立されました。当時は広徳寺として伊奈川大野地区にあったそうです。

1532～1389年(天文年間)に焼失しましたが、1594年天長院として開山。山門脇には子育て地蔵があります。

通の浮石 かよいのうきいし

伝承 巴御前が礫を木曾川に向かって投げた石が、不思議な事に夜になると川を下り「ヤヨヒ」と呼ばれる所に移動する。通の浮石と伝えられています。



12 かぶと観音 かぶとかんのん 南木曾町読書 3272-5

木曾義仲が木曾谷の南の押さえとして妻籠城を築き、その鬼門に当たる神戸(ごうど)に祠を建て、兜の八幡座の観音像を祀ったのがおこりと伝えられています。

袖振りの松

袖振りの松は義仲が弓を射ようとした際、松の枝が邪魔だったので、巴御前が振袖で幹ごと薙倒したと伝えられています。松くい虫被害により先代の松が伐採され、かぶと観音堂の境内に木舟として再利用されています。現在は巴御前ゆかりの富山県南砺市の「巴塚の松」の実生苗木を植樹しています。近くには義仲が腰掛けたとされる「腰掛石」が残されています。

らっぽしよまつり
らっぽしよ祭り

■基本データ

- 住所 木曾郡木曾町日義德音寺地区
- アクセス JR「宮ノ越駅」から徒歩約10分、伊那ICから25km30分
- 開催日 毎年8月14日
- 連絡先 木曾町役場日義支所／TEL 0264-26-2301



山吹山麓の德音寺集落の子どもたちのお盆行事で、毎年8月14日の夜、山吹山へ登り「木」の字に並べられた木積に点火してから松明たいまつを灯し、山を下り、木曾義仲のお墓をお参りするお盆行事。現在は日義地区の行事として発展し賑わっています。木曾馬に乗った木曾義仲の武者行列も町を練り歩きます。

現在の「らっぽしよ」行事

日義地区の子どもたちが夜7時ころ山吹山山頂で「木の字」に並べた木積を燃やし、松明を灯して下山、木曾義仲や巴御前等に扮した武者行列と一緒に德音寺地区から德音寺まで提灯を灯して行列をし、木曾義仲公墓前で「朝日将軍木曾義仲公万歳」を三唱します。

「木の字焼き」は、1973年(昭和48)に「らっぽしよ保存会」が発足した時から行われており、すでに50年以上続いています。



らっぽしよの起源

木曾氏12代信道(1389~1439)が1434年(永享6)に興禅寺を建立した頃から始まったと、木曾参考要貫伝記(江戸時代に書かれた物)に印されています。

義仲宣公の館が宮腰の橋詰というところにあり、正月21日に仏供をして豆腐と芋を奉供し、宣公祭は7月14日、15日宣公燈明として、上田栗本より松明を興禅寺へ奉ります。この儀式の世話を橋詰からゆかりのものが出かけて行ったと記録されています。

また、武居正二郎著『岐蘇古今沿革志』1914年(大正3)によると、『信道は父の親豊が築いた福島城に居住し、1434年(永享6)遠祖義仲を追福するために興禅寺を建立し、7月14・15日に例祭をもった。夜、東南にある火燃山に里人が登り松明に火をつけ寺に来て相呼叫び、騎馬武者も馳せ来て、太鼓・半鐘をならして凱旋を唱えた。』これは義仲の俱利伽羅峠の勝利を表したものとされています。

室町時代から戦国時代、江戸時代と1868年(慶応4)まで430年、お盆の火祭り行事として続けられてきました。木曾の中心、福島から始まったこの行事は、義仲や木曾氏ゆかりの地である宮ノ越・原野・上田・野尻など、木曾の各地で行われたようです。

1868年(慶応4)まで続いた行事は、明治維新で松明が禁止され廃止となりましたが、1876年(明治9)の宮越青年会の記録によると再開すべく協議され、1892年(明治25)には「街中は松明から提灯に代え再開された」と記述されており、德音寺集落だけで行われる行事となりましたが、少なくとも120年以上昔から現在に近い形で行われてきた行事です。



■主要参考文献／
共同研究「ラッポシヨ考」

林 義泰・田中良作・三澤 弥・田中健治 昭和48年(1973)
「らっぽしよ」木曾町無形民俗文化財 らっぽしよ保存会
ラッポシヨの由来 神村 透(平成20年 公民館報掲載)
義仲の里の「らっぽしよ」 狩戸 昭義(元日義村 教育長)
日義村村誌 下巻

きそおどりときそぶし

木曾踊りと木曾節

■基本データ

- 発祥 木曾地域一帯
- 成立時期 未詳(室町時代の文献に記述あり)
- 連絡先 木曾踊(おどり)保存会(木曾町)
木曾おんたけ観光局/TEL 0264-25-6000
正調木曾踊あげまつ保存会(上松町)
上松町観光情報センター/TEL 0264-52-1133

木曾踊りは、木曾義仲の供養のために行われますが、木曾節は「おんたけ節」に筏師の労働歌「なかのりさん節」などを取り入れたものとされています。

木曾踊りは木曾義仲公の戦勝を記念した霊祭のときに踊られた武者踊りが始まりと言われており、興禅寺境内には「木曾踊発祥之地の碑」があります。現在でも木曾の人々に多く親しまれ、お祭りで輪になって踊ります。



「なかのりさん」とは?

「なかのりさん」は誰のことを指すのでしょうか。有力な説は2つあり、ひとつは木曾川を筏で下るときに、筏の中央に乗った「中乗り」の称号という説です。

もうひとつは、「御座立て(おざたて)」という御嶽山にいる死者の声を聞く儀式からきているとするもの。このとき死者の声を生者に伝える役割を「中座」と言いますが、これは「中宣」を意味し、そこから「なかのり」になったという説です。この場合、他界した先祖が「なかのり」を通して、御嶽山は夏でも寒いと言っていると解釈できます。



木曾節は、木曾で歌われている民謡です。全国的にも「木曾のなかのりさん」から始まる一節は広く知られます。木曾踊りはこれに合わせて踊られるものです。

木曾谷では様々な民謡や踊りが伝えられ、木曾節はその代表的なものです。

木曾節は、尾張地方から、夏でも寒い木曾山へ働きに行く人に、家族が「あわせ」などを持たせてやるという意味がこめられており、尾張地方で発生したとも言われています。

元唄 木曾節

さまざまなものがありますが、一般的な出だし部分は次のとおり。

「木曾のナーなかのりさん
木曾のおんたけナンチャラホイ
夏でも寒いヨイヨイヨイ 裕(あわしよ)ナアなかのりさん
裕やりたやナンチャラホイ 足袋をそえてヨイヨイヨイ
心ナーなかのりさん 心細いよナンチャラホイ
木曾路の旅はヨイヨイヨイ 笠にナーなかのりさん
笠に木の葉がナンチャラホイ 舞いかかるヨイヨイヨイ」

(続く)

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

戦国時代と木曾ヒノキ

木曾地域きねんぐと木年貢

長野県南西部、塩尻市から岐阜県中津川市にかけての木曾地域は、総面積 2,512 km²と小さな県に匹敵する広さを有します。遥かに仰ぐ御嶽山おんたけさん いにしえは古より魂の還る霊山として人々の信仰をあつめ、その裾野を流れる木曾川はヒノキの山林と奇岩の溪谷を映し、木曾川沿いに街道木曾路が続きます。

木曾路を包む木曾谷の約9割は森林地帯です。豊臣秀吉の時代、木曾地域は、狭い耕地の作物だけでは領民を養えない地域として、領民は米年貢(米の年貢)の代わりに木年貢(木の年貢)が課され、領民には木年貢を納めることで米が支給されていました。木年貢は、米が経済の基礎であった江戸時代になっても踏襲とうしゅうされ、森林資源が木曾地域の人々の暮らしを支えました。

木材需要の増大による森林資源の枯渇と 厳しい森林保護政策

木曾ヒノキは、木曾谷の代名詞ともいえる樹種です。木目が緻密で優良な木曾ヒノキは、鎌倉時代に造られた木曾谷最古の神社である白山神社はくさんや池口寺薬師堂ちこうじなど、古来神社仏閣建築に重用されました。

約330年前から、伊勢神宮が20年に1度、お宮を新たに建て替える式年遷宮しきねんせんぐうの際に用いる御神木ごしんぼくとしても使われ続けています。

この名木に危機が訪れたのは、江戸時代前期のことでした。戦国時代が終わり、安土・桃山時代以降、新たな町づくりが進められると、城郭・社寺建築の木材需要が急増し、全国的な森林乱伐らんぼつをもたらしました。江戸幕府から良材むじんぞうの無尽蔵な宝庫と目された木曾谷は、江戸・駿府すんぶ・名古屋の城と城下町などの建設のために膨大な用材きりが伐出され、深刻な森林資源の枯渇こかつに陥りました。

木曾谷を所管する尾張藩は、江戸時代前期

から木曾ヒノキなどの伐木ぼつぼくへの制限に乗り出しました。この制限は、江戸時代中期には木曾谷のほぼ全域に及び、「木一本首一つ 枝一本腕一つ」といわれたヒノキなど木曾五木きそごぼくを伐れば死罪という徹底した森林保護となり、木年貢も廃止されました。この施策は、山林乱伐を防ぐ森林保護政策の先駆ではありましたが、森林資源で暮らしを立てていた木曾の領民にとっては厳しい経済統制となりました。

木曾式伐木運材法

流路を巧みに利用した木曾式伐木運材法

木曾式伐木運材法とは、深い山に囲まれた木曾谷から木材を効率よく運び出すために考案された伐採と運搬の方法です。

木曾川支流や本流を利用して尾張国の白鳥湊まで、木材を流送させていました。

主なプロセスは、「伐倒」→「山落とし」→「小谷狩こたりがり」→「大川狩いかだ」→「筏流し」という5段階です。

「伐倒」で樹木を根本から切り倒した後、「山落とし」で、小谷まで木材を下ろし、「小谷狩」という工程で本流まで木材を運び、「大川狩」では丸太の状態丸太の状態で木曾川本流を運送。その後丸太を筏に組んだ「筏流し」で最終地点の白鳥湊まで運送しました。

伐木作業 1.伐倒

伐倒作業は、杣仕事の中で最も危険な作業とされていました。それは、伐倒方向の不確実性や単独作業等、様々な危険と隣り合わせだからです。

そこで先人は、「三つ紐切り」という伐倒方法を編み出しました。三つ紐伐りは、鼻緒伐りとも呼ばれ、木の幹に3方向から斧を入れ、3箇所につるを残して伐倒する方法です。この方法は伐倒方向が確実に決まるため安全で、立木が倒れるときに材への損傷が少ないことが特徴です。また、三つ紐伐りは、斧のみで立木を倒す方法で、熟練した斧を自由自在に操る技術が必要です。

三つ紐伐りは、昭和30年代に、アメリカ製のチェーンソーが導入されたことにより、次第に使われなくなりましたが、20年毎に行われる伊勢神宮の式年遷宮の行事では、現在でも「三つ紐伐り」によって御神木を伐採しています。



伐倒作業風景



枝払い風景

2.造材

造材作業は、枝払いと玉切りに分かれます。伐倒後、幹から梢端部に向けて枝打ち専用の斧で枝払いをし、立木を幹だけの丸裸状態にします。

玉切りは樹種ごとに寸法が決まっていますが、竹を小割にして造った間竿によって長さを測定し、斧や鋸で切断しました。その後、楔を用いて木材を割ったり削ったりし角材や板材を造ります。また、材の前後を斧で削って丸く仕上げる頭巾巻きを行い、集材・運材による木材の割れ等を防ぎます。

3.剥皮(はくひ)

木曾ヒノキの樹皮は、檜皮葺(ひわだぶき)で知られているように屋根にふきます。木曾では、蘭地区が檜皮葺で有名です。

山元で木材の剥皮をする目的は、木材の滑りをよくし、運材・集材作業を楽に行うためでした。



木曾式伐木運材図会【上巻】5.元伐(もとぎり)之図2



木曾式伐木運材図会【上巻】7.墨打之図

集材作業 1.木寄せ

木寄せ作業とは、材木を寄せ集める作業で、「ボサ抜き」と「山落とし」に分かれます。ボサ抜きは、ササや灌木、払われた枝等から材木を引っ張り出す作業で、山落としは、傾斜面を落としたり引っ張ったりする作業です。この作業は、材木が滑りやすく地表も軟らかい雨の日や雨上がりに好んで行われていました。



修羅

2.修羅(しゅら)

修羅とは、丸太を弧形に並べてその上を木材を滑らせて、後ろから壊しながら前へ前へと運んでいく装置で、ただ地表を滑らせて運ぶものは土修羅と言いました。

「棧手(さで)」というものもあり、修羅と同様に材木を用いて流路を造り材木を下流に運ぶ装置ですが、修羅とは違い、流路となる面に板や木の枝、灌木を編んで置いたり、枝条を積み並べてその上を土砂で覆ったりしたもので傾斜が大きくなる場所に設けました。方向転換地点には木や枝、皮などを置いた「臼」を設けて、減速・転換の装置を備えていました。

また、傾斜が急な場合は、材木が滑って転がる可能性があり、割れや折れが起きたり小屋をつぶす恐れもありました。そのため、危険な箇所には「留め」といい、傾斜に反対の受け装置を備えました。

運材作業 1.小谷狩り

「小谷(こたり)狩り」とは、木曾川本流の合流点まで、修羅や棧手を使って材木を運ぶ工程をいいます。谷に材木を組んで空いた所に木皮や草、草の根などで水を漏れないよう堰を造り、水を溜めて材木を浮かべておき、堰に連なる流導路として修羅や棧手を組み込み、水切り装置を外すと一斉に水と材木が流れ出した「鉄砲出し」が造られます。堰を外した瞬間は豪壮だったそうです。



小谷狩り

小谷狩りの留堰跡(とめぜきあと)

赤沢自然休養林に向かう途中の小川に、木曾式伐木運材法の遺構「小谷狩の留堰跡」があります。1904年(明治37)、当時の御料局によって築造されました。兩岸の岩を掘り割って大がかりな堰を造った場所で、このような遺構が残っているところは、木曾でもほかにはありません。

2.大川狩り

木曾川本流から錦織綱場(現在、岐阜県八百津町)までの運材行程を、大川狩りといいます。川の流れを利用して材木を上手に流れに誘導する作業で、台風期が過ぎた9月以降に行われました。

また、錦織には材木を一端止める綱場があり、その場で材木を筏に組んで1つの筏に3人乗って、名古屋にある白鳥貯木場や伊勢湾の桑名まで運んでいました。



木曾式伐木運材図会【下巻】16.尾州白鳥湊之図1

「木曾式伐木運材図会」

江戸時代後期頃の木曾地方や飛騨地方で行われていた伐木や運材の技術についての絵図、「木曾式伐木運材図会」が現在、林業遺産に登録されています。「木曾式伐木運材図会」は、奥山で大木を伐採するところから、造材、搬出・集材、木曾川でのいかだによる流送、熱田白鳥木場(愛知県名古屋)での集積、大型船による海上輸送までの様子が、絵巻物2巻(上巻10m×40cm、下巻13m×40cm)に、作業工程順に絵図と詞書で説明されています。

「図会」の作者、製作時期、製作目的、中部森林管理局に保管されている経緯等については、それらを明らかにする文献等が見つかっておらず明確ではありませんが、岐阜県高山市で江戸時代後期に製作された絵図をオリジナルとし、林業・木材産業に関する博覧会への出展や皇族・政府高官等への説明用として、明治時代に製作されたであろうと推測されています。

■資料提供／

中部森林管理局

住所: 〒380-8575 長野県長野市大字栗田715-5

電話: 026-236-2720(代表) 026-236-2721(夜間・休日)

法人番号: 4000012080002



「木曾式伐木運材図会」
(きそしきばつほうくんざいずえ)



木曾式伐木運材法

武田家と木曾氏

木曾氏のはじまり

戦国時代の後半期、木曾氏は地形の険しい木曾谷の要害と豊かな山林資源を背景とする木曾の領主として、小笠原氏、村上氏、諏訪氏と並んで信濃四大将の一人に数えられました。

その系譜について、木曾氏関係の諸記録は六条判官為義ろくじょうほうがん ためよしの孫、源義賢の次男義仲が、木曾に住んで木曾氏を称するようになったと伝えています。『西筑摩郡誌』にしちくまぐんしで木曾氏の経歴をたどってみると、初代を木曾義仲とし、1233年(天福2)二代義重は將軍頼経から木曾と仁科を賜り、甲斐にいた弟の四郎義宗を迎えて木曾を譲ります。木曾を譲られた義宗は義茂と改め、以後、基家、家仲、家教と続き、家村のとき元弘・建武の争乱に際し、足利尊氏に属して軍功を上げ、尊氏から本領の木曾を与えられ、木曾氏中興の祖になったのだと伝えています。

木曾氏の発展

木曾氏において画期となったのは、尊氏に属して活躍したという家村の代です。系図を見ると家村の子女が木曾谷の各地に分出して、木曾谷の土豪である黒川氏、千村氏、馬場氏らの先祖になっています。尊氏に属して度々の戦功をあげた家村は信濃国、近江国などに所領を与えられ、讃岐守さぬきのかみにも任官。そして、須原に館を構え、妻籠に城を築き、木曾の各所に砦を築き兵を置いたといわれています。

家村ののち、家道・家頼・家親と続き、家親は1385年(正中2)に御嶽神社の若宮を建立、次の親豊は1400年(応永7)に須原と原野の間に道路を造り、同14年には小丸山城(福島城)、1430年(永享2)には須原に定勝寺を建立しています。そして、親豊の代における木曾谷全域にわたる領有化は、以後、順調に進んだようで、親豊四代の孫家賢による1455年(享徳4)の定勝寺住持補任状中に、木曾谷全域を象徴的にとらえた表現と考えられる「木曾庄」の文言が使用されていることからうかがわれます。

さらに家豊いえとよが1466年(文正元)に興禅寺に寄進したといわれる梵鐘銘には、「大檀那源朝臣家豊だいたんな みなもとあそん」とあったことが知られています。このことから、木曾氏が源氏を意識するようになり、木曾義仲の子孫であるという考え方を持つようになったのは家豊の時代であったと考えられます。

木曾氏と武田信玄

木曾氏が戦国時代を迎えるのは、家豊の子義元の時代のあたりからで、義元は小笠原氏に攻められた洗馬の三村氏を援けて出陣し小笠原氏に勝利しています。

一方、義元の息子の義在は木曾谷の道路改修に乗り出します。1533年(天文2)には、妻籠しんせばから新洗馬までの宿駅を定め、さらに、美濃国落合から塩尻に抜ける木曾の本道を開いて木曾を通過する旅人を増やし、また、材木の商品化にも努めるなどして経済力を高めていきました。このようにして、義在は内政の充実と、安定に富んだ政治状況を木曾谷全域に築いたといわれています。

1542年(天文11)、内政重視策をとった義在から家督を相続した義康は、小笠原長時や諏訪氏と友好関係を築きあげ、木曾氏は北信の村上義清、小笠原・諏訪氏と並んで信濃四大将と称されるまでの勢力に成長します。しかし、この時代は隣国甲斐の戦国大名武田晴信(のちの信玄)が急激に勢力を増している時期でもありました。

信玄は1542年(天文11)から3年ほどで諏訪・伊那方面を制圧し、さらに1548年(天文17)には府中の小笠原長時を塩尻峠の合戦に一蹴、中・南信の大半を軍事経略しました。この間、義康は福島城を拠点に防備を固め、翌18年には信玄の木曾来攻を鳥居峠に迎え撃ち一旦は撃退したものの、1555年(天文24)春に至って信玄が木曾攻略を本格化すると、ついに義康は信玄に屈服しました。

武田氏麾下(きか)の有力武将へ

武田氏に帰服した結果、義康は娘の岩姫を人質として甲府に送り、代わりに信玄の三女を息男義昌の妻女とする縁組を得ます。以後、木曾氏は武田氏の親族衆として厚遇されることになり、木曾谷の領知権は従前通り義康に安堵されました。

義康の跡を継いだ義昌は、1564年(永禄7)、信玄が飛騨の江馬時盛救援のために出兵を試みた際、宿臣の山村氏を派遣して信玄に加勢。この飛騨派兵後、義昌は、知行宛行などの領政文書を家臣に発給して、主従制を確立。領主・新国主としての戦国大名の形容を名実ともに整えました。

1573年(元亀4)に信玄が死没すると、後を嗣いだ勝頼が「長篠の合戦」に敗北して武田氏は衰勢に傾きます。そこで木曾義昌は、1580年(天正8)、織田信長の誘いに応じて武田氏に離叛。勝頼は義昌を攻撃してきましたが、義昌は信長の武田討伐策との連携によって武田軍を撃退。木曾谷の当知行安堵のほか、安曇・筑摩両郡の一色宛行を受け、深志城主(今の松本城)の地位を得ました。

ところが、わずか三か月後「本能寺の変」が起こり信長が横死すると、深志退城を余儀なくされ、今度は徳川家康と盟約を結びます。1584年(天正12)春、家康と豊臣秀吉との反目がこうじて「小牧・長久手の役」が生じる前後の段階で、義昌は家康との盟約を反故にして、次子義春を秀吉の人質に入れ秀吉と提携。その後、家康と秀吉の間に和議が成立、義昌はふたたび家康の麾下(指揮下に入ること)に繰り入れられることになりました。

木曾氏の没落

1590年(天正18)の小田原攻めの後、家康は関東に所替えとなりましたが、この折、義昌は、家康に豊かな山林資源を抱える木曾谷から下総国海上郡阿知戸(しもふさのくにかいじょうぐんあちど)のわずか一万石に移るよう命じられます。これによって、多くの譜代家臣も流浪させるほどに経済的にも逼迫した義昌は、1595年(文禄4)阿知戸城で不遇な晩年を終えたと伝えられます。

長子の義利は、叔父の上松義豊を殺害するなど粗暴な振る舞いによって、家康に追放されました。義利の改易後、義利の母真竜院(信玄の娘)は末子の義通を伴って木曾に帰り黒沢で静かに暮らしたと言われています。ここに至って、木曾谷を根拠地に戦国大名として覇を唱えた木曾氏は歴史の表舞台から脱落し、歴史の陰に埋没してしまいました。

木曾氏の墓 葦崎市重要有形文化財

葦崎市藤井町の光明寺に木曾氏の墓があります。墓碑に「嫡子千太郎殿十三歳、同老母七十歳。同息女十七歳」と刻まれています。

木曾福島城主、木曾義昌は当時武田方についていました。その為、嫡男千太郎は武田勝頼に人質として葦崎の地におかれていました。

1581年(天正9)に義昌は織田方に寝返り、その裏切りを知った勝頼は激怒します。その翌年、織田信忠(織田信長長男)軍に追われ、葦崎の新府城を脱出する1582年(天正10)3月1日、新府城を人質もろとも焼き払いました。木曾義昌の母、娘、千太郎とも処刑されたといわれています。

後年、千太郎を預かっていた勝頼の家臣、上野豊後守の子孫が、戦国の世に消えた三人を哀れみ、光明寺を建立しました。



写真提供/光明寺
葦崎市藤井町 木曾氏の墓

構成文化財⑤

文化

塩尻市

大桑村

そばきりはっしょうのさと

蕎麦切り発祥の里

■基本データ

名称	本山そばの里
住所	塩尻市宗賀4404-1
営業時間	11:00~16:00
定休日	4~12月は無休。1~3月は月曜日。
連絡先	TEL 0263-54-6371
アクセス	JR「日出塩駅・洗馬駅」からタクシーで約10分



名称	定勝寺
住所	木曾郡大桑村須原831-1
アクセス	JR「須原駅」から徒歩10分
営業	8:30~17:00(冬季は16:00頃) 定休日 無休
料金	大人300円、子ども100円
連絡先	定勝寺/TEL0264-55-3031
指定	国重要文化財(1952年)



現在のように蕎麦を切って食すようになるのが、いつ・どこで始まったのかについては諸説あり定かではありませんが、文書等で塩尻市の本山宿、大桑村の定勝寺を発祥とする記録が残されているなど、木曾谷が蕎麦切り発祥の里の有力地の一つとして考えられます。

発祥の里①塩尻市本山宿

*ふうぞくもんぜん

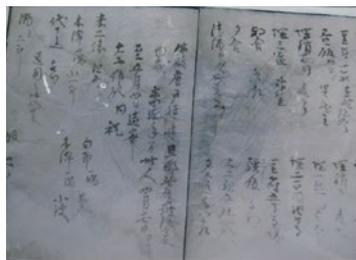
「風俗文選」によると「蕎麦切りというのは、もと信濃の国本山宿より出て、あまねく国にもてはやされける・・」とあり、同地が蕎麦切り発祥の地の一つとされています。本山宿近くの国道沿いには「蕎麦切り発祥の里」の木柱が建てられています。

* 風俗文選(ふうぞくもんぜん) 芭蕉の門下、森川許六により宝永4年(1707)芭蕉・素堂・其角ら蕉門俳人29人の文章116編を収録した俳文集。



発祥の里②大桑村定勝寺

番匠作領(料)日記(1573~1577年(天正元~天正5))に「振舞ソハキリ」金永、「ソハフクローズ千淡内」ほかに強飯、清酒、豆腐、白米などと記されています。大桑村の定勝寺の仏殿修理工事にそば切りを振る舞ったという記録が残っています。



定勝寺・古文書に見る「振舞ソハキリ」が登場する「番匠作事日記」(部分)

地産地消ならではの蕎麦

本山宿にあるそば店「本山蕎麦の里」では、店の周りの畑に地元の住民が蕎麦の種を撒き、収穫、製粉、手打ちした蕎麦を提供し、今でも地産地消ならではの蕎麦の味を楽しめます。秋になると店の周囲では真っ白な蕎麦畑の景色が望めます。

また、木曾では冬に温かいそばに「すんき」を入れて食べる「すんきそば」が風物詩になっている地域があるほか、開田高原では柄のついた籠に茹でた蕎麦を入れ、だし汁の入った鍋にくぐらせて食べる「とうじそば」があるなど、地域独特の食べ方で風情を楽しむことができます。

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

木祖村史跡 鳥居峠

■基本データ

住所 木曽郡木祖村大字藪原
 指定 村史跡
 連絡先 (一社)木祖村観光協会
 /TEL 0264-36-2543



マップQR



木曽路の北端、藪原宿と奈良井宿の間にある旧中山道に位置する、標高1,197mの約6kmの峠道です。中山道の中で最も難所といわれました。峠の東麓は奈良井で、西麓は木祖村藪原となり、頂上は木祖村に属します。木曽川と信濃川の上流である奈良井川の分水嶺です。

頂上からは、西に御嶽山、南に駒ヶ岳、北は木曽ヒノキの国有林を望み、眼下には木曽川と小木曽、藪原の家並みが見えます。最寄りの藪原駅から頂上までは約3km、頂上から奈良井駅まで3.6km。1971年(昭和46)に「信濃路自然歩道」として長野県から指定されました。

名前の由来となった鳥居や御嶽山遥拝所、芭蕉の句碑などの史跡、トチの木の巨木の群生地などがあり、趣豊かなトレッキングコースとして、新緑や紅葉の季節は多くのハイカーが訪れます。

鳥居峠の歴史

峠の歴史は古く、713年(和銅6)の「^{しよくにほんぎ}続日本記」に、^{きそじ}吉蘇路の開通、879年(元慶3)「日本三代実録」に^{あがたざかみね}信濃と美濃の国境とされた^{あがたざかみね}県坂岑の峠が記されています。この県坂岑が鳥居峠といわれています。

その後、中世には奈良井峠、藪原峠と呼ばれました。峠の呼称は超えていく先の地名で呼ぶ習わしがあったため、奈良井から越える人には藪原峠であり、藪原から越える人にとっては、奈良井峠でした。

鳥居峠と呼ばれるようになったのは、戦国時代。頂上には古くから「御嶽の四門」のひとつといわれた^{ようはいじよ}遥拝所がありました。1492～1501年(明応年間)木曽義元が松本の小笠原氏と戦った際、ここから御嶽大権現を^{ようはい}遥拝して戦勝を祈願したところ、大勝利をおさめました。戦勝の礼

として、義元がここに鳥居を建てたことから、以降は鳥居峠と呼ぶようになったと言われています。

戦国時代、この峠は木曽氏の木曽防衛の要衝となり、天文、天正の二度、甲州勢をここで打ち破った古戦場でもあります。丸山公園には芭蕉らの句碑とともに、古戦場の由来を記した石碑が建っています。

江戸時代は、中山道を往来する人々でにぎわい、頂上には茶屋が設けられていました。

遥拝所付近には御嶽を信仰する講社の人々が建てた霊神碑が立ち並び、往時の賑わいぶりが偲べれます。江戸時代末期には、皇女和宮もここを通りました。

1910年(明治43)に国鉄中央西線の鳥居トンネルが開通してからは通行人が途絶えました。

とりいとうげのとちのきぐん

鳥居峠のトチノキ群

■基本データ

- 住所 木曽郡木祖村大字藪原
- 指定 村天然記念物
- 連絡先 (一社)木祖村観光協会
TEL 0264-36-2543



マップQR

鳥居峠のトチノキ群は村の天然記念物に指定されています。桁の木の巨木が林立し、断崖に大きな穴のあいた古木があります。



第1章
日本遺産とは
日本遺産木曽路

第2章
江戸時代以前の
木曽の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曽路11宿

第5章
明治以降の木曽檜活用、
森林鉄道

第6章
木曽の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

●芭蕉の句碑

遥拝所の近く、丸山公園には4基の句碑があります。江戸時代の木曽谷では上級町人の中で俳諧が流行し、木曽路11宿の街道沿いに句碑が12基も建てられました。そのうちの三分の一が鳥居峠にあります。芭蕉の句碑は以下の2つです。

「木曽の桁 うき世の人の 土産かな」
「ひばりより うへにやすらふ 峠かな」



●日本一高い森林測候所跡

丸山公園の下方の平地には、明治41年に木祖森林測候所が設けられ、気象観測が行なわれていました。当時、森林測候所のなかで最も高い標高にあることで有名だったといえます。

●御嶽神社(御嶽遥拝所)

境内には御岳山を信仰する講社の信者が建てた霊神碑や神像が立ち並んでいます。御嶽山を望む遥拝所の案内版があります。

●「子産の桁」の伝承

鳥居峠には桁の大木があります。昔、この幹の空洞に捨て子があり、子室に恵まれなかった藪原の夫婦がひきとって育て、幸せにしたという「子産の桁」伝説が残っています。この実を煎じて飲むと子室に恵まれるといういい伝えがあります。

●葬沢(ほうむりさわ)の伝承

木曽・武田軍がこの峠で激突し、武田軍は敗北し、亡くなった兵士と馬で谷が埋まったといわれています。

●菊池寛の小説の舞台となった「中の茶屋」跡

菊池寛の『恩讐の彼方に』の主人公が浅草で人を殺し、主人の妾と逃亡した先で始めたのが、この茶屋という設定です。

観光ガイド

●中山道鳥居峠越えコース

(一社)木祖村観光協会では、藪原宿～鳥居峠～奈良井宿間を有料ガイドの派遣をおこなっています。

藪原駅～本陣跡～御鷹匠役所跡～消防署横～石畳分岐～丸山公園～御嶽神社(御嶽遥拝所)～峠の茶屋～中の茶屋～鎮神社～奈良井駅

所要時間:約3時間(峠越えのみ)

*藪原宿・奈良井宿の散策、鳥居峠での昼食などのオプションを含むと約4時間

料金:5,500円(1名～5名)、8,500円(6名～15名)

連絡先:(一社)木祖村観光協会/TEL0264-36-2543

つまごじょうあと

妻籠城跡

■基本データ

住所 長野県木曾郡南木曾町吾妻

アクセス JR「南木曾駅」から徒歩約40分、
保神・馬籠行きバスで10分(妻籠下車)。
中津川ICから約30分

連絡先 (一社)南木曾町観光協会/TEL 0264-57-3123

指定 県史跡(2004年)

城郭構造:山城 築城主:遠山氏(推定)

築城年:室町時代中期 廃城年:元和2年(1616年)

遺構:曲輪、空堀など



マップQR



戦国時代に整備された城跡。1600年(慶長5)の関ヶ原の戦いの時も妻籠城に軍勢が入っています。曲輪や空堀などは原型をよくとどめています。

妻籠城は木曾谷の南を固めた城で、主郭・二の郭・空堀・^{くるわ}曲輪をそなえた規模の大きな山城でした。

1584年(天正12)の小牧・長久手の戦いで、徳川の大軍に対し難攻不落を誇ったと伝えられており、ここが木曾谷の命脈を握る要衝であったことがわかります。1616年(元和2)の一国一城令により、廃城になりました。

現在は主郭跡などが広場となって解放されており、眼下に妻籠宿、馬籠峠・三留野の眺望がすばらしいです。

妻籠城の歴史

あらさがし

妻籠の城山は、木曾川と蘭川の合流点を眼下に望む独立峰(高さ521m)で、典型的な山城の形態を持っています。いつの時代に築かれたものか判明していませんが、15世紀前半には藤原氏(後の木曾氏)が木曾谷一円を支配したので、室町時代中期には築城されていた可能性があります。

木曾は地理的に重要であり、とくに妻籠は何度も攻防の拠点となりました。このため戦国時代の木曾氏は、甲斐から南下を企てる武田信玄・勝頼と、阻止しようとする織田信長という強力な武将の間で小大名の苦悩を味わい、その後も豊臣秀吉と徳川家康の間で揺れ続けました。

1584年(天正12)、秀吉と家康が天下を賭けて激突した小牧・長久手の戦いにおいて、秀吉側についた木曾義昌は家臣の山村良勝に妻籠城を守らせました。軍勢はわずかに300騎。対する家康方は7,000余騎。数の上では圧倒されましたが、籠城作戦が功を奏し、家康軍を敗走させました。

江戸時代に山村良景が編述した『木曾考』には、妻籠城を「四方を高山が囲み、松柏が茂り、後には木曾川が流れている要害の地」と記し、攻め上る家康軍に城中から大石大木を投げ出し、鉄砲を撃ちかけて撃退する様子を記述しています。その後籠城が続くも、木曾軍は与川地区(よがわちく)の郷民に旗を持たせてのろしをあげ、夜にはかがり火を焚き、秀吉方から援軍が来たと思わせる等の策略を用い、ついに家康側を敗北に追い込んでいます。

このとき籠城した者の中には、後に馬籠の間屋・本陣を勤め、子孫に島崎藤村を生み出す島崎監物がいました。

木曾氏は程なく移封されましたが、家臣たちは関ヶ原の戦いで今度は家康側について妻籠城に陣を構え、秀忠軍を迎えました。家康は大阪冬の陣でも妻籠城に軍勢を配していましたが、それ以降は廃城となり、現在では空堀の痕跡が往時の名残をとどめています。



城山からの妻籠宿・馬籠峠の眺望

第3章

尾張藩による森林保護と地場産業の奨励
(加工品産地として発展)

尾張藩による森林保護政策

木曾ヒノキをめぐる歴史

豊臣秀吉は木曾ヒノキを資源として高く評価し、天下統一後、木曾谷を直轄領としました。秀吉の没後、天下を取った徳川家康も同様で、江戸城の建築をはじめとする新都市建設のためなどに木曾谷のヒノキが使われました。

その後、木曾谷の木材権益は徳川御三家の尾張藩に引き継がれ、非常に多くの木材を利用していきます。良材の抜き伐りが行われ、伐られた木材は築城や造船、土木用材等のために利用、約100年間に及ぶ大量伐採により、木曾谷の木材資源は枯渇していきます。その後、露出した地面に自然に生え育ったものが、今日の樹齢300年クラスのヒノキです。

1600年代の過剰な伐採によって減ってしまった木を守るため、尾張藩は1708年(宝永6)にヒノキ、サワラ、アスビ(アスナロ、ヒバ)、コウヤマキの4樹種を「ちょうじぼく停止木」に指定し、後にネズコも加えられました。これが五木禁伐木制度です。ヒノキを守るため、誤伐採の言い逃れができないよう、葉や樹皮の似たものを一括して禁じたものです。

五木禁伐木制度で、住民の自家用、仕事用の伐採も規制され、木曾から他領に通じる道には「白木改番所」が設けられました。違反すれば^{はりつけ}厳罰となり、磔や打首にさせられました。

尾張藩の森林政策は木曾の山の荒廃を防ぎましたが、山麓に暮らしながら木材が自由に使えず山に入ることさえ禁じられた地元住民は大変苦勞し、その罰は「木一本首一つ」ともいわれました。



山村代官屋敷下屋敷の庭園

やまむらだいかんやしき

山村代官屋敷

■基本データ

- 住所 木曾郡木曾町福島5808-1
- アクセス JR「木曾福島駅」から徒歩約15分。
伊那ICから30km40分
- 連絡先 TEL 0264-34-3160
- 指定 町有形文化財(1996年)



マップQR



江戸時代を通して、木曾谷を統治した山村氏の屋敷。山村氏は、約280年間にわたって代官の職務を担い続けました。

江戸時代を通して 木曾を治めた山村氏

山村氏は戦国大名木曾氏の旧臣で、1600年(慶長5)の関ヶ原の戦いでの功績により木曾代官を命じられ、同時に福島関所を預かり、以来明治維新まで木曾路11宿をふくむ木曾一帯を治めました。

大坂夏の陣後は尾張藩に属し、石高5,700石(1石は約180ℓ)に白木5,000駄(1駄は馬1頭に背負わせるくらい)が与えられ、福島関所の関守として幕府から旗本の一種、交替寄合の待遇を許されていました。

当時の屋敷図に見る壮大な屋敷構えは島崎藤村の「夜明け前」に書かれています。現存する遺構は下屋敷の一部で、1723年(享保8)以降に再建された12代良禎公たかのりの書齋かんうさん「看雨山房ぼう」の書院づくりの座敷を中心に数室からなる「城陽亭じょうようてい」とその庭園です。また隣接する福島小学校敷地には、旧本邸の石垣の一部が残っています。

福島関所の関守(関所を守る役人)と木曾代官を兼ねていた山村氏は、江戸と名古屋にも屋敷を持つとても豊かな武家でした。その権力は強大で、「木曾の旦那様」といわれ、屋敷は大きく大変立派なものでした。

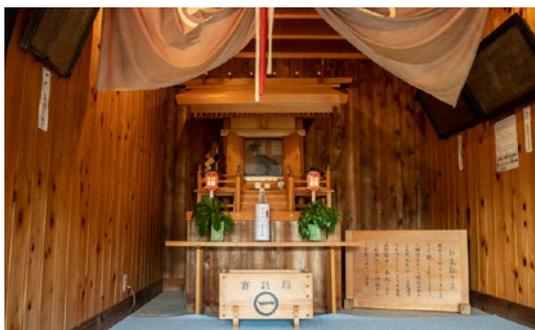
代官屋敷は中山道の福島宿本陣から木曾川を超えた対岸にあり、上屋敷があった場所は現在、福島小学校の敷地となっています。江戸時代の貴重な資料や甲冑、当時の豊かさが偲ばれる品々が展示され一般に公開されています。

1828年(文政11)の屋敷図によると、庭園が20もあり、そのうち築山泉水式の庭が5つ。そのひとつが現存する下屋敷の庭で、木曾駒ヶ岳を借景としています。

お末社様

江戸時代、代官家を守る「山村いなり」に「木遣りを歌う」キツネが住んでおり「おまつしゃさま」と呼ばれました。町の人たちはその歌で吉凶を占ったといわれています。

明治時代、屋敷が取り壊されるという時に床下からキツネのミイラが発見されました。それ以来お稲荷さんの御神体として屋敷内に祀られています。



*木遣り(きやり)は、労働歌の一つ、木遣り歌・木遣り唄とも。本来は作業唄だが、民謡や祭礼の唄として、各地に伝承されている。

みずきさわてんねりん

水木沢天然林

みずきさわきょうどのもり
(水木沢郷土の森)

■基本データ

標高 標高:管理棟(1,223m)、最標高地点(1,565m)

所在地 木曾郡木祖村小木曾

開山 平成3年に約80haを公開

連絡先 (一社)木祖村観光協会

／TEL 0264-36-2543

指定等の状況 中部森林管理局と「郷土の森」として保存協定



マップQR



第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

江戸時代、城や城下町を造るために木曾山の木が皆伐された後、僅かに残された木から自然に種が芽生え、現在の森が形成されました。

現在樹齢約550年の巨木のサワラを始め、300年以上のヒノキやブナ、ミズナラ、トチノキなどの針葉樹と、広葉樹が混交する原生林です。トチノキが多いのは、トチの実を食用にしていたからです。

水木沢は笹川の支流のひとつで、木祖村の西側に位置する大笹沢山(2,040m)の稜線近くから流れ出す川幅約2.5mの小さな流れ。小支流でありながらその流域には樹齢200年前後の木曾ヒノキ・サワラ・ネズコや亜高山性のウラジロモミの他、ブナ・トチノキ・ホウノキなどの広葉樹の巨木が多く育成しており、針葉樹と広葉樹が混交した大変貴重な天然林です。

1991年(平成3)に当時の長野営林局(現中部森林管理局)と木祖村とで保存協定が結ばれ、「郷土の森」として約80haの国有林が公開されました。

豊かな森に育まれた水木沢を地域一体となった保全活動に取り組んでいることが評価され、2008年(平成20)に環境省による「平成の名水百選」に選定されました。

水木沢天然林トレッキング

林内には「原始の森コース」と「太古の森コース」のふたつの遊歩道に加え、水木沢の源頭部まで散策できる「源頭の森コース」も開かれています。

原始の森コースと太古の森コースはどちらも約1時間程度で一周することができ、両方のコースを8の字に周遊することも可能です。

原始の森コースから展望台へ上がるコースも整備されており木曾駒ヶ岳などの眺望が可能で開放感あふれた一角となっています。また源頭の森コースは源頭部までの往復コースとなっています。



観光●水木沢天然林トレッキング

(一社)木祖村観光協会では、針葉樹と広葉樹が混交した天然林の周遊トレッキングのガイドを行ないます。

所要時間:4時間未満コース〔原始の森・太古の森〕

4時間超えコース〔原始の森・太古の森〕

5時間超えコース〔源頭の森〕

料金:8,500円～

連絡先:(一社)木祖村観光協会／TEL0264-36-2543

今に息づく木材の活用

木曾領民の暮らしを支えた地場産業

尾張藩の森林保護政策により山での木材の利用を厳禁された木曾領民には、木曾の風土に根ざした地場製品の生産が奨励されました。木曾代官4代目山村良豊やまむらたかとよは、奥州から良馬の南部馬を買い入れ、木曾地域の風土に合う山坂に強い木曾馬に改良して、農民に飼育させることを奨励しました。また、禁伐きんぱつを課す代わりに領民の既得権きとくけんとして藩から村に支給される御免白木ごめんしらき(使用が許可された材木を割って半製品にした材料)を利用しての曲物まげもの、漆器しっきなどの工芸品や木材加工、養蚕ようさん、製糸業せいしぎょう、さらに御嶽山修験者から地元の人々に伝授された山野の薬草の製薬技術ひやくそうによる「百草」製造などを地場産業として積極的に奨励しました。地場製品と整備の進んだ中山道の流通経済を活かして産業振興を図ったのでした。

木曾馬は、性格がおとなしく小型であるため女性でも世話できる農耕馬であり、馬市場で売り買いされるだけでなく、領民の農耕・運輸にも大いに役立ち、江戸時代後期には領内に数千頭の木曾馬が飼育されていました。また、陶器に比べ軽く壊れにくい木工品うろしや漆を施し耐久性を高めた漆工品しっこうは、木曾路を辿り全国に広まりました。

こうして発展した木曾谷の地場産業は、江戸時代中期以降、領民の暮らしを支えました。



木曾馬(木曾町)



南木曾ろくろ細工(南木曾町)



曲物(塩尻市)



木曾漆器(塩尻市)

構成文化財② 建物・町並み・重伝建(漆工町)

塩尻市

しおじりし きそひらさわ

塩尻市木曾平沢

■基本データ

- 住所 塩尻市大字木曾平沢
- アクセス JR「木曾平沢駅」から徒歩約3分
- 連絡先 塩尻市教育委員会文化財課
/TEL 0263-52-0904
- 指定 国重要伝統的建造物群保存地区(2006年)



マップQR



第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

木曾平沢は、中山道や奈良井川が南北に縦断する塩尻市南部の中央に位置し、奈良井川が大きく湾曲した河川敷に発達した集落です。木曾漆器の産地として知られ、漆工の職人町の面影を残す伝統的建築物とその景観が、2006年(平成18)に重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。漆工町としては国内初で唯一です。

漆器の販売店や工房が軒を連ね、中には作業場を見学できる工房もあります。うるし橋駐車場を起点にした約2.5kmの町の探訪コースも設けられています。

歴史的背景

1598年(慶長3)に奈良井川の左岸にあった道が右岸の中山道筋に替えられたことを契機に、周辺の山林に散在していた人々がその道沿いに集まり、集落が形成されていったと考えられています。

江戸時代初期に、平沢(当時は奈良井村平沢)地域で、漆塗りがおこなわれていた家があったと伝えられており、早くから檜物細工や漆器などの製造を生業としていました。安価で丈夫な生活用品として農村や都市部の庶民に人気でした。

その後、明治時代に入り、錆土の発見による本堅地漆器ほんかたじしきの製造技術の確立、挽曲物の技法の発明による宗和膳の生産、木曾堆朱塗の技法の開発普及などが進みました。

特に大型の座卓が全国的に人気となり、1955年(昭和30)前後頃から木曾漆器の中心的な産地となりました。現在でも日本有数の漆器生産地としての地位を維持し続けています。

●保存地区

奈良井川の河川敷に広がる集落と、その北の丘陵に鎮座する諏訪神社を含んだ地域。東西約200m、南北約850m、面積約12.5ha。

指定地区

塩尻市大字木曾平沢字東町、字東町裏、字西町、字西町裏、字太田、字川原、字上ノ山、字宮ノ原及び字宮下の各一部

伝統的建造物等特定数

建築物198件、工作物20件、環境物件16件
(2023年(令和5)1月1日現在)



塩尻市木曾平沢重要伝統的建造物群保存地区範囲

町並みの特徴

地区のほぼ中央に、現在は本通りと通称される中山道が南北に縦断し、その西側に並行して金西町の街路が位置します。その両側に、近世後期に遡る奥行きの深い短冊状の敷地割が残されています。

この本通りと金西町の街路に沿って形成された町並みは、それぞれに異なった景観を見せています。本通りは、道の両側で漆器の店舗を持つ主屋が多く、漆器の町を印象づける景観であるのに対して、近代になって開削かいさくされた金西町は、街路に漆器職人の住まいが建ち並ぶ職人町といった景観を見せています。

昭和の漆器産業が盛んだった時期の建物には様々な工夫が見られ、今でも住居の敷地奥の土蔵を作業場に使っている漆器職人の家は少なくありません。

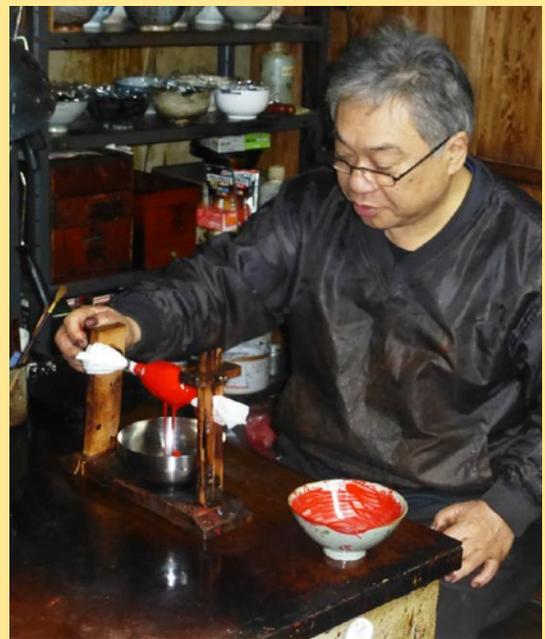
文化財の修復

木曾漆器工業協同組合では、神社・仏閣・山車^{だし}・舞台など文化財の修復・復元をおこなっています。

近年では、名古屋城の本丸御殿をはじめ、松本市深志神社^{ふかしじんじや}の舞台などの修復・復元作業を手掛け、木曾漆器の伝統の技を活かしつつ、それぞれ独自の工法・技法を調べて建設当時の塗りの再現に成功しています。

●職人のエピソード

- 江戸時代、明暦の大火のとき、平沢から大八車で漆器を運んで売り、大儲けしたエピソードが残っている。
- 漆器が産業化したのは明治になってからで、お椀や重箱がよく売れた。高級路線ではなく、普段使いの漆器として人気が出た。
- 昭和になると座敷テーブルや座卓、さらに旅館で使うお膳が大ヒットして、高度成長期の昭和40年代には、木曾漆器の年商は100億円にもなったという(現在は20億円程度)。技術も高く、ヒノキのわっぱ(めんば)を曲物でちゃんと作れるのは木曾だけと言われる。
- 20年ほど前から全国の文化財の修復事業も手がけるようになった。山車やみこし、お寺関係などで、職人が足りなくなるほどの依頼が来る。なぜ他の地域ではなく木曾に頼むのかというと、座卓など大きいものを扱うノウハウを持っているから。例えば45cm×180cmの大きさに漆を塗って乾かす技術は木曾ならではのものではないか。
- 現在は依頼があればなんでも塗る。パソコンや車の内装を手がけることもある。
- 平沢は昔から職人の町、モノづくりの町で、木地師、塗師などの職人は問屋から発注された製品を作り、奈良井を始め各地で販売されてきた。しかし近年は町まで人に来てもらえるようにしたいという考えが強くなっている。1970年代には奈良井宿から平沢へという観光ルートが人気で店売だけでも食べられた時期があった。その復活を目指して、町並み保存会が中心となり、週末に営業するカフェをオープンするなどの環境整備を進めている。



(小林広幸氏(伝統工芸士、塗師、春野家漆器工房)・談)

工房見学

木曾平沢にあるいくつかの工房では、漆器制作の現場を見学することができます。実際に見学すると、いかに繊細で手のかかる作業が施されているかがよくわかります。

中には、敷地奥の蔵や中庭などが見学できるところもあります。

店先で声をかけて了解を得られることもありますが、その日の作業や用事などでできない場合もあるため、事前に各工房に電話をして問い合わせておくといでしょう。



第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教（御嶽山信仰）

第7章
その他
（観光宣伝など）



木曾くらしの工芸館（木曾地域地場産業振興センター）

●木曾くらしの工芸館 （塩尻・木曾地域地場産業振興センター）

国道19号線沿いにある道の駅「木曾ならかわ」内にて地場製品の販売を行っています。木曾漆器コーナーは、作り手ごとに分かれており、好みに合った漆器や職人を探すことができます。週末には、職人の伝統技術を間近で見学しながら交流できるイベントも開催しています。また、塩尻ワインや地元の新鮮野菜等も豊富に取り揃えており、中庭のカフェ「ル・ボワ」では季節の食材を使用したジェラートや人気のシェフ特製カレーを味わうことができます。

住所：塩尻市木曾平沢2272-7

営業時間：9:00～17:00

定休日：無休（冬期は毎週火曜日休業。その他臨時休業あり）

連絡先：TEL 0264-34-3888



木曾漆器館

●木曾漆器館

国指定重要有形民俗文化財「木曾塗の製作用具及び製品」、国・県重要無形文化財保持者などの漆芸作品を展示し、木曾漆器の製作工程や製品についてわかりやすく解説しています。

住所：塩尻市大字木曾平沢2324-150

営業時間：4～11月は9:00～17:00、12～3月は9:00～16:00

最終入館時間は閉館30分前。

料金：大人（高校生・大学生含む）300円、中学生以下無料

定休日：毎週月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始。

冬季臨時休館あり

連絡先：TEL 0264-34-1140

●木曾漆器祭

6月第一金・土・日の3日間、木曾平沢では年に一度の大漆器市「木曾漆器祭」が盛大に開催されます。国の重要伝統的建造物保存地区の町並みには漆器店が一堂に並び、職人の精魂込めた逸品や、この期間しか出ない製品や蔵出し物が手に入ります。

隣接する奈良井宿では「奈良井宿場祭」が同時開催されます。

連絡先：木曾漆器祭・奈良井宿場祭実行委員会

TEL 0263-52-0871



木曾漆器祭

まげもの
曲物

■基本データ

主な生産場所 塩尻市

発祥 江戸時代前期

指定 県伝統的工芸品(1982年)

産地組合 木曾漆器工業協同組合

/TEL 0264-34-2113



マップQR



曲物は、食器類を中心とする日常生活用品として、江戸時代より、木曾漆器発祥の地といわれる木曾町の八沢、塩尻市の奈良井で多く製造されてきました。

古くは、江戸時代初期の1607年(慶長12)に木曾代官、山村良勝が発給した「奈良井村書出之事」のなかに、すでに檜物細工ひものざいくを作っている者がいたことが記されています。諸国の名物を記録した1638年(寛永15)の「毛吹草けふきぐさ」には、「奈良井曲物」が挙げられており、奈良井村の檜物細工は「奈良井物」と呼ばれ、人気を博していたようです。安価な庶民向けの食器類が主流でしたが、木曾ヒノキの品質の良さで高い評価を得ていたことが、記録から確認できます。

1661～1672年(江戸・寛文期)頃より、白木細工に耐久性や見栄えをよくするために漆を塗るようになったといわれています。「養生訓ようじょうくん」で知られる儒学者で本草学者の貝原益軒かいばらえきけんが、1685年(享保2)に中山道を旅した折に、「奈良井の町、民家百ばかり有り、此町に、わん、おしき、まげ物などをぬりておほくうる」と記しています。

1716～1736年(享保年間)の「尾・濃・信・江御領分産物全」には、八沢の製品として、小判面津・丸型面津(メンパといわれる弁当箱)・菜入れ・切り留め角指し(刻んだ野菜や煮物などを

一時的に保管するための器)・丸七つ鉢・飯次・通盆丸角・足付き丸盆・弁当箱・重箱・膳・箱膳・湯桶などが記されています。

これらの製品は中山道を通じて、江戸や高崎、京都、大阪などへ送られ、問屋によって売られていきました。尾張藩から割り当てられた御免白木ごめんしらきで作られた統制品だったため、出荷証明書である「御免檜物手形ごめんひものてがた」がないと弁当箱1個たりとも持ち出しは許されなかったといえます。

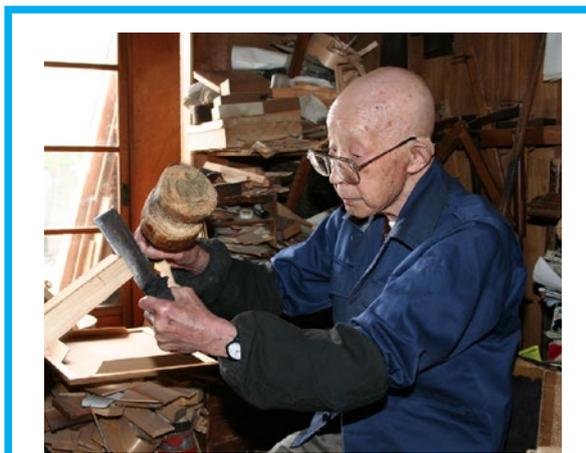
明治時代には、八沢のメンパが陸軍の弁当箱に採用され、需要が高まった時期がありました。また、1943年(昭和18)頃の戦時中は、木地のままの小型丸形の曲物が、保革用の油淹れとして陸軍に採用され、工場で生産されました。

漆器産業は戦中・戦後の混乱期を乗り切れずに衰退していきましたが、昭和30年代の高度成長期に平沢の座卓の需要が拡大し、地元業界の様々な試みが奏功して、伝統工芸品としての地位を確たるものとなりました。なかでも曲物は現在も木曾漆器の人気商品のひとつとなっています。

曲物の人気のヒミツ

木曾ヒノキを薄く剥いた板(へぎ)を熱湯につけて曲げ、カンバ(山桜の皮)で綴じ、側板に底や蓋をはめて木地を作り、漆を塗って仕上げられた円形の器。メンパ(小判型や丸型の弁当箱)、ひしゃく、湯桶、そば用具などが作られています。古い物は木目が透き通って見える拭き漆、春慶塗りで仕上げられました。

国内各地で作られている伝統工芸品ですが、秋田スギと並んで、木曾ヒノキの曲物は有名です。ヒノキは抗菌作用が高く、食材が傷みにくい。冷めてもご飯をおいしく保ち、何を盛り付けても絵になるということで、曲物の弁当箱が男女、世代を問わず人気となっています。



●雅子さまの納采の儀の器を手掛けた曲物師・村地忠太郎

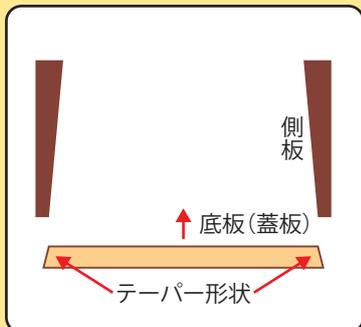
漆器は土台となる木地によって、その出来が大きく左右されます。1917年(大正6)木曾福島に生まれた村地忠太郎は、十代半ばに父親に弟子入りして以来、80年以上、曲物一筋に生きてきた名工です。

美しい木目を引き出し木地を仕立てる精緻な技術は高く評価され、雅子さまの納采の儀の器など皇室の公式行事に使用される道具や弁当箱などを手掛ける宮内庁御用達木地師となりました。

2012年に厚生労働省より「現代の名工」として表彰されました。2019年に逝去。

曲物の構造と技法

●特徴 2種類の木材



他の産地では通常1種類ですが、木曾の曲物には2種類の木が使われています。側板に木曾ヒノキ、蓋と底には木曾サワラを組み合わせた場合が多数。

蓋と底に木曾サワラを使用している理由は、その高い吸水性・保湿力を活かすためです。サワラはご飯の余分な水分を吸い、しっとり保ってくれるため、昔から、おひつやすし桶に使われてきましたが、硬くて曲げる細工は難しく蓋と底に使うことで、その特徴を活かしています。豊富な森林資源に恵まれているからこそ、木の性質を活かして使い分けることができました。

側板の特殊な構造

木曾の曲物の側板は上が薄く、下にいくほど厚い。丸い形状の場合、外周と内周の差は $2\pi \times$ 厚みになるので、厚みが増すほど円周差が大きくなり割れやすくなります。それを回避するため木への負担を円周差の少ない薄い部分に逃しています。同時に、蓋板や底板の反りを軽減し、熱いものを入れた際に木が収縮する力を逃すためです。

他の産地ではこうした形状はみられません。機械に通すことができず、手間が増えるうえ、精度を出すことが難しいためです。



「すり漆」の技法

白木地に下地処理をせず直に生漆を摺りこむように塗る技法です。木の呼吸を損なわず、メンテナンス性や強度を高めることを実現しています。

重厚な漆器は扱いが難しそうということで敬遠される傾向にありましたが、この技法で作られたものは、気軽に洗うことができ、手入れがしやすいことも人気の一因です。

また、漆にも抗菌作用があり、ヒノキの抗菌作用と相乗効果で、食材が傷みにくくなっています。

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

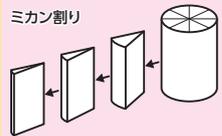
●製作工程 (図・写真提供:花野屋)

主な工程は次のとおり。

- ①木取り→②削り→③曲げる→④留めをつける→
⑤底板、蓋板をはめる→⑥漆を塗る

①木取り・削り

ミカン割りで粗く割った材を木目に沿ってヘギなたで厚さ2〜3mmに割りはがす。割った木を胸当ての防具に固定して「さつとう」という刃物で薄く削る。



②曲げる

曲げやすくするために側板を煮てから、「ほた」という木製のコロに巻き付けて曲げていく。



③留めをつける

曲げた板を木ばさみで挟んで、一昼夜乾燥させる。合わせ目を糊で留めて乾燥させる。

④はめる

合わせ目に「木さし」で穴をあけ、なめして細長く加工した山桜の皮で綴じる。側板に蓋板、底板をはめ、木地が完成する(白木地)。

⑤塗る

白木地に生漆を塗り、木地の変形を防ぐ木地がためを施す。乾いたら、つなぎ目にコクソ(生漆と木粉、米糊などを混ぜたも)をへらで塗りつけて補強。一晚乾燥させ、生漆と地の粉を混ぜたサビをつけてなめらかにする。サンドペーパーで全体を研いだから、漆を塗る。

*漆を刷毛につけ、摺りこむように塗るため「すり漆」といわれます。また、漆を塗った後に布や紙で拭き取ることから、「拭き漆」ともいわれます。

*漆を塗って、乾いたら紙で拭き取る作業を数回繰り返して完成。

お弁当ブームが続くなか、曲物の弁当箱が人気を呼んでいます。プラスチック製などと違って冷めてもご飯がおいしいといった評判です。生産が追いつかず、品切れ状態が続いたり、ネット通販を中止したりしている店も少なくありません。

「ひとつひとつ職人が作っているものですから、生産が追いつかなくて、お店に来ていただいたお客様さんには対応しています」

(奈良井の花野屋さん談)

■主要参考文献／

『木曾～歴史と民俗を訪ねて』

(木曾教育郷土館部編著 信教出版部 2010)

『木曾路大紀行<信州の大紀行シリーズ2>』

(一草舎出版 2007)

『木曾平沢～伝統的建造物群保存対策調査報告』

檜川村町並み文化整備課 2005

『あれこれ木曾町再発見 木曾町を学ぶ』

(木曾町を学ぶ本づくり検討会 木曾町観光協会2013)

構成文化財④ 建造物・重要文化財 塩尻市

きゅうなかむらけじゅうたく

旧中村家住宅

■基本データ

住所	塩尻市大字奈良井311
アクセス	JR「奈良井駅」から徒歩10分
連絡先	TEL 0264-34-2655
指定	国重要文化財(2020年)
入館料	大人300円/中学生以下無料 (団体割引あり/20名以上1名様240円)
開館時間	4月～11月は9時～17時/12月～3月は9時～16時 ※入館は閉館の30分前まで
休館日	4月～11月は無休/12月～3月は毎週月曜日・祝日の翌日※月曜が祝日の場合はその翌日



マップQR

塗櫛の創始者・中村恵吉の分家にあたる櫛問屋。

1843年(天保14)頃の建築で、街道に面した表の部屋はしとみど部戸になっており、二階部分を少しせり出させた出だし梁造り、よろいひさし鎧庇など、江戸時代の典型的な奈良井の町家の様式を残しています。

資料館として一般公開されており、当家の間取り図や幕末～明治の櫛商人の金銭出納帳などの文書やぬりくし塗櫛・こうがい筭などが展示されています。

2020年(令和2)12月、主屋と土蔵が国重要文化財に指定されました。

町並み保存の象徴

旧中村家住宅は、1969年(昭和44)、神奈川県川崎市にある日本民家園への移築が予定されていましたが、現地保存を望む地域の声を受けて、当時の櫛川村が敷地と建物を中村家より寄贈を受け、保存活用を図っていくこととなりました。この出来事を契機に、奈良井では町並みや建造物の保存について意識されるようになり、1978年(昭和53)の国重要伝統的建造物群保存地区の選定となりました。奈良井の歴史的町並みの保存活動の原点ともいえる建物です。



旅籠としての中村家住宅

文献史料によると、奈良井宿では旅籠を主たる生業とする町家は江戸中期以降、10数軒しかなく、1843年(天保14)頃はわずか5軒であったとされています。

旧中村家住宅のオモテニカイは、板敷の部屋としても畳敷の部屋としても使用できる形式となっており、参勤交代などの大通行時には、必要に応じて旅籠の居室としても使用されるなど、塗櫛の作業場としての機能と旅籠の機能を併せ持った部屋であったことが分かりました。

外観意匠・間取り

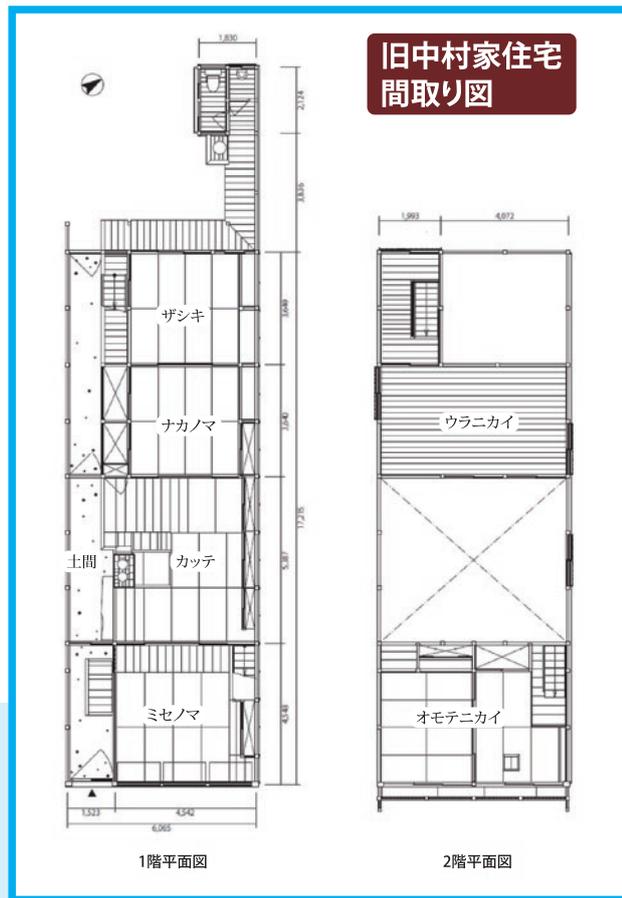


建築年代は、絵図や文献史料から、主屋・土蔵共に江戸時代後期の1837年(天保8)の大火後、1843年(天保14)までに建てられたとみられ、以後、数度改修や修理等が行われていますが大きな改変はなく、旧状をよくとどめています。

主屋は、南側に正面から背後に通じる土間と1列4室(ミセノマ・カッテ・ナカノマ・ザシキ)の居室列からなり、ザシキの南側の土間との間はウラニカイへの上がり口を備えています。2階はミセノマ上部にオモテニカイを設け、間仕切りによって北側と南側の2室に分けています。カッテ上部は吹き抜けとし、ナカノマ上部にはウラニカイを設けています。

ザシキ上部は部屋とはせず、この南側はウラニカイへの階段室としています。こうした間取りは、木曾11宿における町家の最も一般的な間取り(1列型町家)です。

表構は、1階土間正面の潜戸付きの大戸、ミセノマ前面の上下3枚のシトミ戸を残しています。また、2階の縁部分が出梁によって一階より前に張り出す、この地方の呼称である出梁造り(だしばりづくり)となっており、さらに奈良井宿の表構の特徴ともいえる、出梁の先端の桁にサルガシラと呼ばれる栈木で横板をおさえた、コヤネと通称する板庇を付けています。



櫛問屋としての機能

主屋内には漆塗り作業を行った物証が残っており、1階ミセノマでは、箱階段の内部が漆を塗った櫛を硬化させる、室(モロ・ムロ)としての機能を有していたことがわかりました。また、2階のオモテニカイの床板には漆の痕跡があり、さまざまな色の漆を使用する加飾等の仕上げ塗りの作業が行われていたことが判明しました。



土蔵は、通常の収蔵を主目的とした土蔵とは異なる点が多く、構造、部材の様相、室の存在、床板に付着して残る漆などから、1階、2階で漆塗りの作業がおこなわれた塗蔵であったことが明らかになり、近隣の重伝建地区の漆工町木曾平沢の塗蔵の原型ともいえるものです。



■主要参考文献『旧中村家住宅調査報告書』(塩尻市教育委員会 2019)

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

きそぬりのせいさくようぐ

木曾塗の製作用具

およびせいひん

及び製品

■基本データ

主な生産場所 塩尻市

発祥 諸説あり、江戸時代中期以降
全国に知られる

指定 国重要有形民俗文化財(1991年)

連絡先 木曾漆器館/TEL 0264-34-1140



マップQR



「木曾漆器」とは、主に塩尻市木曾平沢周辺で作られている伝統的な漆器しっきを指します。漆器とは、漆塗りうるしを施した木製品ぬりもののことで、塗物ともいわれました。

江戸時代より木曾物といえは平沢で生産されたものと言われるまでその名を広め、昭和の高度成長期には木曾平沢の座卓等の大物漆器でその存在をより知らしめました。

1975年(昭和50)、経済産業省より「木曾春慶しゅんけい」、「木曾変わり塗ろいろ」、「塗り分け呂色塗ろいろ」の3つの技法が伝統的工芸品として指定されました。また1991年(平成3)には、「木曾塗の製作用具及び製品」3,729点が、国の重要有形民俗文化財に指定されました。

木曾塗の歴史

木曾地方は、平地が少なく、寒冷地のため、農業には適していませんでしたが、木曾五木(ヒノキ・サワラ・アスナロ・コウヤマキ・ネズコ)に代表される良質な木材に恵まれたため、早くから木製品の加工に従事する人が多くいました。

塗物については1665年(寛文5)「檜物駄詰覚」に記された「ぬり小丸ぼん」が最初で、木製品を丈夫にするために漆を塗ったことから始まったといわれています。江戸中期には平沢、奈良井の塗櫛ぬりや藪原のお六櫛が中山道を通る旅人の土産として人気を呼びました。

海拔およそ900mの高地で、夏は涼しく冬は寒く適度な湿度等、漆器づくりに適した自然環境も発展をうながしました。

曲物などに代表される木製品(木地)に直接漆を塗り重ねた春慶塗りを中心に製造していましたが、明治初期に奈良井で錆土さびつちという良質な下地素材が発見されたことで技術革新が起きます。さらに原材料の確保や技法の進歩が次々と進み、庶民の生活用具としての漆器だけでなく、高級調度品など様々な製品を作りだし、木曾漆器の産地として飛躍的な発展を遂げました。



漆器館に展示されている錆土

●製作工程

主な工程は次のとおり。

①木地作り→②下地作り→③塗り→④加飾

①木地作り

漆器の土台となる、木工品の加工。釘などを使わず、木材を組み合わせて家具や箱、茶道具、重箱などを作る「指物(さしもの)」、ヒノキやスギなどの柾目の薄い板を曲げて丸や楕円の側板を作り、底板や蓋をはめて丸盆や弁当箱などを作る「曲物」、ろくろなどで木を挽いて円形の器を作る「挽物(ひきもの)」、厚い板をくり抜いてつくる「割物(くりもの)」などがある。原木から板を切り出すことを「木取り」といい、柾目(まさめ)と板目が代表的。切り出し方によって木目が変わる。木曽漆器にはヒノキの柾目板を使用する。柾目とは、製材する際、中心に向かって挽いた時に見られる年輪が平行な木目のことをいう。ほぼ均等に木目が並んでいるため美しく、収縮や反りの歪みが出にくい。高樹齢の大径木からしかとれないため、価格も高い。板目は、木の中心を外して木の幅いっぱい板取りしていくので、木目が大きな波のようになり面白味がある。柾目より安価になるが、歪みが生じやすい。

②下地作り

漆器作りの基礎となる重要な工程。器の表面を整えて木地の弱いところを補強する。その土地特有の地の粉や砥石の粉を漆に混ぜて何度も塗ることで強度を増す。漆器の強度はこの作業に左右されるという。現在最も使われているのは、本堅地(ほんかたじ)で、地の粉や砥の粉を水で練ったものを生漆に合わせて下地用漆を作り、へらなどで木地に塗りつけていく。漆の代わりに柿渋、炭粉を使う渋下地という手法もある。

③塗り

木地に漆を塗る職人は、塗師(ぬし)といわれる。塗りは、木地に黒漆を塗り磨き炭で研磨する「下塗り」、さらにもう一度下塗りしたものに黒漆を塗って磨く「中塗り」、黒漆や透漆(すきうるし)、朱漆などを塗って仕上げる「上塗り」の3工程がある。漆器館に展示されている錆土漆を塗ってから乾かす際、湿気が多いムロ(室)で乾燥させる。漆の樹脂が固化する過程で働く漆の酵素を活性化するために、20度以上の温度と60%以上の湿度が必要といわれている。チリやホコリも大敵なので、職人はひとり黙々と作業する。

④加飾(かしよく)

基礎技術は大陸伝来とされているが、奈良時代には様々な装飾法が用いられていた。さらに漆芸の装飾技術は江戸時代時代の経済発展とともに大いに進化していった。代表的な手法は4つ。

- ・蒔絵(まきえ)……日本で進化発展した装飾技法で、すでに平安期には確立されていた。上塗りした漆器に漆を筆で模様や絵を描き、その上に金粉や銀粉を蒔きつけて乾かすと絵や文様が浮かび上がる。さらにその上に漆を薄く塗って固めて表面を磨きあげる。
- ・箔絵・切箔(はくえ)……表面に漆で文様を描き、その上に金銀の箔を貼って文様を描き出す。
- ・沈金(ちんきん)……上塗りした漆器の表面を小刀やノミで細い文様を彫り、文様周辺に漆を塗って、箔金粉を文様の溝に押し込む。さらに漆を薄く塗って固めると、金色の彫り文様が浮かび上がる。
- ・螺鈿(らでん)……漆器の表面を彫って光沢のある夜光貝などを埋め込む方法と貝を漆器表面に貼ってその上に漆を塗り重ねていく方法がある。

●塗りの技法

木目を活かす塗りと黒塗りと朱塗りなどの不透明な塗り、変わり塗りがある。

・摺漆(すりうるし)

ケヤキやトチなどの木地を十分磨き上げたあと目止めをし、木肌が透けて見える程度に数回生漆を塗っては拭き、または塗っては拭きを繰り返して仕上げる。下地塗りが省かれるため、木目の持つ素朴で温かな味わいが伝わってくる技法。

代表的な商品:家具・文机・お盆・花蓋・コタツ板・小引出しなど

・木曽春慶(きそしゅんけい)

薄紅色の彩漆で色づけした後、生漆を何度も摺り込む。最後に透明度の高い春慶漆を塗って仕上げたもの。木地のもつ柾目の美しさが際立つ木曽の伝統的な塗技法の一つで、錆土が発見されるまでは主要商品だった。

代表的な商品:メンパ・そばセイロ・湯筒・コップ・盆・重箱・平皿など

・木曽堆朱(きそついしゅ)

たつぷりと漆を含ませたタンポを使って「型置(模様づけ)」し、型置され凸凹のできた面に彩漆を何度も(通常12回〜18回)塗り重ねていく。表面が平らになったら、水ペーパーと砥石で塗面を研磨することで木の年輪に似た独特の模様が表れる。

代表的な商品:座卓・お盆・茶托・菓子鉢・茶櫃・箸立て・花器など

・呂色塗り分け塗(ろいろぬりわけぬり)

砥石を使って錆研ぎをおこない、木曽地域では「ジヌリ・ナカヌリ」と呼ぶ独特の中塗りを施した後、多種の精製彩漆を用いて塗り分け作業を施す。コキ研ぎをして、上塗りをして乾燥後、やわらかな木炭の粉末で磨き、さらに鹿の角の粉末に菜種油と砥の粉を混ぜて丹念に艶出しをして仕上げる。鏡面のような美しさ。

代表的な商品:座卓・呂淵・重箱・菓子鉢・飾り棚など

・溜塗(ためぬり)

下地工程が施された木地に中途の段階で朱漆や黄漆などの彩漆が塗られ、最後に透明な溜漆を塗りっぱなしした状態で仕上げる。下の彩漆によって紅溜、黄溜などと呼ばれることもあり、下地に深く重ねられた彩色を鮮やかに浮かび上がらせる。

代表的な商品:お盆・花台・重箱・文庫・お椀・飯切りなど

●漆について

漆には接着剤、塗料としての働きがあり、一度乾固すると酸やアルカリに強く、防水・耐水性も優れているため、古来より私たちの生活に役立てられてきました。

漆はウルシ科の落葉高木樹(10〜20m位)で、木の幹に傷をつけると樹液が分泌します。この液が「漆」で、主に6〜11月頃にかけて採取されます。1本の木から年間60〜250g程度しか採取できないので、大変貴重品とされています。漆は日本でも採取されていますが、その量はほんのわずかで、現在はアジア産(特に中国産)が主に使われています。



漆掻き職人による採取風景



1998長野冬季オリンピックメダルを制作

冬季オリンピックの入賞メダルは木曾漆器の産地職人がひとつひとつ手作りしました。オリーブをあしらったリング状の外枠の中の「朝日」と、片面の「エンブレム」、信州の山々の「朝焼け」を蒔絵で表現したもので、現物を木曾漆器館や木曾くらしの工芸館で見ることができます。

●給食用食器としての利用

木曾漆器は地元の小中学校で給食用食器としても使われています。同様の食器セットが木曾くらしの工芸館でも販売されており、贈答用としても人気があります。



給食の様子



漆器の給食用食器



塗分け呂色塗・重箱（ぬりわけろいろぬり・じゅうばこ）



木曾春慶塗（きそしゅんけいぬり）

若手職人たちの挑戦

近年は、若手職人らが中心となり、伝統的な木曾漆器の技術を応用して現在の生活様式に合った製品づくりが積極的に行われています。柔軟な発想でガラス製品や革製品等への漆塗りに挑戦し、注目を集めているほか、漆器を「借りる」という新たな発想の取組を考案するなど、産地活性化につながる動きが出てきています。

若手職人の岩原祐右さんは、米国製大型バイクに「堆朱塗り」で黒漆を塗り重ね、さらに「白檀塗り」で炎の柄を描きました。光が当たると堆朱独特の模様が浮き出し、特別なクラシックバイク感が出て注目されました。



木曾漆器若手作家 岩原祐右さん
ヘルメットに漆を塗っています。

おろくぐしのぎほう

お六櫛の技法

■基本データ

(主な生産場所) 木曽郡木祖村

(発祥) 江戸時代

(指定) 県伝統的工芸品(1982年)、
同無形民俗文化財(1973年)(連絡先) 木祖村教育委員会/TEL 0264-36-3348
木祖村役場/TEL 0264-36-2001

お六櫛の名の起りは、頭痛もちのお六が、家の近くのミネバリの樹を櫛にして髪を梳いたことにより全快したとの伝説からです。現在でも藪原ではその伝統的な技法を引き継いで製造されています。実演見学や体験もできます。

お六櫛の歴史

木櫛は、森林資源に恵まれた木曽谷で、木地、檜物細工、漆器、桧笠、下駄などとともに、古来から木材加工業のひとつとして発達してきました。その発祥は定かではありませんが、お六櫛伝説が生まれた妻籠宿^{あららぎ}や蘭村では元禄中期頃から木櫛が生産されていました。材料としていたミネバリが鳥居峠周辺に多くあったことから、享保年間前後に藪原宿がお六櫛の主産地となりました。

これには、1704～1711年(宝永年間)の五木伐採停止と檜物^{ひもの}手形の配給制限、享保検地後の藩の諸統制の強化などが影響したのではないかという説もあります。

藪原宿では檜物細工と漆器が中心でしたが、それまで櫛木として半製品のまま移出していたものから、完成品の製造に切り替えていきました。当初は櫛歯が不揃いで粗野なものでしたが、寛政～文政年間に太右衛門という者が両歯に改良し、扇屋新次郎によって歯立て法な

どが工夫改良され、精巧な木櫛を生産できるようになりました。

また、「西筑摩郡誌」には1718年(享保3)に塗師源右衛門が殺されてから木櫛製造に転じたという記述もあります。

江戸時代の作家、山東京伝^{さんとうきょうでん}が1807年(文化4)^{おろくぐしそあだうち}「於六櫛木曾仇討」を書いたことで、お六櫛の名が全国に広まりました。

1838年(天保9)の「書き上げ」によると、藪原宿の木櫛売上代金は、おおよそ1,500両で、当時としては莫大な収益をあげていました。1848年(弘化5)の「藪原宿職業別戸数一覧」には、「細工櫛三、櫛商一九、櫛磨き一九、櫛挽き二三九人」とあり、全戸数の6割が櫛の生産に従事していたことが記録されています。

藪原宿は、飛騨街道奈川道との分岐点にもなっており、古くから交通の要所として発展してきたことも、お六櫛の流通を後押ししました。

●製作工程

お六櫛の製造工程は、大きく「櫛木の準備」「櫛木削り」「櫛の歯作り」「櫛の仕上げ」の四区分に分かれ、およそ15の工程からなっていました。

かつては問屋から櫛木を持ち帰り、職人が板削り、歯挽きを、女子供が櫛の歯通しや磨き仕事をおこなうという分業（問屋制家内工業）で作られていました。

現在では「櫛の磨きと総仕上げ」の段階まで櫛職人がおこなっており、およそ20工程で一枚のお六櫛を完成させています。

主な工程は次のとおり。

- ・削り: 櫛木を規定のサイズに整える・筋を付ける
- ・歯挽き: 櫛の歯をつける
- ・耳突き・耳丸め: 櫛の角を加工する
- ・磨き: 下磨きと艶出し
- ・油ひき: 総仕上げ



「お六櫛」の語源

おおたなんぼ しょくさんじん じんじゆつきこう
大田南畝(蜀山人)は、「壬戌紀行」(1802年(享和2))において、「お六といへる女はじめてみねばり(峰榛)の木をもて此櫛をひき出せり。」と述べています。お六の出身については妻籠説、藪原説、清内路(下伊那郡)説があり、定かではありません。

髪の方ケの方言オロコが訛ったものという説もあますが、あらざ蘭村に保管されている江戸時代のお六櫛の寸法がみな六寸であることから、櫛の寸法をお六と女性の名前風に読んだことが始まりではないかという説もあります。

材のミネバリについて

カバノキ科カバノキ属の落葉広葉樹(学名: *Betula grossa* (*Betula schmidtii*))。「斧が折れるほど硬い櫛の木」なので「斧折櫛(オノオレカンバ)」とも呼ばれます。ミネバリの呼称名は地方名で、山の岩地から「峰に張り出す」ように生育することに由来するともいわれます。

藪原では、江戸時代から明治・大正と、上伊那から下伊那にかけて南アルプス山系に入り採取加工した記録が残っています。過酷な環境に生育するためその生長はきわめて遅く年に0.2mmほど、緻密な木目になり、水に沈むほど重い。また、硬いだけでなく弾力があり、狂いも出にくいことから、お六櫛のような細かい歯の櫛の材としては最適でした。

櫛の種類

お六櫛は用途別に梳き櫛・解かし櫛・挿し櫛・鬢搔き櫛などがあり、さらに形や大きさ、歯のつけ方などの違いによってそれぞれに様々な名前がつけられています。

●す梳き櫛(透き櫛)

髪の方ケや汚れ、ホコリを梳いてとりのぞく、頭髪をクリーニングするための櫛。歯の間隔はいずれも0.5mm以下と細かく、毛髪の1本1本を梳く事ができるようになっており、毛髪の表面を一定方向へ美しく整え、毛髪本来のツヤを出す効果があります。戦後、シャンプーの普及と洗髪の習慣化によって生産量が激減しました。櫛のサイズは三寸～四寸四分程度。歯数は一寸あたり29～42本です。

●解かし櫛(解き櫛)

結っていた髪をほどこき、毛髪を揃えるのに用いるやや歯の粗い櫛。現在はスタイリングするために使用されています。櫛のサイズは五～六寸で、櫛挽職人は一寸あたりの櫛歯の数から以下の六種類に分けています。梳歯(15本/寸) 相細(14本) 相歯(13本) 相太(12本) 挿荒(11本) 荒歯(10本)

●さし挿櫛(飾り櫛・塗櫛)

髪を結ってから、髪の乱れを整えたり、髪に挿して飾りに用いた。「飾り櫛」とも呼ばれています。

●ゆい結櫛

いわゆる日本髪、チョンマゲなどを結うために用いられた櫛。主に髪結師、床屋など理髪専門職のために供給されていました。現在でも一部は相撲取り、時代劇等に関わる職種で伝統的に使用されています。

昭和・平成の櫛師、故 青柳和邦さん

ある雑誌に「木曾木櫛。山深く残る伝統」のタイトルで『木曾の山中、藪原に伝わる木櫛。櫛を挽くその人は、「伝統工芸士より櫛職」と胸を張る。その藪原で、木櫛の伝統を守るただ一人の「櫛職」青柳和邦さんがいまも完全な技術を伝えています。』と紹介されています。

1999(平成11)年1月6日にNHK長野放送局が、皇后陛下(現平成上皇妃)、皇太子妃雅子様、秋篠宮紀子様の各御成婚の際に使用した「飾り櫛の木地・素地の櫛」を挽いた方が、青柳和邦さんであることを紹介しています。青柳さんのお店には、松平健さん、松方弘樹さん、山本富士子さんなど日本の代表的な俳優さんの色紙が飾られ、皆さん櫛を求めてはるばる藪原までおいでいただいたことが伺えます。

また國學院大学教授、櫛の研究者として著名な樋口清之先生は、「稀に見る、もの創りびと」と雑誌で紹介しています。

「お六櫛」の民話

木曾の妻籠の旅籠屋にお六という美しい娘がいた。そのお六が頭痛に悩まされるようになり、旅人が諸国から薬を持ち寄ったが、どんな薬も効かなかった。

お六が御嶽山に願を掛けて断食したところ、「峰のミネバリで櫛をつくり髪をとかせ」とのお告げがあった。お六がそのとおりにすると痛みが嘘のようにひいた。お六はこの櫛を同じ病で苦しむ人に分けたいと思い、櫛を作っては配った。お六の櫛はたくさんの人に喜ばれ、その評判は旅人たちによって国中に広められた。

やがて材料のミネバリが妻籠で足りなくなり、木曾川の上流、鳥居峠まで求めるようになった。藪原の人は、自分の村からお六の櫛の材料になる木が持ちだされていくのを見て、自分達でも作ってみたいと考えた。

そのころ、鳥居峠のトチの空洞に捨てられ、藪原の女に育てられた松吉という男が、お六の旅籠屋の下男をしていた。松吉は風呂焚きの燃料に、制作に失敗したお六の櫛を使っていたので、そのうち作り方を覚えた。そこでお六の許しをもらって藪原に帰り、お六から教わった櫛の作り方をみなに伝授した。そうしてお六櫛は妻籠から藪原が中心となり、繁盛した。

(出典：『信州むかし語り 白山と民の話』はまみつを(しなのき書房 2011)より要約)

木祖村郷土館

「お六櫛」をはじめ、300年の伝統をもつ勇壮華麗な「藪原祭」、葉草の産地でもあった村の人々の暮らしぶりを伝える資料が展示されています。お六櫛のコーナーでは、当時の櫛職人の仕事場が再現されており、事前に連絡をすれば職人の実演が見学できる場合もあります。透き櫛・とかし櫛の製造工程から道具、その他櫛に関する文献史料、20分ほどの制作工程の映像などを見ることができます。

住所：木曾郡木祖村藪原189-1
開館期間：3月1日～12月25日
営業：9:00～16:30(入館は～16:00)
定休日：月曜日(祝日の場合は翌日)
入館料：大人300円、子ども100円(中学生以下)
連絡先：木祖村民センター／TEL 0264-36-2349



●お六櫛の製作体験

予約制でお六櫛が製作できません。専用の道具を使いながら、細かい作業を体験。

料金と所要時間：手引き4,000円／人、約4時間
みがき2,500円／人、約1時間半
受け入れ可能人数：3名～15名
会場：村民センター等(公共施設)
連絡先：木祖村観光協会
／TEL 0264-36-2543
※予約は3名以上から

南木曽ろくろ細工

■基本データ

- 発祥 南木曽町 江戸時代前期より
- 主な製品 木地鉢、茶櫃(ちゃびつ)、盆、汁椀など
- 指定 国伝統的工芸品(1980年)
- 共同組合 南木曽ろくろ工芸協同組合
/TEL 0264-58-2434



ろくろ細工とは、奈良時代より伝統的に作られている円形の挽物。ケヤキやトチなどの木目の美しい木をろくろで回転させながら、カンナでくり抜いて盆や碗などを作る伝統技術です。妻籠宿から国道256号線を車で飯田方面へ20分。「木地師の里」があります。明治時代に広葉樹の巨木を求め全国の奥山を移動した木地師が定着し、今も先祖伝来の仕事を続ける日本で唯一の歴史ある集落です。

漆畑の木地師が伊那の遠山谷から移って来たのは明治10年代。「手挽ろくろ」で仕事をしていたが、明治の終わり頃、阿島傘の産地(下伊那郡喬木村)から水車を動力とする「水車ろくろ」が伝わり、大きな木地も挽けるようになったことで、ろくろ細工の産地としての評価を高めました。

現代も主に木地鉢、茶びつなどが作られますが、サラダボウル、フリーカップ、花器などモダンな作品を作っている工房もあります。1980年(昭和55)、木目の美しさを最大限に引き出すその技法が評価され、「南木曽ろくろ細工」として国の伝統的工芸品に認定されました(ろくろ細工では唯一)。

●製作工程

選木から仕上げまですべての工程を一人の職人が行います。

①選木

国産のトチ、ケヤキ、セン、カツラなどから原木を選ぶ。木の皮をはいで汚れを落とし、木口面や表面を細部まで観察し、伐採時期や成長過程、木の特徴を見極める。作る製品は木の質によって変わるため、入念におこなう。



②玉切り・挽き割り

原木を輪切りにし、切った面を上にしてほしいの大きさに挽き割り。

③丸め

木目を生かすように気をつけながら外側を切り落とし、円形、楕円形に整える。

④荒挽き

ろくろを使って厚めにカンナで挽く。

⑤乾燥

木の含水率が10%程度になるまで乾燥させる。電気で乾燥させる場合は約1カ月、ストーブやいろりのある場所で乾燥させる場合は約3カ月。大きなものでは3年かかることもある。さらにこれを自然の中に置き外気ならしをして含水率12%ぐらまで戻す。乾燥させる時間は含水度で判断する。

⑥仕上げ挽き

ろくろを使い、カンナで仕上げ面を滑らかにする。

⑦仕上げ磨き

ろくろを使い、紙やすりを使って磨き上げる。

⑧トクサ磨き・漆磨き

白木製品は、水をつけながら「とくさ」や「すぐきわら」を使い磨いていく。漆磨きは生漆を3~6回すりこみながら磨いていく、いわゆる漆拭き。

南木曾ろくろ細工の歴史

明治10年代、南木曾町の漆畑や南沢は伊那谷に近く、トチなどの広葉樹が豊富にあり、木地師にとっては恵まれた地域でした。当時の蘭の庄屋が呼び寄せ、多くの木地師が移住しました。

明治時代、漆畑で多く作っていた挽物は「切板」と呼ばれたまな板や、「丸膳」という食事の際に各自が使うお膳でした。養蚕が盛んとなり、蚕を広げる浅い盆なども作られました。これらの挽物は清内路村に多く残されています。

木地師の挽物、ろくろの動力の歴史をみると、他の地方では千年以上も続く「手挽ろくろ」から、稲の穂を落とす脱穀機のような「足踏ろくろ」へと移ります。しかし、漆畑では「手挽ろくろ」から一気に「水車ろくろ」へと移行。この「水車ろくろ」の使用と豊富にある広葉樹により、大きなお盆や、こたつ板に使われる直径3尺もの「広蓋」、うどんを練る「木地鉢」などが作られ、漆畑の技術と生産性は大きく向上しました。1947年(昭和22)には電動ろくろが導入されました。

昭和30年代になるとプラスチック製品の出現で新しい営業形態が生まれます。水害の被害もあり、漆畑から南木曾の三留野、岐阜県坂下町、中津川市などへ移住し都市部で仕事をする業者が現れました。さらに妻籠宿を中心とする木曾路観光が賑わいをみせると「木地師の里」として地域を代表する観光スポットとなっています。

漆畑には、いまでも小椋、大蔵を名乗る木地師の末裔の職人が多く住み、工房を営んでいます。

南木曾の職人はずっと製造卸でやっていましたが、1975年(昭和50)くらいからはそれぞれが店を出して直売も行うようになり、観光客も来るようになりました。組合員はいま5軒に減っていますが、家具や仏具を手がけたり、スピーカーやボールペンを作ったり、それぞれが特徴を打ち出して時代に好まれる製品づくりを心がけています。2016年(平成28)からは東京の青山スクエアで展示販売を開き、木曾の技術力の高さを積極的にアピールしています。

南木曾ろくろ細工の素材

トチのほか、ケヤキ、センなども使います。トチは木目の構造が複雑で美しい木目が出ますが、挽くのは難しく高度な技術が要求されます。木目や木質、全体の雰囲気などを観察し、木によって作る製品を決めるといいます。



南木曾ろくろ細工
木地鉢

職人ごとのろくろカンナ

ろくろで木を成形するためのカンナには様々な種類があります。ろくろ細工の製作工程は職人がひとりですべて行いますが、このカンナ作りもそこに含まれ、ろくろ細工職人は自分の道具を自ら作ります。



●主な製品

・茶盆

南木曽ろくろ細工の主要製品。昔ながらの縁の高い深盆をはじめ、給仕盆、薄盆などがあります。素材はトチがほとんどでしたが、昭和40年代頃から木目の鮮やかなケヤキ、センなどが使われるようになりました。茶盆は挽物のなかでも大きいため、木目が存分に楽しめます。特にちぢみ、コブ、シカミ、カスリなどの木目は珍重されています。

・茶櫃(ちゃびつ)

茶器を収納する器で、蓋は裏返すと盆として使えます。昭和になってから作られましたが、実用性と木肌の美しさで需要が増し、一時は総売り上げの6割が茶櫃と茶盆で占められたほどでした。

・広盆(広蓋ひろぶた)

直径60センチ以上のもの。大きいため、木目が全体に広がる文様が楽しめます。

・他に、

菓子器、茶たぐ、銘々皿、茶筒、箸立て、湯のみ、汁椀、二段重など。



■主要参考文献／『日本の伝統工芸 4 中央高地』(ぎょうせい 1985)

『木地師光と影—もう一つの森の文化—』(日本木地師学会編、牧野書店 1997)

伝統工芸士

南木曽ろくろ細工の職人には、一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会により「伝統工芸士」に認定された人が8名います。伝統工芸士とは、経済産業大臣指定の国の伝統的工芸品の製造に従事している技術者の中から高度の技術・技法を保持していると認められた者です。

ためぬりわん 溜塗椀

すりうるし摺漆を施してあるお椀の上に更に溜塗を施す「溜塗椀」は繊細な木目が透けて見える作品です。



伝統工芸士の田上次男氏作 「溜塗椀」

工芸街道まつり

2001年(平成13)より11月最初の土曜日に南木曽町で開催される、南木曽町の工芸品イベントです。国道256号沿いで南木曽ろくろ細工(国指定伝統工芸品)、蘭桧笠(県指定伝統工芸品)、桶などの木工品の実演・特売が行われ、観光客を楽しませています。

あららぎひのきがさ

蘭桧笠

■基本データ

- 発祥 南木曾町 江戸時代～
- 指定等 県伝統工芸品(1982年)
- 共同組合 蘭桧笠生産協同組合
／TEL 0264-58-2727



あららぎ
ヒノキを短冊状に加工した「ひで」と竹で作られる伝統的な編み笠。江戸時代から、南木曾町の蘭地区で作られ続けています。軽くて風通しがよく、防水性にも優れているため、日よけ雨よけに適しています。農作業の際や船頭、御嶽山詣での人達に愛用され、江戸元禄期には年間10数万枚、明治最盛期には100万枚近く生産されていました。

飯田市大平のまんじゅう笠

蘭から木曾峠(大平峠)を越えた大平街道の大平。ここでは頭部の丸い「まんじゅう笠」が戦前まで作られていました。材料は蘭の桧笠と同じ桧の「ひで」で、下伊那地方で使われていたようです。遠山上村では「丸笠」「かぼちゃ笠」と呼ばれていました。

●製作工程

①玉切り

原木を必要な長さに切る。

②「ひで」作り

玉切り材を旋盤にかけて薄い板にし、裁断機で細く切り揃え、ひでに加工する。昔は鉋で薄く長く削っていた。

③編み組

ひでをイカダ編みにする。

④竹さし

円錐形に成型したもの(やまぶし)の内側に竹を差し込む。

これは強度補強のため。

⑤輪竹つけ

輪状の竹をやまぶしの内側に、ひでを曲げて仮り付けする。

⑥断ち切り

固定した輪竹に沿って、笠の縁切りをする。

⑦縁つけ

断ち切りした周囲に縁を二つ折りにして、笠針を使って糸で縫い付けて完成。

③から⑦のひでを編む工程は、組合員の家でおこなわれ、農作業などのかたわらに、内職で編まれている。ほぼ一日作業して、3蓋(かい)作るのが精一杯という。

* 桧笠を数える単位は「蓋(かい)」



●さし竹

強度を高めるために差す竹(さし竹)や輪竹は、12～2月の農閑期に一本一本手作業で削って作っている。この竹を入れることで、笠の強度が増すという。

伐採から仕上げまで一貫して行う伝統の桧笠

あらざひのきがさ

蘭桧笠は標高705mの木曾の山奥で江戸時代中期から作られている、350年の伝統を持つ編笠です。軽くて丈夫で、ヒノキのいい香りがすることから、木曾の名産として親しまれてきました。伐採から仕上げまで一貫して行うのが特徴で、すべて手作りです。

原木の伐採や加工など、力のいる作業を男が受け持ち、編むのは女性の仕事でした。慣れた編み手でも9時から16時までかかって3蓋^{かい}しか作ることができないほど手がかかります。丁寧に作られた桧笠は雨もしっかり防ぎます。現在、編み手の数は25名ほど。課題は後継者の育成で、年に2回、冬場に育成講習会を行っています。

飛騨から伝来した桧笠

蘭桧笠は江戸時代初期に飛騨の落辺からの移住者によって伝えられたもので、「落辺笠」と呼ばれていました。作った桧笠は、岐阜県恵那地方、天竜川流域の上伊那、下伊那、静岡県、愛知県の山間部まで売り歩き、「蘭笠」とも呼ばれています。民謡伊那節に「天竜下ればしぶきにぬれる。持たせやりたや桧笠」と歌われています。

1708年(宝永5)、木曾地方を配下に置く尾張藩が木曾五木の伐採を禁止したため、モミヤツガで笠を作っていたといいます。昔は蘭に嫁入りしてきた女性は、姑に桧笠の編み方を習い、それができてこそ一人前の主婦と言われたそうです。

桧笠作りの体験や製作体験ができます。

●桧笠の家(蘭桧笠生産協同組合)

各種ある笠のほか、サンバイザーや靴の中敷きなどを販売しています。隣の工房で笠作りの様子を見学したり、地元の作り手から教わりながら、小さな笠を作ることができます。3人以上、ひとり2,000円。所要時間2~3時間。要予約。

住所:木曾群南木曾町吾妻3321-1

営業時間:9:00~17:00(12月1日~3月31日は休業)

定休日:月、水曜日

連絡先:TEL 0264-58-2727



■主要参考文献『日本の伝統工芸4 中央高地』(ぎょうせい 1985)

『信州の伝統工芸の技を訪ねて』(上野滋数/撮影・著 ほおずき書籍 2005)

『手作り郷土玩具』(信濃毎日新聞社 1982)

木曾材木工芸品

■基本データ

- 主な生産場所 エリア全域
- 産地組合 木曾木材工業協同組合
- 住所 木曾郡上松町大字荻原1579-3
TEL 0264-52-5500
- 指定 県伝統的工芸品(1982年)



木曾における特色ある木曾材木工芸品

木曾の御料林から国有林への移管と、1959年(昭和34)の伊勢湾台風での国有林のおびただしい風倒木によって、新しい木曾材木工芸品が作られるようになりました。次のような特色のある工芸品が作られています。

1.木曾ヒノキのまな板

ヒノキのまな板は殺菌力があるということで作られるようになりました。料理店で使われる寿司用のまな板が人気です。

2.料理用舟(ヒノキ舟盛用の器)

舟の形を作るには高度な技術が必要で、大桑村で多く作られています。表面に透明ウレタンを塗って仕上げます。

3.木曾ヒノキの枝を素材とした
茶托・銘々皿

伊勢湾台風で倒木したヒノキの枝を利用して、茶托や銘々皿が作られました。枝を輪切りにし、ボンドを塗り乾燥させ、ろくろで仕上げます。

4.木曾ヒノキの香(ひのか)

ヒノキの香りを抽出した商品も数多く作られています。消臭・除菌効果を活かした入浴剤やスプレー、リネンウォーターやキャンドルなどが人気です。

5.木曾ヒノキの建具
欄間・組子・組子細工

木目の詰まった木曾ヒノキは繊細な組子の材料に適しているため、全国の建具屋から需要があります。JR九州の豪華列車の装飾にも使用されました。障子や天井、衝立、テーブルのほか、照明なども作られています。

6.木製の名刺・しおり・はがき

木曾五木を紙のように薄く加工し、薄い板の間に和紙を貼り合わせ切断します。木目の繊細さと木によって異なる色の違いが美しい製品です。

7.業務用板物製品

スーパーで一使用する板物、ペリカバーや、カセットコンロの箱など多くの種類の板物が作られています。

8.木曾ヒノキの手作り桶

高度な技術が必要とする桶職人が作る巨大な風呂桶は、全国の観光施設から需要があり、韓国、香港など海外にも人気です。

9.木曾ヒノキの摺り漆箸

木曾材木工芸品の中で最も多く作られているのが箸です。白木に摺り漆を施した茶褐色の箸は、軽くて汚れが付きにくく値段も手頃です。他にも特有の彫刻や、研ぎ出し模様を施した木曾塗りの箸など芸術的な箸もあります。

木曾材木工芸品は
木曾郡内のお土産店などで購入できます。

木曾材木工芸品の
後継者不足の課題

人口4,000人を切った南木曾町や上松町など、工芸品産業の中心地では人口の減少が止まりません。磨き上げた技術があっても、後継者がいないため廃業を余儀なくされることもあり、今後の大きな課題となっています。

木曾馬



木曾馬の里マップQR

■基本データ

【主な飼育場所】 長野県木曾地方、岐阜県飛騨地方

【飼育数】 2017年(平成28)現在、全国で約140頭

※純血種は絶えている。

(うち開田高原に37頭/2017年6月現在)

【保存会】 木曾馬保存会事務局

木曾郡木曾町開田高原末川15596-1

(木曾馬乗馬センター内) / TEL 0264-42-3085

【指定】 県天然記念物(1983年)

【祭事】 田立の花馬祭り

【開催日】 毎年10月の第1日曜日

【場所】 五宮神社(いつのみやじんじゃ)

木曾郡南木曾町 田立元組415

【指定】 県無形民俗文化財(1983年)

古くから木曾で飼育されていた「木曾馬」は、日本在来馬の一つで、長野県の天然記念物に指定されています。北海道の道産子や宮崎県の御崎馬と並ぶ日本在来馬種で開田高原に「木曾馬の里」があり、現在保存会が種の保存に取り組んでいます。比較的小となし気性の木曾馬はホースセラピーに適しており治療と癒しの場とする計画です。

また、南木曾町に伝わる五穀豊穰に感謝する「田立の花馬祭り」では木曾馬が集落を練り歩きます。

平安時代から軍事用、農耕用として大切に育てられてきました。



歴史的背景

木曾馬の先祖は蒙古系の馬といわれ、現在の馬の起源は2000年ほど前の縄文後期に飼われていた、小型の馬といわれています。

木曾の馬産の歴史は古く、大宝律令(701年)による牧場の制度化で、霧原牧(現在の岐阜県中津川市神坂辺り)において馬が生産されていたという記録が残ります。

その後、木曾街道の開通によって農耕文化が定着し、馬たちは山間高冷地の厳しい自然に適応する農耕馬として育てられました。

江戸時代には、木曾の代官・山村家がおこなった「毛附(けづけ)制度」によって木曾の馬産が確立します。それは領内の当歳駒(その年に生まれた馬)の戸籍をつくって自由売買を禁じ、2歳、3歳と毎年選定を重ねて領内に残す馬と売却する馬を振り分ける、というものでした。このため1760年ごろから馬市が開催されるようになり、福島県白河、鳥取県大山と並ぶ日本三大馬市のひとつとして賑わったといえます。17世紀後半頃からは、農民が富裕な馬主から馬を預かって飼育する馬小作制度が一般的となりました。

●馬市

木曽の山野いたるところで育てられる馬たちが、放牧中の自然交尾によって繁殖し、それが農家の経済を支える貴重な収入源となりました。1750年（寛延3）に市場の形状が整うと、その期間は大賑わいとなり、盛大な市場へと発展していきました。

徳川幕府が終わりを告げ、山村氏の統治から離れた明治時代になると、農家は自由に馬を売買できるようになりましたが、数をさばくには何らかの組織を必要とします。そこで馬市開催の役割を果たすようになるのが、福島村戸町役場でした。

馬市には多くの人々が訪れ、買い手は安曇、筑摩、伊那、諏訪、美濃、飛騨、尾張、三河、遠江、甲斐にまで及び、旅籠に泊まりきれない客は、民家が臨時に開いた宿に宿泊しました。馬を売った農家もまとまった買物や飲食をして、芝居や屋台も多くきて福島町の町はおおいに賑わいました。酒席ではさかんに木曽節が踊られ、「木曽のなかのりさん」が天下に知られたのは、御嶽山の登山客と馬市の買い手客のおかげともいわれています。

<1886年（明治19）創立当時の記録より>

- ・組合員数 3,232 人（畜用人含む）
- ・種牡馬頭数 48 頭・種牝馬頭数 4491 頭
- ・産駒頭数 1,263 頭
- ・売買頭数 1,652 頭
- ・同売上金高 11,163 円75 銭
- ・一頭平均 6 円75 銭

*注：1891年（明治24）の巡査の初任給が 8 円



木曽馬市（木曽町文化財資料室所蔵）

■主要参考文献／

- 『信州木曽馬ものがたり』（黒田三郎 信濃路 1977）
- 『木曽路大紀行～よみがえる木曽人の物語 <信州の大紀行シリーズ2>』（一草舎出版2007）
- 『木曾義仲物語』（信濃教育会出版部 1988）
- 『朝日日本歴史人物事典』（朝日新聞出版 1994）
- 『木曾・御岳わすれじの道紀行』（田中博 風媒社 2008）
- 『あれこれ木曽町再発見 木曽町を学ぶ』（木曽町を学ぶ本づくり検討会 木曽町観光協会2013）

日本が軍国主義に傾いていった明治時代、外国の大型種牡馬導入によって、木曽馬は次第に淘汰されるようになりますが、木曽の人々は密かに純系木曽馬の生産を続けていました。木曽の畑作農業の維持に厩肥きゅうひが欠くことのできない肥料だったことも大きな要因ですが、小格こかく（小型）の木曽馬は実際に馬の世話をする女性でも容易に扱うことができ、荷物を積んで山道を歩くことも得意だったからです。

何よりも人々は木曽馬の温厚な性格を愛していました。木曽馬の農耕馬としての体型、性質こそが、木曽谷の人々の生活を支えていたといっても過言ではないのです。

やがて軍馬徴発によって数が激減した木曽馬。終戦後、木曽馬の血脈をもつ牝馬が残っていたのは奇跡でした。49頭の牝馬が繁殖馬として登録され、1951年（昭和26）、長野県更埴市こうしよくし たけみずわけじんじゃの武水別神社に御神馬として残されていた木曽馬の牡馬神明号と鹿山号との間に牡馬が誕生します。この馬こそが、現在の木曽馬復活の根幹をになった第三春山号でした。

1969年（昭和44）木曽馬保存会結成。1983年（昭和58）には20頭の木曽馬が長野県天然記念物指定され、平成以降はジーンバンク事業（希少家畜の精子凍結）も進められています。そして旧開田村では、馬を飼育する人たちの高齢化を受け、木曽馬の集団飼育施設として1995年（平成7）に「木曽馬の里」を開設。木曽馬の最後の砦として、最大50頭の木曽馬を飼養することができるようになりました。

木曾馬の特徴

木曾馬は、日本に昔から飼われていた「日本在来馬」とか「日本和種」といわれる馬です。中型馬に属し、体高は平均133cmです。険しい山間高冷地で長年飼育された木曾馬は、厳しい自然環境に適応して極めて強健で粗食に耐え、ひずめは堅く、蹄鉄をうつ必要はありません。丈夫で安定性のある脚は、狭い山路でも踏み外すことなく急な坂道を安全に上り下りすることができます。



- 性格は一般的におとなしいとされるが、頑固な面もある。子育てと一緒に、甘やかせば人を見下すようになるし、厳しすぎれば人に怯えるようになる。馬ごとの個性もあるので、育てるときはそこを見極めることが大事。
- 栄養の少ない草で暮らしてきたため、腸が長く、腹がポテッと見える。そのため妊娠しているのかと勘違いされることがよくある。
(木曾馬保存会事務局スタッフ・談)

●木曾馬の里

開田高原の広大な草原にあり、乗馬体験や厩舎見学ができます。御嶽山の全容も見え、草をはむ馬は開田高原ならではの風景であり撮影ポイントになっています。

住所:木曾町開田高原末川15596-1

連絡先:木曾馬乗馬センター/TEL 0264-42-3085

●開田郷土館

馬具や馬の医術書を展示、農具・民具なども紹介し、開田高原の歴史を解説しています。中でも純血木曾馬「第三春山号」のはく製は貴重です。

住所:木曾町開田高原末川1899-4

連絡先:木曾町役場開田支所/TEL 0264-42-3331

田立の花馬祭り

花馬祭りは、毎年10月の第1日曜日に、豊作・安産・家内安全などの諸願成就を感謝して五宮神社で行われます。南木曾町田立地区の五宮神社は、1908年(明治41)に、南宮社・大平社・八幡社・熊野白山社・神明社が合祀し、南宮社だったところにおかれました。花馬は、湯立てを行っていた神明社を除く4社で行われていたもので、田立の古い文書によると300年以上前から伝わっています。



先頭馬には神が宿るヒモロギを、中馬には豊作を表す菊を、後馬には南宮社社紋の日月の幟を立て、そのまわりに五色の色紙によって稲穂をかたどった竹を365本ほど差し回しています。花馬の名称はこうした飾りから生まれました。なお、神馬は純系木曾馬です。

正午過ぎ、田立の駅前を出発した花馬の行列は、五宮神社の幟を先頭に各地区の代表、その後ろに笛・太鼓の囃し方、最後に花馬3頭がついて、五宮神社をめざしてゆっくり進みます。五色(青・黄・赤・白・黒)の幟はそれぞれ、明るい空・豊かに実った五穀・太陽・澄んだ水・肥沃な耕地を示しており、五穀豊穰とそのよき天恵への感謝を表しています。

花馬の行列が神社に到着し、境内を3回まわり終わると、人々が一斉に馬に飛びついて花を取り合います。花を家に持ち帰って、家の入り口にさすと家内に厄病神が入らない、畦にさすと虫除けの守りになるといわれています。特にヒモロギを取った人には最大の幸福があるといわれています。

けんぽうやましたけ

県宝山下家

■基本データ

- 住所 木曾町開田高原西野2730-5
- アクセス JR「木曾福島駅」からバス60分、伊那ICから60km80分
- 連絡先 TEL 0264-44-2007
- 指定 県宝(1994年)



マップQR



建物の特徴

間口11間余、奥行8間余、木造一部二階建の「切妻造(本棟造)」で、主材にマツやナラを使用し、大黒柱にはケヤキ、座敷には木目の細かいツガが用いられています。現在は鉄板葺きですが、建築当初は板葺きの上に石を置いて押さえにしていました。屋根の最頂部には「雀踊り」や「懸魚」といった装飾が取り付けられています。

間取りの特徴

「台所」を中心とした中央の居間は約30畳の広さを誇ります。御嶽山麓は寒さ厳しい高冷地であるため、二つの囲炉裏を設けたと考えられています。屋内の南側に3~4頭分の大きな馬屋があるのも特徴で、人と馬とが一つ屋根の下で暮らしてきた開田高原の民家の特色をよく示しています。

純血木曾馬「神明号」ブロンズ像

1951年(昭和26)、彫刻家石井鶴三氏が山下家に滞在し、純血木曾馬「神明号」をモデルにブロンズ像をつくり、当家に寄贈されました。

神明号は1939年(昭和14)に木曾郡内で生まれ、県内更埴市(現在:千曲市)八幡の武水別神社に御神馬として奉納され、戦時下の国の統制からのがれて戦後木曾馬復元の祖となりました。木曾馬としての高純度の血液をもった種雄馬でした。

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

山下家は、代々「馬地主」として栄えた豪家で、現存する住宅は1865年(慶応元)から翌2年にかけて建築されました。開田高原の往時の特徴を伝える最大規模の民家であること、建築年代が明らかで内部の建築意匠が優れていることなどから、長野県宝に指定されました。住宅内では、山下家伝来の馬医書や調薬器具、古文書や書画などが展示されているほか、1891年(明治24)築の土蔵(開田考古博物館)では、「柳又ポイント」と呼ばれる有舌尖頭器をはじめ、旧石器時代から縄文時代の遺物・出土品を展示しています。

江戸時代初期に飛騨から現地へ移り住んだ山下家は、1804~1818年(文化年間)から漢方薬の製造を始め、「伯楽」と呼ばれる馬医を兼ねた馬地主の家として繁栄します。明治から大正初期には300頭余りの馬を所有して各地の農家に貸し付け、仔馬の売却代から収入を得ていました。やがて、大正・昭和の農村不況をはじめ、戦後の社会構造の変革や農林業の機械化などの影響を受け、木曾馬の需要が減少するとともに衰退をたどりました。

第4章

宿場の賑わい・繁栄 (中山道木曾路11宿の紹介)



宿場と街道の発展

賑わう宿場の形成と地場産品の流通

木曾路は、鎌倉・室町時代までには信濃と京都・伊勢などを結ぶ重要な通路として発展していましたが、江戸時代には、五街道の一つ中山道の街道整備とともに木曾路11宿といわれる宿場が整備されました。

寝覚ねざめのとこの床、棧かけはし、鳥居峠とりいとうげから遙拝ようはいする御嶽山など木曾谷の情景は、訪れた多くの俳人や浮世絵師などを惹きつけ、詩歌や版画となって世に知られるようになりました。

宿場は訪れる人々を迎えることによる経済的利益の他に、木曾馬や木工品など地場産品の需要がもたらす生産・販売・運輸の拠点として賑わい、木曾谷の経済けんいんを牽引しました。

宿場は、幕府関係の旅人さんきんこうたいや参勤交代の大名通行のために人馬を常備し、輸送・通信などの業務を負う代わりに一般の通行に対する独占かせぎ的な稼が許されました。

多くの旅人の宿泊・休息のための旅籠はたごや茶屋などが設けられ、江戸時代中期には多くの人がそこで働き発展していきました。

江戸時代中期、森林保護政策が強化されましたが、蘭村では檜物細工ひものざいくの御免白木ごめんしらきの許可を得て、網笠あみがさの地場産業をおこしました。

農家の女性たちの手作業あらいぎひのきがさによる蘭桧笠は、旅人や、農作業、林業、土木など広範囲の用途に晴雨にかかわらず着用されたため、中山道を通じて全国に広まりました。

江戸時代中期、街道整備がすすみ庶民の御嶽登拝が盛んになると、全国から多くの御嶽信仰の人々が訪れました。訪れた信者の数は、登山道沿いなどに建てられた霊神碑れいじんひが数万基にのぼることからもその規模の大きさがわかります。御嶽山と木曾路を行き来する人々によって、木曾谷での流通はさらに促進されました。室町時代以来、御嶽山麓しゅげんじゃの修験者しゅげんじゃが食したといわれる「そば」は御嶽山麓開田の特産となり、登拝のために訪れた人々などによって、木曾谷の地場産品や薬「百草ひやくそう」などととも宿場から木曾路を辿り全国に広められました。

※御免白木
木曾の森林資源を厳しく管理した尾張藩から使用が許可された材木を割り半製品にした材料

近代に入り、御嶽山麓の森林鉄道に木曾ヒノキを満載した列車が走りました。木曾谷の人々が守り続けた木曾ヒノキは、再び木曾の代名詞としてよみがえりました。木曾谷のあらゆる人々がそれぞれの生業なりわいを活かして発展させた地場産業は、全国に名高い木曾馬や伝統工芸品などに結実けつじつしました。



妻籠宿保存地区

文豪 島崎藤村の著書『夜明け前』は「木曾路はすべて山の中である。」で始まります。木曾路は、人々の「山を守り、山に生きる」くらしを育みました。そのくらしは、森林の保護、宿場の保存、伝統工芸品の伝承を大切に思う心を培い、今も木曾谷の人々に息づいています。



野尻宿



馬籠宿高札場



神宮美林



一石柵立場茶屋



福島関所



第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教（御嶽山信仰）

第7章
その他
（観光宣伝など）

ふくしませきしよ

福島関所

■基本データ

- 住所 木曾郡木曾町福島5017-1
- アクセス JR「木曾福島駅」から徒歩約25分、伊那ICから30km40分
- 連絡先 福島関所資料館 / TEL 0264-23-2595
- 指定 国史跡(1979年)



マップQR



「福島関所」は、中山道の江戸と京都のほぼ中間にあたり、要衝として約270年間「入鉄砲・出女」などを取り締まった場所で、箱根、新居、碓氷と並び、天下の四大関所の一つに数えられています。

有事の際には関所をすぐ閉鎖できるよう、木曾川の断崖に臨む、険しく、狭い場所に設けられました。

関ヶ原の戦いで功績をあげた山村氏が、1869年(明治2)まで274年間、13代にわたって関守を務めました。

関所は、諸大名の妻子が江戸から逃亡することを監視する役割があり、「女手形」はここで没収され、江戸へ向かう女性には碓氷関所宛の書替手形が発行されましたが、1刻(2時間)の時間が掛かったといわれています。

関所跡は1975年(昭和50)に発掘調査がおこなわれ、遺構、建物の位置や規模等が文献史料と照合しながら確認されました。1979年(昭和54)に国の史跡に指定され、現在は史跡公園になっています。

敷地内には門や柵が復元され、関所の番所建造物を再現した福島関所資料館があり、関所通行に関連する古文書や用具、関所に置かれていた武具などが展示されています。



歴史的背景

福島関所は中山道福島宿から池井坂を上った江戸方に置かれていました。代官屋敷からは木曾川をはさんで対岸の高所にあり、一方は山、一方は木曾川に臨む断崖の上にあります。敷地は東門から西門までの間21間4尺(約41m)、南北山際から木曾川の断崖まで臨む柵まで16間(約30m)の狭い場所に設けられ、三方は木柵で囲まれていました。番所の背後は約40度の急傾斜の山で、大木が生茂り立ち入り禁止となっていました。

関所の番所は上番所(うわばんしょ)と一段さがった下番所(したばんしょ)があり、通常上番所には給人格(きゅうにんかく)2名、下番所には足軽同心4名ずつが当番で一昼夜交替で勤めました。

対岸の願行寺(がんぎょうじ)の時の鐘を合図に、明け六つ(午前6時頃)に門を開け、暮れ六つ(午後6時頃)に門を閉め、当番を交替しました。夜間は、飛脚や急な公用の使者、荷物継立人足以外の一般の旅人の通行は許されませんでした。

江戸時代は旅をするために通行手形が必要でした。手形は当時の戸籍である宗門改めを扱った寺や村の名主、庄屋などが発行しました。

上番は関所の責任者で、手形を受け取って照合し、通行許可を与えました。下番は手形持参人の取次、徒歩の女改め、鉄砲・荷物・長持ち改め、通行許諾の伝達のほか関所内の掃除、諸道具の手入れを担当していました。そのほかに、門番が夫婦で常駐し、門の開閉、掃除などに従事し、乗り物の改めなどをおこなっていました。

■主要参考文献 / 『木曾～歴史と民俗を訪ねて』(木曾教育郷土館部編著 信教出版部 2010)

『あれこれ木曾町再発見 木曾町を学ぶ』(木曾町を学ぶ本つくり検討会 木曾町観光協会2013)

『長野県の歴史散歩』(長野県の歴史散歩編集委員会 山川出版社 2006)

史跡 中山道

■基本データ

アクセス JR「南木曾駅」からタクシーで約10分、
中津川ICから約30分

連絡先 (一社)南木曾町観光協会 / TEL 0264-57-3123

指定 国史跡(1991年)

中山道は、1601年(慶長6)から翌年にかけて徳川家康により五街道の一つとして、江戸から京都までの重要な街道として整備されました。

史跡中山道として登録されている区間は馬籠峠から根の上峠までの総延長19.6kmのうち、中山道の旧態が良く残っている8.5kmです。

馬籠宿～妻籠宿間は約8kmありゆっくり歩いて約3時間程の所要時間となります。

途中、吉川英治の小説「宮本武蔵」で修行の舞台となった男滝・女滝や番所跡の一石桁などがあります。



男滝(おだき)



女滝(めだき)



与川道

木曾川沿いの中山道は土石流などでたびたび通行不能となったため、迂回路として大桑村と南木曾町の境にある根の上峠を越える与川道ができました。途中、中山道(与川道)を通して徳川家に降嫁した姫君(比宮・楽宮)の休憩所として設置された松原御小休所跡へ行くこともできます。江戸時代からほぼ変わることのない道筋は、往時の旅人の気分を感じることができます。

上久保の一里塚

江戸から数えて78番目の一里塚。1604年(慶長9)、幕府は江戸日本橋を起点に一里(約3.9m)ごとに五間(約9m)四方高さ一丈(約3m)の塚を築き、塚の上に木を植えさせました。上久保の一里塚には枝垂梅の古木があり、春先に花を咲かせ旅人を楽しませます。

いちこくとちたてばちや 一石柵立場茶屋

■基本データ

- 住所 長野県木曾郡 南木曾町吾妻下り谷1612-2
- アクセス JR「南木曾駅」からタクシーで10分、
中津川ICから約30分
- 連絡先 妻籠を愛する会／TEL 0264-57-3513
- 指定 国重要伝統的建造物群保存地区指定家屋



中山道からの一石柵立場茶屋

たてばちや
立場茶屋とは宿と宿の中間にあって旅人に
休息と利便を与えました。一石柵は妻籠宿と馬
籠宿ごめじゆくの中間に位置し、往時は17軒ほどの家
があり栄えていましたが、今では牧野家住宅1軒
だけになっています。

牧野家住宅は江戸時代後期の農家の建物
で、当初は間口が十間半もある大きなもので
したが、現在の建物は1872年(明治元)の建築
です。

現在は無料休憩所として活用されています。
建物内部には囲炉裏があり、千本格子から光
が差し込み、当時の生活の様子を垣間見ること
ができます。

一石柵立場茶屋のすぐ横には一石柵白木
改番所しらきあらためぼんしよ跡があります。



一石柵立場茶屋で旅行を楽しむ海外観光客

一石柵白木改番所跡

木曾谷の木々は、この地方を治めていた尾張
藩の重要な資源となっていました。

番人は輸送されている白木のすべてを確認
し、合法的に伐採されたものであることを証明
する公式の焼印のあるものしか通過させません
でした。

妻籠宿の白木改番所(木材・木工品などの
出荷取締り)は当初は少し北の下り谷に設置
されていましたが、1749年(寛延2)の山崩れによ
り一石柵に移されました。木曾では江戸時代中
期以降、木曾五木(ヒノキ・サワラ・アスナロ・コ
ウヤマキ・ネズコ)をはじめとする伐採禁止木の
出荷統制が続き、伐採規制は「木一本首一つ」
と言われるほど厳しく取り締まられていました。
統制は1869年(明治2)の藩籍奉還まで続きま
した。



一石柵立場茶屋前の八重のシダレザクラ(開花は5月GW前後)

宿場におかれた「本陣」と「脇本陣」

ほんじん

わきほんじん

江戸時代、幕府は江戸を起点とした各地を結ぶ5つの主要街道を整備しました。東海道、中山道、甲州街道、奥州街道、日光街道は、総称して「五街道」と呼ばれました。

この五街道の一つである中山道は、江戸と京都を結んだ街道で、全長132里(約550Km)の街道には69の宿場がおかれ、各宿場は多くの人で賑わいました。

宿場には「本陣」という身分の高い大名や皇族が宿泊する建物と「脇本陣」という本陣の予備施設、家臣や一般人が宿泊する「^{はたご}旅籠」が設けられました。



宮越宿本陣



脇本陣奥谷(妻籠宿) 林家家屋

「^{はたご}旅籠」と「^{きちんやど}木賃宿」



また、一般の旅人が宿泊するところには「旅籠」と「木賃宿」がありました。

旅籠では夕食と朝食を出し、店によっては昼食を出すところもありました。

一方、木賃宿は、旅人が米を持参し、薪代を払って自分で米を炊くかまたは炊いてもらいました。「木賃」とはこのときの薪の代金、つまり木^き銭を意味しています。

江戸時代以前には木賃宿が宿泊の本来の姿でしたが、庶民の旅が盛んになるにしたがい、次第に旅籠が増え、宿代も1830～1844年(天保年間)には旅籠屋は木賃宿の5倍以上もするというので、木賃宿は安宿の代名詞となってしまいました。場所も宿場のはずれなどにありました。

■主要参考文献／国土交通省 関東地方整備局 横浜国道事務所HP参考

中山道の参勤交代

江戸時代、中山道なかせんどうは東海道と比べ、陸路が多いため安定して通ることができたので、比較的多くの旅人が往来しました。東海道には伊勢湾の渡しや、大井川のような大河の渡しなどで、長期に渡る悪天候により渡場わたしばで止められることがありました。とはいえ、「木曾かけはしの棧、太田の渡し、碓氷峠がなくばよい」と言われたように、中山道にも険しい坂や激流の河川が旅人を阻みました。ですが交通量が東海道ほど過密でなく、休泊料も比較的安いこともあって旅行者に好まれました。

参勤交代の大名数は、東海道の146家に対して中山道は30家で、約5分の1程度であり、奥州道中の37家にも及びません。これを反映して宿駅の常備人馬数も、東海道の100人・100疋びきに対し、中山道は50人・50疋(うち木曾11か宿ほか5～6か宿はその半分)にすぎず、また本陣数は一宿平均1.1軒、旅籠屋はたご数は27軒で、東海道の約半分でした。

とくに木曾路11宿などでは常備人馬の確保がむずかしく、2～3か宿の合体継立すけごうが必要で、助郷人馬も山越えしたはるか遠方伊那谷の村々から呼び集めねばなりませんでした。

■参考文献／『長野県文化財保護協会編『中山道信濃26宿』(丸山雍成1980・信濃毎日新聞社)』

中山道を通りご降嫁した姫君

徳川家は天皇家との外戚関係を継続させるために、皇族や公家の娘を将軍の夫人にしてきました。これらの姫君たちはいずれも中山道を通して江戸に向かいました。姫君の通行が多くあったため、中山道は姫街道とも呼ばれています。

中山道は、江戸へ輿入れする姫君の通行が多く、浅宮あさのみや(伏見宮家の姫宮)、比宮なみのみや(伏見宮家)、五十宮いそのみや(閑院宮家)、楽宮かんのみや(有栖川宮家)、登美宮とみのみや(有栖川宮家)、有姫ありひめ(鷹司家)、寿明君すめぎみ(一条家)、鋭姫えいひめ(広幡家)など京都の宮家や公家の姫たちが将軍家や水戸徳川家などに輿入れするために通行しました。

もっとも有名なのが十四代将軍 徳川家茂とくがわいえもちへ嫁いた和宮かずのみやです。

輿入れ時の年月日	姫君の名前	年齢	嫁ぎ先
1731年(享保16)4月	比宮(なみのみや)	19歳	9代将軍 家重
1749年(寛延2)3月	五十宮(いそのみや)	11歳	10代将軍 家治
1804年(文化元)9月	楽宮(さざのみや)	9歳	12代将軍 家慶
1831年(天保2)3月	登美宮(とみのみや)	27歳	水戸家 徳川斉昭
1831年(天保2)9月	有姫(ありひめ)	9歳	13代将軍 家定
1849年(嘉永2)9月	寿明君(すめぎみ)	23歳	13代将軍 家定
1861年(文久元)11月	和宮(かずのみや)	16歳	14代将軍 家茂



和宮内親王

■主要参考／中津川市中山道歴史資料館

皇女和宮の大行列

1861年(文久元)、孝明天皇の妹である和宮内親王が第14代将軍徳川家茂へ降嫁しました。その行列は、中山道始まって以来の大行列で、随行の公家や護衛の武士、荷物を運ぶ人足などが前後を固め、人数は約2万人ともいわれ、4つのグループに分れて進んだ花嫁行列は長さは77kmにも及びました。

和宮の宿泊地は10月29日に中津川宿、翌日からの木曾路11宿での宿泊は11月1日が三留野宿、2日が上松宿、3日が藪原宿とあります。

京都を出発したのは10月20日、江戸入城が11月15日ですから24泊25日の行程でした。



10月29日和宮の行列

至る 江戸

上松宿 行列の第1陣

- 御縁組御用係
 - ・菊亭中納言、三条中納言
- 供奉諸公卿
 - ・今城左中将、千種左少将
- 御奉行職事後騎
 - ・葉室右大弁

総勢394人余
継立て 人足: 3,530人 馬: 120頭

53km

三留野宿 行列の第2陣

- 御縁組御用係
 - ・中山大納言
- 武家伝奏御用
 - ・広橋一位、野宮宰相
- 供奉諸公卿
 - ・小倉侍従、幸徳弁、広橋卿

総勢365人余
継立て 人足: 3,050人 馬: 124頭

24km

中津川宿 行列の第3陣(本行列)

- 和宮親子内親王
 - ・庭田宰相典侍ノ局
 - ・能登ノ局・橋本宰相中将
 - ・橋本大夫侍従
 - ・勤行院(宮の生母)
- 随行の公家等 123人
- 護衛の武家等 233人

総勢4,000人余
継立て 人足: 13,814人 馬: 405頭

大久手宿 行列の第4陣

- 武家伝奏御用
 - ・坊城中納言
- 供奉諸公卿
 - ・岩倉侍従、富小路中務大輔
 - ・北小路左近将監

総勢282人余
継立て 人足: 2,563人 馬: 71頭

至る 京都

■参考/中津川市中山道歴史資料館

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

現代の皇女和宮降嫁行列

●馬籠宿場まつり

馬籠宿で毎年11月上旬に開催されている馬籠宿場まつりでは、幕末に皇女和宮が中山道を通って嫁いだ様子を再現した「皇女和宮降嫁行列」を開催しています。和宮や女官に扮した行列が宿場を練り歩きます。



歌人・俳人に愛された木曾

中山道を旅した著名人



貝原益軒 かいばら・えきけん(1630-1714) ●福岡藩士、儒学者、本草学者

1685年(貞享2)、江戸から中山道を通って京都まで旅をしたと、『東路記』(別名『木曾路之記』)に記述があり、木曾の棧のことを書いています。

是より七八町下りて木曾のかけ橋有。木曾川にかけたる橋にはあらず。山のそば道の絶えたる所にかけたる橋也。右の方は木曾川のきはなり。横二間長さ十間ある板橋也。欄干有り、兩旁は石垣をつき、むかしはあやうき所也けらし。今は尾州君より此橋を堅固にかけ給て、聊あやうき事なし。



松尾芭蕉 まつお・ばしょう(1644-1694) ●俳人

更科の名月を見るため木曾路に入ったと『更科紀行』に記述があり、『野ざらし紀行』『笈(おい)の小文』でも中山道を歩いています。

送られつをくりつ果ては木曾の秋

(檜川支所駐車場 塩尻市大字木曾平沢1451-138)
(中津川市馬籠 新茶屋)

**木曾の栃 うき世の人の 土産かな
ひばりより うへにやすらふ 峠かな**

(木祖村 鳥居峠丸山公園内 木曾郡木祖村藪原)

杜かげや われらもきくや 郭公

(木祖村 藪原神社参道途中 木曾郡木祖村藪原499-1)

思い立つ 木曾や四月の桜狩り

(木曾町新開・福島宿の手前、国道19号の福島トンネル手前500m、警察署向かい 左側の落石防止金網切目の中)

さざれ蟹^{かに} 足這いのぼる 清水哉

(福島 木曾福島郷土館裏 木曾郡木曾町福島5823-8)

かけはしや 命をからむ 蔦かつ羅

(福島 津島神社 木曾郡木曾町福島6015-3)
1766年(明和3)福島の人巴笑が初めて石碑として建立し崖崩れで埋まったものが、明治期に発見され、1882年(明治15)にこの神社に建立されました。

かけはしや 命をからむ 蔦かつら

(上松町 木曾の棧の左岸と右岸 木曾郡上松町上条1350)

ひる顔にひる寝せふもの床の山

(上松町 臨川寺境内 木曾郡上松町上松1704)



伊能忠敬 いのう・ただたか(1745-1818) ●商人、測量家

正確な日本地図を作るため全国を測量しました。1807年、第7次測量調査で九州へ向かう際に中山道を測量し、その記述が『伊能忠敬測量日記』に残されています。



大田南畝 おおた・なんぼ(1749-1823) ●文人、狂歌師、御家人

狂歌師・蜀山人として知られますが、御家人としても優秀でした。大阪銅座勤務後、中山道を通って江戸へ帰還しています。

江戸時代、大田南畝(蜀山人)が『壬戌紀行』(じんじゅつきこう)で妻籠を次のよう描写しており、妻籠ではいまでもその様子が残っているといわれています。

「妻籠の駅は馬籠とともにひなびたり。駅舎のかんばんに膳めし、うり銭、などかけり。又名物合もろ白、とかけり」



横井也有 よこい・やゆう(1702-1783) ●武士、国学者、俳人

1745年(延享2)4月13日、横井也有は第八代尾張藩主宗勝公のお供をして江戸から帰る時に臨川寺に立ち寄っています。

綿入れを木曾路の夏や花の旅

(木曾福島駅 木曾町福島)

上松町臨川寺境内に黒色の粘板岩の小さな自然石に彫られ建てられています。巴笑と福島の連中によって建てられました。横井也有は尾張藩の重臣ですが、俳句、和歌、狂歌、書画と何でもこなした文化人で俳文集「鶉衣」(うずらころも)を著しています。

筏師に何をか問む青あらし

(上松町 臨川寺境内 木曾郡上松町上松1704)



十返舎一九 じっぺんしゃ・いっく(1765-1831) ●江戸時代後期の戯作者、絵師

江戸後期の大衆作家・浮世絵師である十返舎一九は1811(文化8年)に初めて信濃を訪れ、中山道を軽井沢から木曾路へ抜けています。

これをもとに、『木曾街道続膝栗毛』第3編(文化9年)、第4編(文化10年)、第5編(文化11年)が書かれています。

1814年(文化11)には、木曾から松本に入り、穂高、大町、新町、稲荷山を通って善光寺に参詣し、越後へ抜けました。これが、『木曾街道続膝栗毛』第6編(文化12年)、第7編(文化13年)、『従木曾路善光寺道続膝栗毛』第8編(文化13年)の材料となりました。

峠集落(中津川市)に句碑があります。

渋皮のむけし女は見えねども栗のこはめし(強飯)ここ乃名物

(中津川市馬籠 馬籠峠 清水公衆トイレ)

1816年(文化13)には、『続膝栗毛 木曾街道』に寝覚の床のことも書いています。

「此ところに臨川寺といふ景地あり。寝覚の床といふこれなり。むかし浦島太郎釣をたれし所なりと云伝う」

話では主人公の弥次郎兵衛と喜多八、繋げて『弥次喜多』が京を出発し中山道を善光寺までの道のりの旅の滑稽本。木曾路は『妻籠宿』『野尻驛』『須原驛』『寝覚の床』『上松宿』『福島驛』『宮の腰驛』『藪原宿』『奈良井驛』『贄川驛』の話となっています。



良寛 りょうかん(1758-1831) ●曹洞宗の僧侶、歌人、漢詩人、書家

てまり上人といわれた良寛が、木曾路を通った折 詠まれた2首です。

この暮れのもの悲しきに若草の妻呼びたてて小杜鹿鳴くも

(南木曾町久保洞中山道「上久保」一里塚100m妻籠寄の久保洞(くぼほら)道標近傍)

さむしろに衣かたしきぬばたまのさ夜ふけ方の月を見るかも

(南木曾町読書与川 古典庵跡)



日下部金兵衛 くさかべ・きんべえ(1841-1932) ●写真家

横浜で写真館を開き、各地の彩色写真を残しています。『金幣(きんぺい)アルバム』に、松井田から木曾までの写真が収録されています。(1886年)



正岡子規 まさおか・しき(1867-1902) ●俳人、歌人、国語学研究者

1891年(明治24)、東京大学の学生だった正岡子規は善光寺を参拝した後、善行寺街道、木曾路を通り、愛媛県の松山に帰る旅をしました。

「かけはしの記」に次のような記述があります。

妻籠通り過ぐれば三日の間寸時も離れず馴れむつひし岐蘇河に別れ行く。何となく名残惜まれて若し水の色だに見えやせんと木の間／＼を覗きつゝ迎れば馬籠峠の麓に來たり。

此の山を越ゆれば木曾三十里の峽中を出づるとなん聞くにしばしば越し方のみ見かへりてなつかしき心地す。

白雲や 青葉若葉の三十里

(南木曾町 馬籠峠頂上付近)

「上松を過ぐれば程もなく寢覚の床なり。寺に至りて案内を乞へば小僧絶壁のきりきには立ち遙かの下を指してここは浦島太郎が竜宮より帰りて後に釣を垂れし跡なり。(中略)誠やここは天然の庭園にて松青く水清くいづこの工匠が削り成せる岩石は 峨々として高く低く或は凹みて渦をなし或は逼りて滝をなす。いか様仙人の住処とも覚えてたふとし。」(『かけはしの記』での寢覚の描写)

かけはしや水へとどかず五月雨

(木曾の棧 上松町上条1350)

木曾の棧とは対岸へ架した橋ではなくこの絶壁に平行して作られた栈道であった。この地に建立されていた明治天皇駐蹕碑、芭蕉句碑等は総て橋を渡った対岸の地に移された。現在も対岸から保存された慶安の石垣を見ることができる。

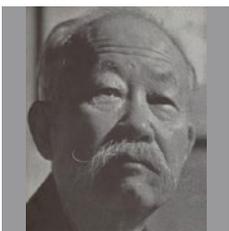
寝ぬ夜半を いかにあかさん 山里は 月出づほどの空だにもなし

(大桑村須原894)

桑の実の 木曾路出づれば 穂麦かな

(中津川市馬籠 新茶屋 中山道の路傍)

「かけはしの記」には、この句の前に「馬籠下れば山間の田野照稍々開きて麦の穂已に黄なり。岐蘇の峽中は寸地の隙あらばここに桑を植え一軒の家あらば必ず蚕を飼うを常とせしかば、今ここに至りて世界を別にするの感あり。」と述べています。



幸田露伴 こうだ・ろはん(1867-1947) ●小説家

幸田露伴が木曾路を訪れたのは1890年(明治22)の事で、須原宿で宿泊した時の経験が代表作である「風流仏」(ふうりゅうぶつ)の制作の基になったとされます。

小説「風流仏」は、桜の花漬を売りに来た娘に、旅の仏師が恋をする物語です。

風流仏には、桜の花漬について下記のように書かれています。

ご覧下され 是は当所の名誉花漬、今年の夏の暑さをも越して 今降る雪の真っ最中、色もあせずにおります梅桃桜のあだくらべ、御意に入りましたら陰膳を信濃へ向けて人知らぬ寒さを知られし都の御方へ御土産に、...

須原駅前前の文学碑に「幸田露伴と須原宿」と題して次のように刻まれています。

「文豪幸田露伴は明治22年冬の頃木曾路を旅して須原に泊る。

彼はこの地を訪ねた縁を基にその出世作小説「風流仏」を著す。

時に22歳。

ここに文中の一部を抜粋し記念碑として文豪露伴を偲ぶ。」とあり、

小説「風流仏」の最初の部分が刻まれています。



島崎藤村 しまざき・とうそん(1872-1943) ●小説家

日本を代表する作家であり、藤村の故郷である馬籠宿を中心に木曾路周辺を題材にした作品も多く見られます。

「昼食の時に寢覚に送ろうとして道を急ぐことは、木曾路を踏んで見るもののひとしく経験するところである。そこに名物の蕎麦がある。春とは言ひながら石を載せた板屋根に残った雪、街道の側に繋いである駄馬、壁を泄れる煙……寢覚の蕎麦屋あたりはまだ冬籠りの状態から完全に抜けきらないやうに見えていた。」(『夜明け前』で蕎麦屋の風景を描く一説)

木曾郷土館と中津川市馬籠陣場^{じんばうえ}上展望台に『夜明け前』の文学碑があります。

「木曾路はすべて山の中である。あるところは岨(そば)づたひに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いてゐる。」(『夜明け前』冒頭第一部序の章)

「寢覚は浦島の故事をかりて、岩のほとりのながめ深く静かなところに、浦島の釣を垂れたといふ床もある。臨川寺の弁天堂には浦島の釣竿といふのがある。そのほりに姿見の池もあって、奇を好む旅人の必ず立ち寄り名所となつてゐる。(中略)この竜宮の入口にも秋は暮れて、垣根に残っている黄菊の花もあはれであった。」(『一葉舟』(ひとはぶね)木曾路日記(きそだに)につき)での寢覚の描写)

日本遺産木曾路 構成文化財 ⑫島崎藤村宅(馬籠宿本陣)跡4章-115P参照

●島崎藤村 115P参照 ●藤村記念館 116P参照



旧小林寫真館本店
小林銀汀 撮影

種田山頭火 たねだ・さんとうか ●(1882-1940)俳人

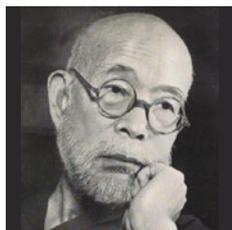
種田山頭火が木曾路を訪れたのは1939年(昭和14)の事で「旅日記」にその行程が記載されています。

おべんとうを食べて洗ふて寢覚めの床で

(上松町 臨川寺境内 木曾郡上松町上松1704)

さくらちりをへたるところ 旭将軍の墓

(木曾町 興禅寺木曾義仲墓所の前 木曾町福島門前5659)



斎藤茂吉 さいとう・もきち(1882-1953) ●歌人、精神科医

1936年(昭和11)、斎藤茂吉がアララギ歌会に出席するため、三留野から大平峠を越えて飯田へ向かいました。

このとき「大平峠」と題した歌が17首詠まれています。その中の一首を刻んだ歌碑が南木曾側の木曾見茶屋付近に建立されています。

麓には あららぎという村ありて 吾にかなしき 名をぞとどむる

(南木曾町南木曾側の木曾見茶屋付近)

文化の行き交う木曾に見る浮世絵

木曾海道六拾九次・木曾路11宿

『木曾海道六拾九次』は1835年(天保6)頃着手され、当時、美人画で名をはせた浮世絵師・溪斎英泉(1791年～1848年)が手がけ、途中、『東海道五拾三次』で成功を納めた歌川広重(1797年～1858年)に受け継がれました。

艶やかな美人画を得意とする英泉と、叙情的風景を描く広重という、作風の異なる二大作家による連作は、他の風景画にない異色の魅力を持つ大作中の大作と言われています。



贄川宿

きそかいどうろくじゅうきゅうつぎのうち にかわ
木曾海道六拾九次之内 贄川 歌川広重
夕暮れ時の贄川宿旅籠



宮ノ越宿

きそかいどうろくじゅうきゅうつぎのうち みやのこし
木曾海道六十九次之内 宮ノ越 歌川広重
木曾橋にかかる大橋



奈良井宿

きそかいどう ならいじゅうめいさんてんのす
岐陽街道 奈良井宿名産店之図 溪斎英泉
鳥居峠麓のお六茶屋



福島宿

きそかいどうろくじゅうきゅうつぎのうち ふくしま
木曾海道六拾九次之内 福しま 歌川広重
福島関所東門から番所



藪原宿

きそかいどう やぶはらとりいとうげすずりしみず
木曾海道 藪原鳥居峠硯ノ清水 溪斎英泉
鳥居峠から望む御嶽山



上松宿

きそかいどうろくじゅうきゅうつぎのうち あげまつ
木曾海道六拾九次之内 上ヶ松 歌川広重
小野の滝(中山道沿い)

葛飾北斎(かつしか ぼくさい)

しょくたきめぐり きそかいどうおののぼくふ
 諸国滝廻り 木曾海道小野ノ瀑布 葛飾北斎筆
 1833年(天保4)大判 錦絵
 所蔵先/「島根県立美術館蔵」

木曾海道六拾九次でも「上ヶ松」(歌川広重)に描かれています。北斎の名画、小野の滝。上松町に現存する滝ですが、眼前の中山道は国道19号線になり、滝頭上JR軌道が架けられ当時の名勝の面影は滝の流れだけとなってしまいました。想いをはせることができます。滝壺脇の不動尊御堂と石碑、常夜灯など当時の御嶽信仰の水行の場所でもあったようです。



第1章
 日本遺産とは
 日本遺産木曾路

第2章
 江戸時代以前の
 木曾の暮らし

第3章
 尾張藩による森林保護
 と地場産業の奨励

第4章
 宿場の賑わい・繁栄
 中山道・木曾路11宿

第5章
 明治以降の木曾檜活用、
 森林鉄道

第6章
 木曾の暮らし、風土、
 宗教(御嶽山信仰)

第7章
 その他
 (観光宣伝など)



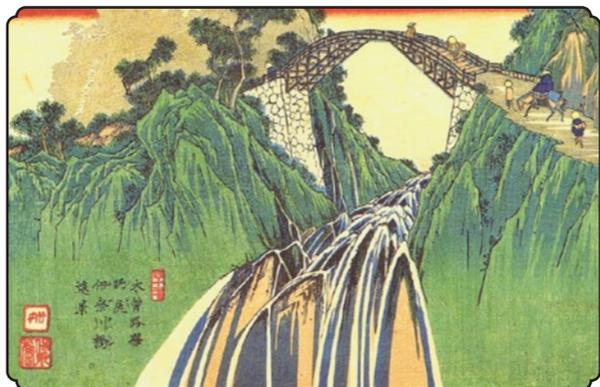
須原宿

きそかいどうろくじゅうきゅうつぎのうち すはら
 木曾海道六拾九次之内 須原 歌川広重
 須原の鹿島神社と大杉



妻籠宿

きそかいどうろくじゅうきゅうつぎのうち つまご
 木曾海道六拾九次之内 妻籠 歌川広重
 馬籠峠付近の峠道



野尻宿

きそかいどうろくじゅうきゅうつぎのうち のじり
 木曾路駅 野尻 伊奈川橋遠景 溪斎英泉
 伊奈川橋と岩出観音



馬籠宿

きそかいどう まごめえき とうげよりえんぼうのず
 木曾街道 馬籠驛 峠ヨリ遠望之図 溪斎英泉
 馬籠峠から西を遠望

※「木曾海道六拾九次」については
 図版の表記どおり、「街道」ではなく「海道」として記載します。



三留野宿

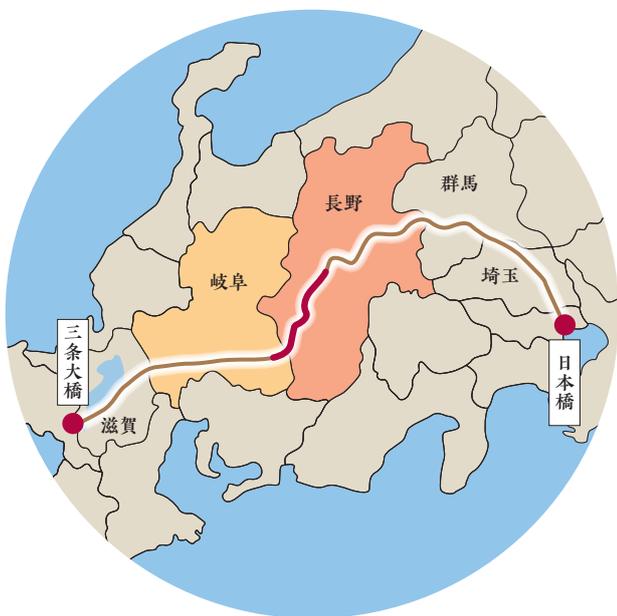
きそかいどうろくじゅうきゅうつぎのうち みどの
 木曾海道六拾九次之内 三留野 歌川広重
 東山神社を近くの畑から望む

中山道六十九次^{つぎ}-木曾路11宿

江戸時代に整備された宿場町

1600年(慶長5年)関ヶ原の戦いによって覇権を確立した徳川家康は、江戸を中心とする五街道(東海道・中山道・日光街道・奥州街道・甲州街道)を整備しました。中山道は、1601年(慶長6)から伝馬を出す宿場に朱印状が出されており、この頃成立しました。

家康は全国支配のために政治・軍事上の役割を果たす宿駅伝馬の制を、1603年(慶長8)に開幕する以前から定めて実施しました。このため宿駅は一度に設置されず、中山道が確定したのは江戸時代前期、参勤交代が制度化された1630年代(寛永の中頃)といわれています。



中山道の主要ルートは、日本橋→大宮→熊谷→高崎→軽井沢→塩尻→福島→馬籠→大井→伏見→関ヶ原→草津(東海道と合流)→京都。

江戸から武蔵国(埼玉県)、上野国(群馬県)、信濃国(長野県)、美濃国(岐阜県)、近江国(滋賀県)を経て京都に至ります。

そのうち木曾路と呼ばれるものは贄川～馬籠の11宿。起点の日本橋から数えると、第33～43次にあたります。

中山道木曾路11宿

- 第33次 贄川宿(にえかわ)(長野県塩尻市)
▼7.4km
- 第34次 奈良井宿(ならい)(長野県塩尻市)
▼4.9km 鳥居峠の難所
- 第35次 藪原宿(やぶはら)(長野県木曾郡木祖村)
▼7.7km
- 第36次 宮ノ越宿(みやのこし)(長野県木曾郡木曾町)
▼7.4km
- 第37次 福島宿(ふくしま)(長野県木曾郡木曾町)
▼9.0km 木曾の棧の難所
- 第38次 上松宿(あげまつ)(長野県木曾郡上松町)
▼12.4km 寝覚めの床
- 第39次 須原宿(すはら)(長野県木曾郡大桑村)
▼7.0km
- 第40次 野尻宿(のじり)(長野県木曾郡大桑村)
▼8.9km
- 第41次 三留野宿(みどの)(長野県木曾郡南木曾町)
▼4.7km
- 第42次 妻籠宿(つまご)(長野県木曾郡南木曾町)
▼7.4km
- 第43次 馬籠宿(まごめ)(岐阜県中津川市)

全長は約76.8km

*距離は『中山道浪漫の旅(東編)』(岸本豊 信濃毎日新聞社)著者による計測距離。
一般的には、『大概帳』に記された里程を合わせ、全長約88kmと紹介されることが多いですが、必ずしも正確ではありません。

古くは「木曾路」「中仙道」とも呼ばれ、「中山道」に統一されたのは1716年(正徳6)。2016年(平成28)で300年を迎えました。

総距離は135里24町8間(約538km)で、同じく江戸と京都と結ぶ東海道より約41km長く京都まで要した日数は約15日(東海道は川留めがなければ約13日)です。交通量は東海道の半分

ほどでしたが、天候が荒れると川が渡れなくなり、大幅に遅れることのある東海道に比べ、日程通りに行程を組めることから、険しい峠があるなど高低差があるにもかかわらず、商人はむしろ中山道を使うことが多かったようです。

江戸の五街道の中でも歴史的な建物がよく保存されているエリアが多いため、歴史好き、街道好き、芭蕉ファンなど、歴史に関心をもつ観光客が多く訪れます。ひとつの宿場だけでなく、11の宿場を通して楽しもうという観光スタイルに関心をもつ人も少なくありません。

江戸時代の宿場の規模

1843年(天保14)

奈良井宿は旅籠数5に対して家数409と宿内人口が多く、江戸時代から曲げ物、櫛、木曾漆器などの木工業が盛んで旅の土産物としても人気がありました。旅籠数も多く宿内人口の多い上松宿は木曾檜の集積地として栄えていました。

- 贄川 [第33次]
(本陣1、脇本陣1、旅籠25、家数124、宿内人口545人)
- 奈良井 [第34次]
(本陣1、脇本陣1、旅籠5、家数409、宿内人口2,155人)
- 藪原 [第35次]
(本陣1、脇本陣1、旅籠10、家数266、宿内人口1,493人)
- 宮ノ越 [第36次]
(本陣1、脇本陣1、旅籠21、家数137、宿内人口585人)
- 福島 [第37次]
(本陣1、脇本陣1、旅籠14、家数158、宿内人口972人)
- 上松 [第38次]
(本陣1、脇本陣1、旅籠35、家数362、宿内人口2,482人)
- 須原 [第39次]
(本陣1、脇本陣1、旅籠24、家数104、宿内人口478人)
- 野尻 [第40次]
(本陣1、脇本陣1、旅籠19、家数108、宿内人口986人)
- 三留野 [第41次]
(本陣1、脇本陣1、旅籠32、家数77、宿内人口は594人)
- 妻籠 [第42次]
(本陣1、脇本陣1、旅籠31、家数83、宿内人口418人)
- 馬籠 [第43次]
(本陣1、脇本陣1、旅籠18、家数69、宿内人口717人)

(出典:『天保14年改め中山道宿村大概帳』)



「これより南 木曾路」の碑



「これより北 木曾路」の碑

江戸時代の街道旅行

江戸時代には中山道をはじめとする街道を多くの庶民が旅行しました。こうした旅行が盛んになったのは、右の理由によると考えられています。

庶民の旅行の代表は伊勢参りであり、1705年（宝永2）のブームでは本居宣長が松坂の宿で50日間の通行人の数を326万人と記録しています。

同様に善光寺参り、御嶽山参りなどの信仰の旅が盛んにおこなわれました。旅へは3～5人のグループで出かけるのが一般的で、往来手形（パスポートにあたるもの）が必要でした。道中記（旅行ガイドブック）も盛んに刊行されました。代表的なものに『^{みやこじ}都路』『中山道往来』などがあります。

- 平和な時代が続き、旅先での安全が増した
- 街道や宿場が整理され、旅行のためのインフラが整った
- 庶民にも蓄えができ、旅行の可能な経済的ゆとりができた
(また信仰の旅であれば、旅人に施しが与えられる文化があった)

江戸後期、江戸の農民・国三郎が伊勢参りに出かけた際の旅費		
費目	当時の費用	現代換算
旅籠代(15泊)	2,904文	8万7,120円
昼食・間食・茶代	1,095文	3万2,850円
菓子・団子など	421文	1万2,630円
大井川渡し	180文	5,400円
その他渡し舟	265文	7,950円
駕籠	1,456文	4万3,680円
社寺賽銭	308文	9,240円
草鞋(わらじ・11足)	163文	4,890円
按摩(あんま)	24文	720円
その他(ちり紙など)	174文	5,220円
合計	6,990文	20万9,700円

(出典:coop 共済サイト『弘化二年伊勢参宮覚』による東海道の旅費)

当時の旅費や服装

旅籠賃は天保の頃で150～160文、幕末期で200文。時代によって相場が異なりますが、1文=25円換算で1泊2食付き4,000円弱～5,000円。宿泊客が食料を持参し、自炊することができる木賃宿では、料金は50文ほどで、旅籠の1/4から1/3で済みました。(現在でいえば素泊まり宿やゲストハウスの感覚に近い)。

当時の金銭は(札がないため)重く(1両分で4貫目(16kg)の重さ)、銭は500文くらいしか持ち歩かず、あとは手持ちの分判(1部金や1分銀など)を両替するのが一般的でした。

江戸時代の一般的な旅姿

● 男性:

菅笠、道中着、股引に脚絆、足元は素足に草鞋、道中差し

● 女性:

菅笠、着物の上から塵除けの浴衣、脚絆、足元は足袋に草鞋、杖

《女性》



《男性》



現在も営業する主な歴史的建築物の宿



旅館糸ちごや 奈良井宿

創業:江戸中期 当初の業態:旅籠
長野県塩尻市奈良井493

「糸ちごや旅館」は、寛政年間の創業以来、200年以上経った現在も旅館として営業しています。



マップQR



御宿伊勢屋 奈良井宿

創業:江戸後期 当初の業態:旅籠
長野県塩尻市奈良井388

1818年(文政元)創業の老舗の旅籠・伊勢屋は、下問屋の時期もありました。建物は現在も往時の風情を残しています。



マップQR



木曽の宿いわや 福島宿

創業:江戸中期 当初の業態:旅籠
長野県木曽郡木曽町福島5169

江戸時代より350余年続いてきた、木曽路でいちばん古い老舗旅館です。11組の宮家、文人、著名人らが宿泊しました。



マップQR



おん宿蔦屋 福島宿

創業:江戸中期 当初の業態:旅籠
長野県木曽郡木曽町福島5162

創業約320年、木曽福島の街道沿い、木曽川に面した天然の露天風呂、木曽のおもてなし料理饗応料理おごっつおが楽しめます。



マップQR



田政旅館 上松宿

創業:江戸末期 当初の業態:旅籠
長野県木曽郡上松町本町通り4-52

正確にはわかりませんが創業は180年以上前の江戸時代。今の建物は戦後すぐのものです。



マップQR



旅籠松代屋 妻籠宿

創業:江戸後期 当初の業態:旅籠
長野県木曽郡南木曽町吾妻807

妻籠宿の中程にあり、1804年創業と言われています。当時の面影を残し手直しはされていますが約200年以上前の旅館です。



マップQR



諸人御宿まるや 大妻籠

創業:江戸中期 当初の業態:旅籠
長野県木曽郡南木曽町吾妻1477

1789年(寛政元)に、中山道の妻籠宿と馬籠宿の間宿「大妻籠」に創業。困炉裏を囲いゆったりとお過ごしいただけます。



マップQR



旅籠つたむらや 大妻籠

創業:明治中期 当初の業態:養蚕(ようさん)農家
長野県木曽郡南木曽町吾妻大妻籠1479-1

建物は築150年ほど、当初は養蚕農家をしていました。旅籠になってから50年ほどになりますが、昔と変わらぬ外観を保ちつつ、建物内は過ごしやすいように改装しています。



マップQR

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曽路

第2章
江戸時代以前の
木曽の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曽路11宿

第5章
明治以降の木曽檜活用、
森林鉄道

第6章
木曽の暮らし、風土、
宗教(御獄山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)



33宿場町	にえかわじゆく
中山道 木曾路	贄川宿
	町並み 塩尻市
■基本データ	 マップQR
住所 塩尻市贄川	
アクセス JR「贄川駅」から徒歩約5分	
連絡先 塩尻市教育委員会文化財課 /TEL 0263-52-0904	

贄川宿は奈良井川が山地から松本盆地へ流れ出す手前、木曾路の北の入口にあたり、南北にのびる中山道に面して家並が500メートルほど連なる集落です。

近世初頭に宿駅制度により木曾11宿の北境の宿場に定められた贄川宿は、鳥居峠のふもとに位置する隣の奈良井宿と比べて宿場としての立地は劣るものの、木曾路の北の玄関口となる地の利から物流業に従事する者が多く出て、奈良井宿とは趣を異にする宿場町として発展しました。

数度の大火により当時の家並みの大部分は失われましたが、重要文化財深澤家住宅など、わずかに古い建物が残り、往時の姿をしのぶことができます。

贄川宿の歴史

贄川宿は早くも1533年(天文2)、木曾義在が木曾に宿駅を定めたとき成立したとされます。文献史料によれば、1692年(元禄5)には町の長さ3町14間2尺5寸(約353m)、家数98軒であったとされます。

その後1724年(享保9)には、家数97軒でほとんど同じ、1843年(天保14)には家数124軒、人口545人、宿長4町6間(約447m)と、やや増加を示していますが、宿場の規模は木曾11宿中でも小さい方です。

宿内は三つの町に分かれ、北から下町・中町・上町とつづきます。名前のとおり下町から上町にかけて若干の上り道となっていますが、これは奈良井川の流れに対応して上流を上町と名付けたものです。宿の北の入口、下町から北に小道を下ったところに1976年(昭和51)に復元された贄川関所が建っています。

近世の関所は、現在の場所と小道をへだてた反対側に位置し、木材など統制物資の取締りにあたる口留番所くちどめばんしょでした。三町の境は広小路として街道と直交する路地を設け、また山手側の西側には、厄除・火除の神である津島・秋葉社と水汲場が置かれました。下町と中町の境は

西に行くと観音寺や麻衣廻神社に通じ、この周辺にかつて本陣や脇本陣、年寄役の屋敷が並び、宿の中樞をなしていました。

現在も間口の広い町割を残し、公民館や郵便局が置かれ、宿内の中心部を形成しています。現在の家並は、近世の宿場町の町割を残しながらも近代に至って大きく様変わりしており、塩尻など近隣の都市への勤め人が多く住む閑静な住宅地となっています。

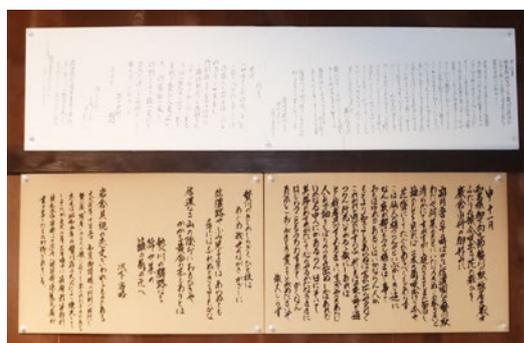
宿場の産業

宿場住民の主な生計は山畑耕作と旅籠屋稼ぎが中心であったとされ、規模の小さい宿場の割には旅籠の数が多く、宿場の家々のおよそ1/3が旅籠を営んでいた時期もありました。

農閑期には奈良井で生産された檜物細工や塗物を背負って西国へ行商し、古着を仕入れて戻り、販売するといった商売が行われていました。

岩倉具視の恋文

1861年(文久元)、仁孝天皇の第八皇女の和宮が14代将軍徳川家茂に御降嫁されたとき、京より木曾路を通られて江戸に入ったが、その際に同行した岩倉具視は、贄川宿の綿屋・九蔵方の宿に昼頃休まれた。その家には2人の娘がおり、岩倉は一目惚れし、後日恋文をしたため娘に届けたといわれています。



※恋文の資料(後年書き写されたもののコピー)は贄川関所でご覧いただけます。

火災の被害

贄川宿は、近世はもとより近代に入っても数度の大火に見舞われています。その理由は建物自体が燃えやすい造りであったことと、宿全体が河岸段丘上の高台にあり、大量の水を確保しにくかったことの2点が挙げられます。

記録に残る近世の大火は、1782年(天明2)10月と1851年(嘉永4)12月の2回で、ともに宿内のほぼ全家を焼き尽くす大火災でした。近代にも、1896年(明治29)3月、1918年(大正7)6月、1930年(昭和5)7月と3回の大火がたてつづけにあり、中町・下町を中心に甚大な被害をもたらしましたが、三度とも上町の家々は類焼をまぬがれました。そのことを裏付けるように、現在の贄川宿では、上町近辺の一部を除き、近世まで遡り得る町家はみられません。

贄川の地名

「贄川」という地名の由来について、『木曾路名所図会』は、「いにしえここに温泉あり。故にニエ(執の下に火)川と名づく」としていますが、現在その形跡はありません。

平田篤胤門 国学の里

島崎藤村は、木曾を舞台に歴史小説「夜明け前」を書いています。藤村は、父島崎正樹をモデルにした青山半蔵を主人公に、維新前後の渦中を懸命に生きた木曾の人々を描いています。島崎正樹も小説の青山半蔵も平田国学の門下でした。

木曾における平田国学の先駆をなしたのは、この島崎正樹と贄川宿の小澤文太郎重喬です。小澤文太郎は、贄川宿で俵屋という屋号を持つ木曾路屈指の豪商でした。贄川宿には平田国学の入門者が多く、22名に達しています。

そのうち、小澤の紹介による入門者は18名と多く、そのほか、小澤の推薦によって、本山、日出塩にも入門者が輩出しましたが、馬籠宿では島崎正樹以外に入門者はいませんでした。



観光・見所

1 重要文化財深澤家住宅

深澤家は、贛川宿で近世中期から行商を生業とする商家で、屋号を「加納屋」と称し、京・大坂などから北陸・東北地方への遠隔地商売を展開しました。

1854年(嘉永7)建築の主屋は規模が大きく、2階格子窓を二重の出梁(だしばり)で大きく持ち出すなどの独特の正面外観をもち、内部に重厚な室内を構成するなど、当時の町家建築の到達点として評価されています。

2 贛川関所(贛川口留番所) にえかわぐちどめばんしょ

贛川関所は宿の北の端の入口に設けられています。この関所は「軽き御関所」ともいわれ、福島関所の「添え」としての付属の関所でした。

関所の機能の一つに「女改め」があります。土地の婦女が縁組や寺社仏閣参り、奉公等のため通過するときは、領主などの証文や名主の手形を必要としました。そのほか、貴重な木曾檜を使った曲物や漆器、木材の不正な移出などを取り締まる「白木改め」が行われていました。

1976年(昭和51)に復元。文書資料などを展示した資料館となっています。

営業時間:4~11月は9:00~17:00、

12~3月は9:00~16:00

最終入館時間は閉館30分前

入館料:大人300円 中学生以下無料

定休日:月曜日、祝日の翌日、年末年始(12/29~1/3)

このほか冬期休館あり

連絡先:0264-34-3002



3 観音寺

贛川宿の西町裏にあり、真言宗智積院末で、本尊の十一面観世音は室町時代の作です。

806年(大同7)創立と言われ、本堂は1775年(安永4)に再建されました。山門は1792年(寛政4)に再建された楼門で、市有形文化財に指定されています。



あさぎぬの

4 麻衣廻神社

「麻衣」は木曾の枕詞です。賀川の西町裏、観音寺の裏にあり、建御名方命(たけみなかたのみこと)を祭神とします。938年～947年(天慶年間)に諏訪坂の東に鎮座しましたが、1573年～1592年(天正年間)に武田氏と木曾氏の戦いで焼失したため、文禄年間に現在地に再建されました。

木曾では建御名方命を祀る最古の神社といわれています。本殿は市有形文化財、社叢(しゃそう)は市天然記念物に指定されています。7年目ごとに御柱祭が行われますが、御柱の並び方が諏訪神社のそれとは異なり、本殿に並行するように一列に立ち並びます。



5 賀川のトチノキ

トチノキの大木としては県下第一と言われ、長野県天然記念物に指定されています。樹齢は600年以上と推定され、幹回りは約8.6メートル(胸高周囲で9.8メートル)、樹高は32メートルに達し、枝張りは約900平方メートルあります。

6 メロディー橋

国道19号から分かれて賀川関所や賀川宿へ行く、JR中央本線の跨線橋で、明治期の鉄道敷設当時のままのレンガ造りのアーチ橋が残っています。かつての国道は、この橋を渡って賀川宿の町並みに入っていました。現在は歩道となっており、隣に並行して車道が通っています。この歩道の欄干には、鉄琴仕様の木曾節のメロディーを奏する設備が設置されていることからこの名が付いています。

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)



構成文化財①

しおじりし ならい

塩尻市奈良井

34宿場町

ならいじゆく

中山道
木曾路

奈良井宿

建物・町並み・重伝建(宿場町)

塩尻市

■基本データ

- 住所 塩尻市奈良井
- アクセス JR「奈良井駅」から徒歩すぐ
- 連絡先 塩尻市観光協会 奈良井宿観光案内所
/TEL 0264-34-3160
塩尻市教育委員会文化財課 /TEL 0263-52-0904
- 指定 国重要伝統的建造物群保存地区(1978年)



マップQR

中山道の34番目の宿場町で、奈良井川上流に位置します。江戸時代末期の町並みが約1kmにわたって続いており、1978年(昭和53)全国で10番目の重要伝統的建造物群保存地区に選ばれました。旅籠や問屋、千本格子の家々などが並ぶ街道散策が江戸の往時をしのばせると人気です。

歴史的背景

中山道一の難所といわれた鳥居峠の登り口にある鎮神社から奈良井川に沿って880mほど続く、木曾で最も規模の大きい宿場でした。かつて本陣1、脇本陣1、旅籠5、家数409を擁

していた奈良井宿は「奈良井千軒」と謳われたほどで、中山道でも1、2位を争うほど栄えたといわれます。

『壬戌紀行』(大田南畝)では1802年(享和2)当時の奈良井宿が次のように描写されています。「奈良井の駅舎を見渡せば、梅、桜、ひかん桜、はた李の花、枝をまじへて春のなかばの心地せらる。駅亭に小道具をひさぐもの多し。膳椀、弁当箱、盃、曲物など皆此辺の細工なり。されど、たくみあらくして会津細工のもののごとし。駅舎もまた賑わへり」

交通の要所でもあり、木曾漆器、特に曲物と塗櫛の主産地でした。

宿場町のつくり

町並みの背後の山裾に「奈良井五カ寺」といわれる5つの寺院が配され、街道に沿って南側から上町、中町、下町に分かれています。

上町と中町の境には「鍵の手」と呼ばれるクランク形状の道路があり、中町と下町の境は横水という沢で区切られています。下町には柵型という柵のように四方形に石垣や土塁を築いた場所が設けられています。「鍵の手」は下町の柵型と同様に、宿場内に道の屈曲を作り、敵の直進と見通しを防ぐという宿場町を守るための施設として機能していました。

建物の特徴

奈良井宿の建物には、2階を少しせり出した出梁造り^{だしばり}、入口の大戸、日常の出入りに使うくぐり戸、入口の横の蔀戸^{しとみ}、真黒くすすけた2階の手すり格子、その両脇につけられた白漆喰の袖うだつ、各部にさりげなくそえられた彫物などが残されています。

蔀戸とは、入口の横にあり、両脇に立てられた通柱に戸を通す溝が掘られていて、戸を横にして上から入れる構造になっています。上二枚が障子戸、下一枚が板戸になっている場合、昼間は戸を入れず開け放しにして店先にしたり、障子戸を入れて明るくなるようにします。また、夜は防犯のため、板戸に替えて使用します。使用しない戸は天井に跳ね上げるなどの格納の工夫もあります。

長く突き出た軒の小屋根には、庇をおさえた猿頭^{ひさし}と呼ばれる棧木^{さるがしら}が見られます。猿頭とは、上端が山形に切られ、断面が五角形の材で小屋根をつけた二階の出し梁を支える役割があり、波型の形が猿の頭に似ているため名がつけました。

ほかに鎧庇^{よろいびさし}と呼ばれるものがあります。通常庇は棧の上に屋根板を並べて釘を打ちますが、奈良井の場合は棧を上にし、その下に屋根板を敷く独特の構造で作られています。棧には猿頭を使用し、吊り金具で釣られています。屋根板は上に重ねて敷かれ、鎧のような形になることから、鎧庇と呼ばれます。庇は吊り金具で釣られているが、逆さ釘で、強度はあまりありません。これは盗人防止の構造だと言われています（盗人が庇に足をかけたら崩れ落ちる）。

奈良井宿保存活動

奈良井は近代以降、大火がなかったことから、江戸末期の様式を残した町家が残っていました。旧中村家住宅（中村邸）の宿場外移築問題が起きたことを機に、地域住民の町並みに対する関心が高まり、1968年（昭和43）、官民学連携による町並み保存運動が始まりました。かかわった多くの人々の熱意と宿場町の特色が国に認められ、1978年（昭和53）に重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けました。

その後も保存運動は継続され、1989年（平成元）に国土交通大臣表彰の「手づくり郷土賞」、同2005年（平成17）「手づくり郷土大賞」、2007年（平成19）「美しい日本の歴史的風土百選」、2009年（平成21）、（社）日本観光協会「花の観光地づくり大賞」などを受賞しています。



旧中村家住宅（中村邸）



観光・見所

① 上問屋資料館(手塚家住宅)

宿駅に定められた宿場では、官用荷物の輸送や公人旅行者のために、幕府により一定数の人馬の常備が義務付けられ、木曾では一宿につき25人の歩行役と25頭の伝馬(てんま)を用意していました。その運営を行っていたのが問屋(といや)です。

奈良井宿には上・下2軒の問屋が置かれていましたが、上問屋は手塚家が1602年(慶長7)から明治維新までのおよそ270年間継続して問屋を務め、時には庄屋を兼務することもありました。

建物は古文書・陶器・漆器などが展示された資料館として公開されており、2007年(平成19)に国重要文化財に指定されています。

※開館時間・入館料等については、TEL.0264-34-3101までお問い合わせください。



② 越後屋

奈良井を代表する旅籠。十返舎一九の『続膝栗毛』では、米の飯でなく蕎麦にすれば安くすると誘われた弥次さん喜多さんが1泊2食116文(米飯なら150文)で泊まったと記されています。現在も旅籠「糸ちごや旅館」として営業しています。

④ 水場

奈良井宿の中には現在6箇所の水場があります。単に水を飲んだり、洗い物をするだけでなく、利用者の憩いの場や情報交換の場にもなっていました。また、建物が密集している宿場では、水場は火災の延焼防止にもなっていました。



③ 脇本陣徳利(とくり)屋(原家住宅)

1937~1940年(昭和12~15)頃まで旅館として営業し、泉鏡花(小説家)が「眉かくしの霊」を執筆した場所として有名。明治時代には幸田露伴(小説家)、島崎藤村や正岡子規(俳人・歌人)、岡本綺堂(劇作家・小説家)も宿泊しました。「夜明け前」の取材をしていた藤村が囲炉裏端に座る写真が残っています。現在は郷土館として調度品や文書が展示されるほか、食事処や茶房として営業。正面の部戸が特徴的。市指定有形文化財。

⑤ 鎮(しずめ)神社

1618年(元和4)に奈良井で「すくみ」という病が流行り、多くの犠牲が出たので、下総(しもふさ)(現在の千葉県・茨城県・東京都の一部)香取神社より経津主命(ふつぬしのみこと)を祭神として迎えました。それにより病が治ったため、鎮大明神と呼び、村人の産土神(うぶすながみ)として祀ることになったと言われています。

毎年8月11・12日には氏子総出で盛大な祭りがおこなわれます。本殿・社叢・祭礼は市文化財に指定されています。



6 奈良井五カ寺

うなり石のある専念寺(真宗)、関ヶ原の闘いの折に徳川秀忠が陣屋にしたと伝わる法然寺(浄土宗)、お茶壺道中の本陣を勤めたこともある長泉寺(曹洞宗)、マリア地蔵のある大宝寺(臨済宗)、浄龍寺(真宗)と5つの寺があり、宿の繁栄がうかがわれます。



法然寺(浄土宗)



大宝寺(臨済宗)



専念寺(真宗)

● 専念寺のうなり石

「入口にある大きな石が夜になるとうなり出したため、釘を打ちつけたが止まらなかった。そこで酒をかけてやったら、うならなくなった」という伝説があります。今でも打ちつけた釘が残っています。



長泉寺(曹洞宗)



浄龍寺(真宗)

日本遺産木曾路 構成文化財

④旧中村家住宅……………3章-40P参照

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御獄山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)



8 木曾の大橋

奈良井宿の裏手、奈良井川にかかる総ヒノキ造りの大橋。1991年(平成3)3月竣工。橋の構造は木造単径間アーチ歩道橋といい、長さ33m、総幅6.5m、橋脚のない橋としては日本有数の大きさを誇ります。橋を渡ると、「水辺のふるさとふれあい広場」として整備された公園があります。4～11月上旬まで、日没後にライトアップされ、幻想的な姿を見せます。



9 檜川歴史民俗資料館

鳥居峠の登山口にある資料館。明治、大正、昭和期の木曾谷に暮らした人々の生活を偲ぶ数々の品物や生活道具が展示されています。

※開館時間・入館料等については、TEL 0264-34-2654までお問い合わせください。

7 奈良井城跡

大宝寺の裏山にある小高い丘は、かつて奈良井義高が木曾義在の代(1532～1555年)に守った奈良井城の跡です。築城の時期は定かではありませんが、その規模は東西35間(約63.6m)、南北52間(約94.5m)といわれ、空濠の跡もかすかに残っています。

城主義高は1545年(天文14)、木曾義康が小笠原長時と同盟して、武田信玄と塩尻峠で戦った際、その先鋒となって勇名を馳せました。また、1554年(天文23)、武田氏木曾来襲のときには贄川砦を死守しますが、翌年、武田氏再攻に敗れ、福島に退きました。しかし、木曾、武田の和議があり、再び奈良井城の城将として守ることになりました。

その後、1582年(天正10)の鳥居峠の合戦でも大功をたてましたが、家康に従っていた義昌が秀吉に寝返ったことに苦言を呈したことで殺されてしまったといわれます。その墓が、裏山の中腹にあります。

●外国人観光客対応

近年の外国人観光客の増加に対応するため、奈良井宿では観光スポットや案内板などの多言語表記化、店や旅館の従業員のための英会話講座などに取り組んでいます。

●重伝建周遊バス

塩尻市奈良井と木曾平沢2つの隣接する重要伝統的建造物群保存地区を結ぶシャトルバスが運行しています。お気軽にご利用下さい。

・運行区間：奈良井宿(権兵衛駐車場)～木曾平沢(暮らしの工芸館)間

・料金：無料

※運行期間、運行時間については、奈良井宿観光案内所 / TEL 0264-34-3160 にお問い合わせください。

●観光ガイドによる案内

奈良井宿の象徴的な建物である中村邸、上問屋資料館、えちごや旅館 本陣跡などを地元ガイドによって案内しています。要予約。

※料金はガイド1名(20名まで対応)につき1,500円(約1時間)奈良井宿観光協会HPの申込フォームから申し込むか、申込書をダウンロードして必要事項を記入してFAXでお申し込下さい。希望日の3ヶ月～1ヶ月前まで。

■主要参考文献

『檜物と宿でくらす人々 木曾・檜川村誌 第3巻 近世編』(木曾郡檜川村 1998)

『学習ガイド しおじり学びの道』(塩尻市 2007)

『加納屋深澤家住宅調査報告書』(檜川村町並み文化整備課 2004)



35宿場町

やぶはらじゆく

藪原宿

町並み 木祖村

■基本データ

住所 木曾郡木祖村大字藪原

アクセス JR「藪原駅」から徒歩すぐ

連絡先 (一社)木祖村観光協会
/TEL 0264-36-2543



マップQR

鳥居峠を挟んで奈良井宿の反対側にある宿場町。峠越えの前に、または峠越えの後に休む旅人らでにぎわいました。火災のため、その面影はほとんど見られませんが、旅籠米屋、雪舟や応挙の書画を蔵する極楽寺などがあります。

江戸時代に大流行した木櫛「お六櫛」の主産地であり、最盛期には住民の六割が従事していたと言われています。現在も村の特産品として制作・販売されています。

境峠・野麦峠から高山へ抜ける飛騨街道奈川道の分岐点でもあり、岡谷・諏訪の製糸工場に向かう工女らも休息した場所でもありました。

藪原宿の歴史

幕府の交通上の手段とされ、本陣や脇本陣が置かれ問屋場などの施設や一里塚、高札場が作られ、今もその跡地が残っています。

藪原宿は中山道の宿場町として発達すると共に奈川から飛騨へ抜ける飛騨街道奈川道との追分としても発達しました。

藪原宿は江戸から35番目、京都からも35番目というど真ん中の宿場です。1730年(享保15)2月から1871年(明治4)まで幕府の鷹匠たかじょう役所が置かれていました。

1695年(元禄8)の大火により、各屋敷から1間につき1寸の土地を提供して広小路を作り、火災の延焼を防ぐためそこに「防火高塀」を設置し水路を流しました。今なお防火塀が残っています。

1861年(文久元)に総勢約3万人、馬2千匹による皇女和宮行列が通行されました。木曾街道での和宮は、1日目は三留野宿に、2日目は上松宿、3日目は藪原宿で泊まったとされており、宿一帯がてんてこ舞いの忙しさだったと伝わっています。

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)



観光・見所

① 木祖村郷土館(きそむらきょうどかん)

「お六櫛」をはじめ、300年の伝統をもつ勇壮華麗な「荻原祭」、薬草の産地でもあった村の人々の暮らしぶりを伝える資料が展示されています。

お六櫛のコーナーでは、当時の櫛職人の仕事場が再現されており、事前に連絡をすれば職人の実演が見学できる場合もあります。透き櫛・とかし櫛の製造工程から道具、その他櫛に関する文献史料、20分ほどの制作工程の映像などを見ることができます。

● 中山道鳥居峠越えコース

(一社)木祖村観光協会では、荻原宿～鳥居峠～奈良井宿間を有料ガイドの派遣をおこなっています。

荻原駅～本陣跡～御鷹匠役所跡～消防署横～石畳分岐～丸山公園～御嶽神社(御嶽選拝所)～峠の茶屋～中の茶屋～鎮神社～奈良井駅

所要時間:約3時間(峠越えのみ)

*荻原宿・奈良井宿の散策、鳥居峠での昼食などのオプションを含むと約4時間

料金:5,500円(1名～5名)、8,500円(6名～15名)

連絡先:(一社)木祖村観光協会/TEL 0264-36-2543



● お六櫛の製作体験

予約制でお六櫛が製作できる。専用の道具を使いながら、細かい作業を体験します。

料金と所要時間:手引き4,000円/人、約4時間程度

みがき2,500円/人約1時間30分程度

受け入れ可能人数:3名～15名

会場:村民センター等(公共施設)

連絡先:(一社)木祖村観光協会

/TEL 0264-36-2543 ※予約は3名以上から

日本遺産木曽路 構成文化財

- ⑦ 木祖村史跡 鳥居峠 ……2章-28P参照
- ⑧ 鳥居峠のトチノキ群 ……2章-29P参照
- ⑨ お六櫛の技法 ……3章-45P参照
- ⑩ 水木沢天然林(水木沢郷土の森) 3章-33P参照

■主要参考文献/『木祖村誌 源流の里歴史(上)』(木曾郡木祖村誌編纂委員会 2001)
『木曾～歴史と民俗を訪ねて』(木曾教育会郷土館部編著 信教出版部 2010)
『木曾の鳥居峠』(木曾郡木祖村教育委員会 1974)
『木曾のお六櫛』(木曾郡木祖村教育委員会 1975)



みやのこしじゆく

36宿場町

**中山道
木曾路**

宮ノ越宿

町並み
木曾町



マップQR

■基本データ

住所 木曾郡木曾町日義

アクセス JR「宮ノ越駅」から徒歩すぐ

連絡先 木曾おんたけ観光局
/TEL0264-25-6000

宮ノ越宿が設けられたのは、1601(慶長6年)ころと考えられ、中山道の成立とともに江戸幕府によって設けられた宿です。

江戸時代後期の記録によると、宮ノ越宿は1842年(天保14)には宿内の家数137戸、人口585人、本陣1軒・脇本陣1軒、問屋2軒、旅籠屋21軒という規模でした。

1740年(源文5)の記録によると、この年大名の通行宿泊は上り32回、下り19回、計51回あったとのこと。

宮ノ越宿の歴史

1601年(慶長6)10月24日に京都伏見を発ち、出羽米沢に11月19日に到着するまでの26日間を記録した、『前田慶次道中日記』の中に「ふくしまも過ぎ宮のこしに留、やこ原、よし田、とりみ峠を下ればならぬの町」と書いてあるところから、宮ノ越宿がすでに宿駅として

の役目を果たしていたことがわかります。

しかし、贅川・奈良井・屋小原(藪原)・福島は、1568年(永禄11)には宿駅として成立していたことが武田氏伝場口銭掟書でわかることから、宮ノ越宿は中山道成立とともに江戸幕府によって新しく設けられた宿であるといえます。

宮ノ越宿の位置・街並み

宮ノ越宿は、北の藪原宿へ1里33町(7.5km)、南の福島宿へ1里28町(7km)の距離にあります。また、江戸から66里35町、京都から66里22町の距離にあるので、中山道のほぼ中間に位置する宿場ということになります。宿内町並は、南北4町34間(498m)となっていて、贅川宿よりやや長い程度です。

中山道は藪原宿から吉田を通り、山吹山の山麓を巻いて巴淵上に出て德音寺集落に入り、引塚のところの往還橋で木曾川を渡り、宿は上町・中町・下町と通って、高札場の坂を上って原野へ出るような道筋となりました。宿には松並木があり街道中央を用水が流れていました。

1701年(元禄14)からは、木曾十一宿の中で、贅川・奈良井・藪原とともに「上四宿」と呼

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

ばれ、合宿的な色あいを持って人馬調達を行うようになっていました。ちなみに福島・上松・須原が「中三宿」、野尻・三留野・妻籠・馬籠が「下四宿」と呼ばれました。

また、宮ノ越宿は1688年(元禄元)より、権平峠開削によって、伊那へ抜ける権兵衛街道の分岐点になりました。(日義村誌 歴史編上巻)

現代の宮ノ越宿の町並み

宮ノ越宿は街道に沿って北から南へ延びています。宿場の道巾は広く、東寄りに宿場用水が引かれていて水が勢いよく流れています。宿場の裏側には水田が広がり、木曽谷としては珍しく空がひらけている地形です。

旭町・上町・本町・中町・下町とつづき本町には本陣の遺構の一部が江戸時代のままの姿で残っており、問屋も隣接しています。木曽川を隔てて木曽八景の一つに数えられている「德音寺の晩鐘」で有名な德音寺があります。

町並みは建て替えられた家が多く格子戸の家はめっきり減ってしまいましたが、家々は屋号で呼ばれ現在も使われています。

旅籠屋も2軒残っているが現在営業はしていません。

1955年(昭和30)までは町用水に沿って松並木が残っていましたが、道路拡幅のため伐られました。(「朝日将軍木曾義仲」)



0 宮越本陣

本陣は公家・勅使・門跡・大名・宮・旗本・御茶壺道中・日光例幣使等、宿泊・休息の施設で一般者の宿泊は許されません。脇本陣は本陣では宿泊が出来ない場合の補助施設です。

問屋は荷物の継ぎ立て、人足、馬を用意します。宮ノ越宿では本陣と脇本陣が半月交代で務めました。

本陣は特別な人が宿泊するので、本陣の居住者の生活空間とは区別しました。建物の中に居住者(主人家族)と問屋業務の部屋をB居室部。大名等公の人達が宿泊するA客室部(御殿・客殿)とは明確に区別しました。

客室部に入るには街道に接して御門を、広い庭に入って玄関・式台・幾つもの畳部屋・料理の部屋・厠・風呂・庭等があり、特に部屋には大名が休む上段の間が必ずあります。

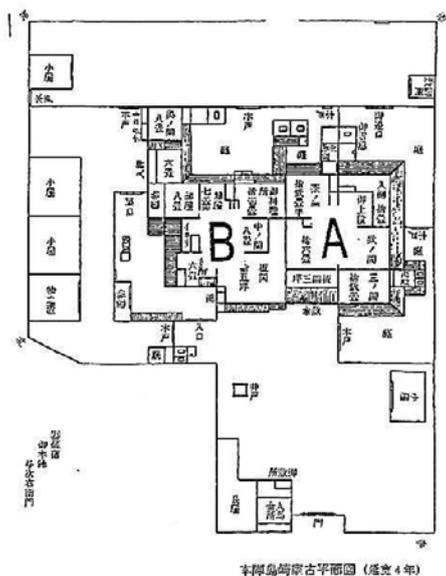
B居室部とA客室部とを並列する(例:妻籠宿)、前後を少しずらす(例:藪原宿)、別棟にする等があり、宮越本陣は別棟で前後に空間を置いて設置する非常に珍しい本陣です。

●一里塚

東海道や中山道の整備とともに、1里を36町(約3.9km)と定めて、里毎に一里塚を築かせました。塚に木を植えるにあたって、命令を受けた者が何の木を植えたらよいか伺ったところ、「並木が松だから、余の木を植えよ」といったのを「えの木」と聞きまちがえて、多くの一里塚は榎が植えられるように

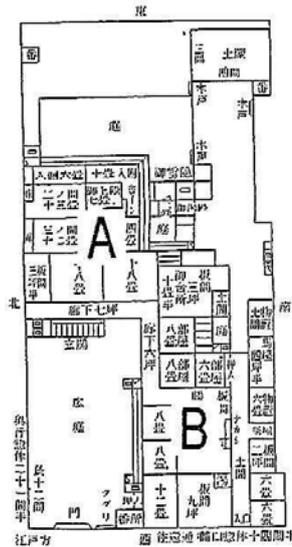
なったという話が残っています。

木曾では榎もありましたが、松も多かったようです。木曾は自然の樹木が街道筋まで茂っていたので、特に並木を造成することもなかったようで、一里塚の樹下だけでなく、いたるところに旅行者の休憩所となるところがありました。



妻籠宿

〔主客棟併列後退閉鎖型〕



萩原宿

〔主客棟後退型〕

2 萩原宿本陣屋敷図
(木曽村郷土館所蔵)

●宮越宿本陣の特殊性

宮ノ越宿は何度も大火に会い本陣も焼失しました。火災後に先ず取り掛からねばならないのが本陣でした。公の人達の宿泊・休息に遅滞があつてはならないために、離れて別棟にすれば客室部の類焼は免れる可能性がありました。この火災と再建工事で大工が必要になり、何度も火災での経験で大工の技術も高まり、大工職人も多くなり宮ノ越大工と知られるようになりました。

●なぜ宮越本陣が今日にのこったか？

木曾十一宿の中で本陣建物が残っているのは宮ノ越宿のみであり、全国的にも多くの本陣は無くなっています。幕末の大名を苦しめ、参勤交代にかかる経費も切り詰めざるをえませんでした。

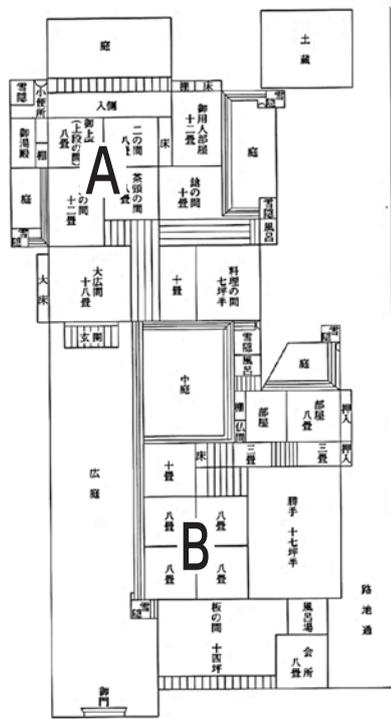
大名等の交通が中山道は少なく、気持ちの祝儀が本陣の収入であり、大きい建物の維持管理が経済的に大きな負担でした。宮越本陣でみると客室部の材を落したり、規模を縮小しています。

明治政府になると参勤交代は無くなり、1870年(明治3)の宿駅制の廃止で伝馬も扱わなくなり、収入が途絶したため、宿では最大の建物である本陣を維持できなくなりました。そのため多くの本陣は無くなりました。

宮越本陣は1865年(元治2)の上町大火(80戸余)では焼失しなかったと思われます。

1880年(明治13)の明治天皇木曾巡幸の時、宮越本陣で休息しています。この時には本陣建物はしっかり残っていて対応できました。

1883年(明治16)の大火で本陣居住部が焼失しましたが、客室部は火災を免れて、本陣の家族がここに居住するようになったので、客室部が今日まで残りました。居住するようになって客殿としての施設～御門・玄関・式台・広間・台所・廁・風呂場は壊して、主要な間である上段の間・二の間・三の間は、そのまま残し、その南の部屋を台所兼板の間・家族の部屋に直しました。



宮ノ越宿

- 宮越本陣の重要性
 - ・木曾十一宿の中で唯一の本陣建物～特に客室部(客殿)遺構である。
 - ・客室部は明治天皇が休息された部屋である。
 - ・上段の間には床の間・違い棚・書院が残っている。

■主要参考文献／「朝日将軍 木曾義仲」日義村義仲館・編
 「長野県の歴史シリーズ19」図説・木曾の歴史 生駒勘七・神村透・小松芳郎著
 「日義村誌 歴史編上巻 民族編」



②「田中邸」

中山道宮ノ越宿の田中家は、宿絵図に旅籠屋田中忠右衛門と記された旅籠でしたが、1883年(明治16)の上町から下町まで九十戸を焼失する大火で焼失しました。

現在の建物は、大火時に搬出された建具類と、隣村から選んだ建物部材を使用して再建されたものと伝えられており、背の高い差鴨居を多用しているため、移築した建物の建築年代は幕末後と考えられています。また、入口周りの痕跡からみると、間口4間ほどの建物の供部分を狭くし、間口を縮めて移築したものと考えられます。現在の間口は3間4尺あるので、宿絵図に記された3間より広く、大火により町割りの再編がされたことがうかがえます。建物は大きな改築をすることなく住宅として使用されてきましたが、1997年(平成9)に旧日義村へ寄贈されました。

田中家主屋は、間口3間4尺、奥行き8間の2階建てで、2階を3尺張り出した出梁造りの建物であり、1階の格子と2階の障子戸の対比が美しい伝統的な宿場の建築様式を伝えています。間取りは、大戸の入口を入ると通り土間があり、片側1列に10畳、勝手(6坪余)、10畳があります。2階



には勝手にある箱階段から上がり、勝手の囲炉裏部分は吹き抜けとして、他は表から裏まで間仕切りのない1室になっていました。

2014年(平成26)の修復復元工事にあたり、古い部材の再使用など可能な限り建築当時の姿を保つよう配慮しながら、奥の縁側に階段を新設したほか、入口の10畳は土間へ改装、2階間仕切りなど構造補強の壁を追加するなど、交流の場としての活用を目的とした改装を行いました。

入口の持ち送りは、波しぶきの彫りもしっかりとされていて、宮ノ越大工の腕の確かさを証明しています。

日本遺産木曾路 構成文化財

⑩らっぽしよ祭り……………2章-20P参照

義仲館・徳音寺・南宮神社・林昌寺・旗拳八幡宮・巴淵

岩華観音・興禅寺

2章木曾義仲-18P参照



上ノ段の街並み

37宿場町	ふくしまじゆく
中山道 木曾路	福島宿
	町並み 木曾町
<p>■基本データ</p> <p>住所 木曾郡木曾町福島</p> <p>アクセス JR「木曾福島駅」から徒歩5分</p> <p>連絡先 木曾おんたけ観光局 ／TEL 0264-25-6000</p>	
	 マップQR

江戸時代後期の記録によると、福島宿は家数158戸、人口972人、本陣1軒・脇本陣1軒、問屋2軒、旅籠屋14軒という規模でした。

本陣があった場所には、現在木曾町文化交流センターが建っています。上町一帯は1927年(昭和2)の大火で焼失してしまい、江戸時代の建物は残されていませんが、本町には造り酒屋や昭和初期の町並みが続いています。

火災から免れた上ノ段地区にはかつて茶屋や商家があったといい、出梁造り・袖うだつ・千本格子など木曾地方の建築様式を伝える古い建物が残っています。一部は飲食店に改築されて人気を呼んでいます。用水や枳形、高札場跡などもあり、宿場町の面影をとどめた一画です。

「みこしまくり」の伝説

昔、飛騨国の一宮水無神社近くで戦乱が起こり、木曾から出稼ぎに来ていた信心深い宗助と幸助の兄弟は、神社が焼け落ちることを避けようと、神社の御分身を神輿に移し、木曾谷に運び出そうとしました。

ふたりは国境の峠で追っ手につかまり、神輿の奪い合いとなりました。多勢に無勢で神輿を落としてしまったふたりは、神輿をころがしてでも持ち帰ろうと、「宗助」「幸助」と互いの名前を呼び掛けあって、峠の木曾側へ神輿を転がり落とし、福島伊谷(いや)まで運んだといいます。

福島宿の水無神社で毎年行われる大祭「みこしまくり」はこのエピソードに由来します。転がすことを木曾では「まくる」といい、「みこしまくり」は宗助・幸助が転がしてきた神輿にちなんで名づけられました。

神輿は毎年新しく造っては、転がされて壊されます。担ぎ手の肩から神輿が投げ出される時に、「おみこしゃ、わが身を橋にうちかけてしんとろとろ通せ」と、神唄をうたい終わるやいなや、「宗助」「幸助」の掛け声もろとも神輿は地面に落とされ、またかつぎあげられます。壊れるほど神様はお喜びになるということ、神事は深夜まで及びます。



●木曾の夏を盛り上げる「天下の奇祭」

毎年7月22日・23日に行われる「みこしまくり」は、御輿を落とし、まくって(転がして)最後には壊してしまうという荒々しいお祭り。

開催日時／毎年7月22日・23日

開催場所／木曾福島地区・水無神社

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)



観光・見所

① 木曽漆器発祥の地・八沢

木曽福島にある「八沢」は、中世に木曽氏が小丸山城を築いたときの城下町で、木曽漆器の発祥地といわれています。

木曽氏が漆器職人を呼び寄せて作らせたのが始まりで、その後も木曽代官の山村氏や尾張藩の庇護を受け、漆器の産地として発展しました。飛騨春慶の系統といわれる、曲物に漆を施した春慶塗が多く作られていました。

江戸時代から奈良井、平沢、藪原などとともに木曽漆器の主産地でしたが、やがてその中心は木曽平沢に移りました。町内に往時の面影はありませんが、老舗が残っています。



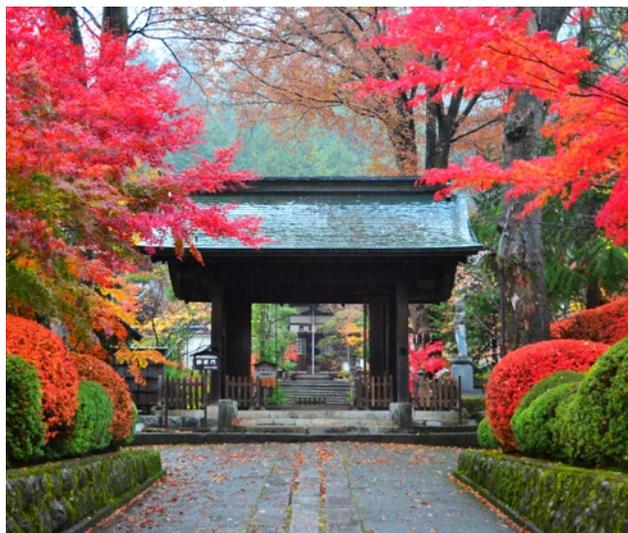
② 崖屋(がけや)造りの家並

わずかな土地を利用して建てられた木曽川沿いの崖屋造りの家並みは河原の親水公園から望むことができ、その木曽川にせり出すように建つ様に圧倒されます。

福島宿の中山道は本町から上の段に登り八沢に出る道でしたが、急な坂道で難所だったため、1906年(明治39)本町から西方寺下の崖を掘削し、新八沢橋を造って迂回しました。1911年(明治44)の鉄道開通に合わせて道路整備が進められ、沿道に木曽川に張り出すように家が造られました。床下の石積みは堤防を兼ね、各戸で造成しました。

日本遺産木曽路 構成文化財

- ⑫山村代官屋敷……………3章-32P参照
- ⑬福島関所……………4章-60P参照
- ⑬高瀬家……………4章-94P参照
- ④①旧帝室林野局木曽支局庁舎 5章-122P参照



興禅寺、紅葉雨の勅使門

③興禅寺(こうぜんじ)

臨済宗妙心寺派、木曾三大名刹のひとつ。1434年(永享6)、木曾義仲公菩提のため、木曾信道が荒廃していた旧寺を改建しました。俱利伽羅峠(くりからとうげ)の戦勝の際には、狼煙台であった火燃山から興禅寺まで松明行列をおこない、墓前で木曾踊りを奉納したと言われていす。以降、木曾家、木曾代官山村家代々の菩提寺です。

境内にある義仲公御影観音堂(みえいかんのんどう)と勅使門(ちやくしもん)は1927年(昭和2)の大火で焼失後、再建されたものです。「昇龍(しょうりゅう)の庭」「須弥山(しゅみせん)の庭」「万松庭(ばんしょうてい)」と呼ばれる池泉鑑賞式の庭、重森三玲(しげもりみれい)作庭で国登録記念物の「看雲庭(かんうんてい)」も有名です。宝物殿には、木曾最古の古文書や山村氏の道具類など木曾の歴史・文化・芸術を網羅する資料が展示されています。



④大通寺(だいつうじ)

大通寺は関ヶ原の合戦の後、木曾代官の山村良勝の内室によって建立され、柱山和尚(ちゅうざんおしょう)を開山としました。鐘楼門は1778年(安永7)に建てられ、木曾町に現存する木造建築物としては最も古いもの一つ(3番目)として、1979年(昭和54)町の有形文化財に指定されています。

境内には木曾義昌に嫁いだ武田信玄の三女・真理姫の供養塔があります。真理姫は義昌の武田家からの離反や、網戸(現千葉県旭市)への国替え、夫の逝去とお家断絶などにより波乱の一生を送りましたが、晩年は木曾へ戻って98歳で亡くなりました。墓は木曾町三岳地区の野口の地にあります。



⑤水無神社(すいむじんじゃ)

木曾氏、山村氏が御嶽神社とともに崇敬したといわれる。高照姫命(たかてるひめのみこと)を御祭神とします。拝殿には江戸時代の絵馬が数多く保存されています。7月22・23日には奇祭として名高い「水無神社例大祭 みこしまくり」が開催されます。

たかせけ

高瀬家

■基本データ

住所 木曾郡木曾町福島4788

アクセス JR「木曾福島駅」から徒歩約25分、
伊那ICから30km40分

連絡先 高瀬家藤村資料館／TEL 0264-22-2802



マップQR



島崎藤村の姉・園^{その}の嫁ぎ先で、小説『家』のモデルとなった旧家。園は「お種」として作品に登場します。

高瀬家は山村氏の家臣として代々関所番を勤め、幕末まで山村家のお側役、砲術指南役、勘定役として仕えてきました。また、奇応丸を製造・販売していた家です。現在は資料館になっています。

島崎藤村は何度も姉・園を訪ねていたため、藤村の写真や愛用品をはじめ、藤村ゆかりの品々や高瀬家に代々伝わる武術や薬にまつわる品々が展示されています。

高瀬家は藤原氏の出で、九州の菊池肥後守則澄が祖先です。菊池家没落後、高瀬と姓を改めました。4代目高瀬四郎兵衛武浄が「大阪冬の陣」の頃に木曾に来て、その子である八右衛門武声が山村家に仕えた初代です。

1898年(明治31)のひと夏を、26歳の藤村は高瀬家で過ごし、詩集『夏草』を完成させています。小説『家』はこのひと夏の始まるころから書き出されており、1898年(明治31)から1910年(明治43)までの奇応丸の製造・販売していた当時の高瀬家がモデルになっています。作中では橋本家として描かれています。

高瀬家藤村資料館

開館期間 通年

開館時間 8:30～17:00

休館日 不定休 ※要問合せ

料金 一般＝大人200円・小中学生100円

障がい者＝大人100円・小中学生50円

10名以上で団体割引あり 大人180円 小中学生90円

奇応丸(きおうがん)

高瀬家7代目兼七郎新助が山村家のお供役として江戸城に上がった際に、控えの間にて奇応丸の製造方法を教わってきたと言われています。当時は生活の苦しい武士も多かったため、薬の製造を始めればその助けになり、ひいてはこの土地の潤いにつながる、と考えたようです。はっきりとした年数はわかりませんが、製造を始めたのは1673～1680(延宝年間)からです。

熊胆(ゆうたん)、高麗人参、沈香(じんこう)、麝香(じゃこう)等の高価な材料を用いた子どもから大人までの万能薬で、夜泣き、ひきつけ、吐き気、風邪気、めまい、胸の痛み等の症状に効果がありました。9代目文左衛門新助の時代になると奇応丸は徳川家の献上品になり、しだいに知れ渡っていきました。馬市にやって来た博労や御岳参りの人たちもよく買っていったそうです。

1943年(昭和18)には戦争の影響を受け、企業整備によって業業が統合されたため、しばらくはその中の一員として奇応丸を作ることになりました。1945年(昭和20)には企業整備が解除になりましたが、戦後の混乱の中では材料も手に入りづらく、また売れなくなっていました。そこに高瀬家の16、17代目が相次いで亡くなったため、1953年(昭和28)辺りで業業は終わりとなりました。



高瀬家と島崎翁助(おうすけ)

1910年(明治43)8月、妻を亡くした藤村は子どもの養育に困り、三男・翁助を高瀬家に預けました。2才からの10年間を高瀬家で育て、小学校卒業を機に藤村は翁助を迎えに来ました。

東京へ帰る前に、正面玄関で撮影した写真が館内に展示されています。



35宿場町	あげまつじゆく
中山道 木曾路	上松宿
	街道・街並み 上松町
<p>■基本データ</p> <p>住所 木曾郡上松町</p> <p>アクセス JR「上松駅」から徒歩3分(240m)</p> <p>連絡先 上松町観光協会／TEL 0264-52-1133 上松町教育委員会／TEL 0264-52-2111</p>	

上松宿は1532～1555年(天文年間)に成立したといわれています。江戸から72里3町24間の位置にあり、町並みは東西に5町31間あまり。

木曾11宿のほぼ中央に位置し、問屋は2軒、旅籠屋は35軒。本陣・脇本陣とも1軒どころかも本町にありました。

上松宿は上町・本町・仲町・下町と町組が4つに区分されていますが、度重なる大火で町のほとんどが焼失し、火事を免れた上町だけに当時をしのばせる船口造りの町屋が連なります。

また明治初期にはこの付近に製糸工場があり、土蔵造りの大きな家はその頃の名残です。江戸方の入り口にかかる十王橋の手前にある高札場の跡には、道祖神をはじめかつてこの場所にあった十王堂に祀られていた石仏の数々が鎮座しています。

上松宿の歴史

1843年(天保14)の記録によると、上松宿の宿内には表通りと並行して裏道が作られ、表の街道から裏道に通じる小路が所々に設けられていました。宿場のほぼ中央に間口の広い本陣や脇本陣があり、その両側に旅籠屋が並んでいました。

宿場の民家には間口の制限があったため、どこの家でも奥行きを深くし、裏へ通じる土間を作りました。家の入口には大戸を作り、頭をかがめて抜けるくぐり戸をつけました。大戸は大きな荷物の出し入れの時には開け、夜分や冬は大戸を締め切りにしてもっぱらくぐり戸を利用しました。

当時の民家の屋根は長板葺石置き屋根ながいたぶきいしおで、切妻平入りの長屋作りきりつまひらい。2階のある家では2階の梁を一尺半(45cm)ほど街道側へ出して手すりや格子を付けた出梁造りにしていました。上町には昔の面影を色濃く残す家も現存しています。



十王沢地籍から取水し上町を抜け木曾川に向かう用水が宿場用水として飲料水や使い水に使用され、非常の場合は防火用水としても利用されていました。上町には今も家並みの前に水場や用水溝が残っています。

町並みの中ほどには防火のための高塀が設けられ、町中に建つ土蔵も防火の役割を果たしました。また、火除け地として空き地を設けて防火線とし、同様の目的で小路の幅を広くした広小路が設けられました。この広小路は現在も地名として残っています。

高札場

法度や御定書などを木の板札に書き人目をひくように高く掲示した高札場は宿場の江戸側入り口(北入口)である十王橋の橋詰山手に据えられていました。



当時、十王橋の橋詰にあった十王堂に祀られていた地蔵尊は1867年(慶応3)5月におきた大

洪水で十王堂とともに一時流失しましたが、その75年後に河川で発見され、現在は対岸の山腹にあった馬頭観音とともに高札場跡に祀られています。



一里塚

江戸時代には本町と中町の間、京から65里、江戸から72里の場所に左右二基の一里塚があり、土を丸く山に盛って作られている形状から右側を「下の山」、左側を「上の山」と呼んでいましたが、現存はしておらず、現在は一里塚があった場所から30mほど下方に一里塚跡の石碑が立っています。

御料林

耕地が乏しく山に囲まれた上松宿において木曾山は共有の財産であり日々の生活に不可欠なものであり、住民たちは周辺の林野を必要に応じて自由に活用してきましたが、1889年(明治22)に旧来の禁林地区をはじめとする木曾の美林のほぼ全てが御料林に認定され、町民たちは山野から締め出されました。

これまで生活のよりどころとなっていた山のほとんどを奪われてしまった住民たちは反発運動を強めました。一方で新たな収入源として養蚕業に活路を見出す者も多くいました。



上松町では1879年(明治12)に4工場だった製糸工場が1883年(明治16)には16工場に急増しました。上町と本町の町境付近にも製糸工場があり、今も残る土蔵造りの大きな家はその名残です。



1 聖岩山 玉林院

上松宿の本町に建つ聖岩山玉林院(臨濟宗妙心寺派)は、木曾家十七代義在の弟にして須原定勝寺の三世である玉林和尚が1579年(天正7)に隠居寺として開山したと伝えられています。

寺の東浦山にある聖岩は玉林が座禅をした岩といわれ、山号はこの岩からとって聖岩山と呼びます。

1893年(明治26)に放火に遭い、本堂・庫裡は全焼したものの、土蔵と山門兼鐘楼は火災を免れました。

現在残っている土蔵は1688~1704年(元禄年間)の建造。山門鐘楼は棟札によれば1766年(明和3)11月に落成。上松町文化財に指定されています。

また、玉林院の庭園には鶴島と亀島があり江戸初期の庭園としての体裁が整っており、小さいながらもよくまとまった庭として有名です。



2 立場茶屋跡(民宿たせや・越前屋)

街道には旅人が訪れる立場茶屋(たてばちや)があります。中山道から寝覚の床へ向かう入口には、十返舎一九の「続膝栗毛」に紹介される旅籠「たせや」と蕎麦茶屋「越前屋」があり、当時の面影を残す建物が現存しています。「たせや」は2021年(令和3)に町文化財に指定されました。

● 上松宿での皇女・和宮の降嫁行列

1861年(文久元)の皇女和宮親子内親王の降嫁の際は、総数3万人の大行列が中山道を通りました。その際、道路の改修、往還に面した家屋の二階の窓を閉ざして板を張りすだれなどを取り外す、朽ちた空き家などを取り壊すなど街道が整備されました。

一行の宿泊場所となった本陣は畳の入れ替えや新設・改修が行われ、本陣その他の修理・改築に629両あまり、工事のために寄せ集めた人足や馬が宿泊するための仮小屋の建造に580両あまり、合計1210両ほど費やしたといわれています。

日本遺産木曽路 構成文化財

- ④寝覚の床……………7章-145P参照
- ⑤木曽の棧……………7章-148P参照
- 小野の滝……………71P参照



水舟(定勝寺下)

39宿場町	すはらじゆく
中山道 木曾路	須原宿
	建物・町並み
	大桑村

■基本データ

- 住所 木曾郡大桑村須原
- アクセス JR「須原駅」から徒歩すぐ
- 連絡先 大桑村観光協会
/TEL 0264-55-4566



マップQR

須原宿が設けられたのは、他の木曾の宿と同じように天文・弘治の頃と考えられています。

1715年(正徳5)の大洪水で、宿場がほとんど流され、1717年(享保2)に以前より一段高い現在の地へ移転しました。

江戸時代後期の記録によると、1842年(天保14)には宿内の家数104戸、人口748人、本陣1軒・脇本陣1軒・問屋2軒、旅籠24軒という規模でした。

須原宿の位置・町並み

上松宿へは3里9町、野尻宿へは1里24町の距離にあります。町の真ん中に用水路を通じ、町裏には「犬道」と称する抜け道を通し、宿の両入口を鍵型に折り曲げ、さらに急坂を伴わせています。さらに宿内中央で往還を「く」の字形に折り曲げ、また適時小路を設けるなど、鉄砲に対する対策がなされています。また宿内往

還端に裏山から豊富な湧水を引いて、宿内7か所に「井戸」とよぶ水場を設け、13軒から14軒単位に井戸組合を作って利用されています。須原は国道改修で町裏にバイパスが通り、最も典型的な宿場の形態を残すという町並みが昔のままの姿で静かなたたずまいをみせています。

この宿の特色として、道幅が広くとられており、非常に明るい感じを受けます。がん木造り風の長い軒を出した格子のはまった町家、道に沿って流れる用水、古風な水場など、幸田露伴の名作『風流物』の舞台となった須原宿の面影を今なお色濃くとどめています。

本陣・脇本陣

須原宿の本陣は宿村大概帳に「木村平左衛門 門構玄関付建坪136坪」とありますが、現在では民家となり、当時の面影は何も残っていません。

脇本陣は西尾氏で庄屋・問屋も兼ねていました。その末孫は今なお酒造業を営んでいます。現在の建物は1887年(明治20)の火災で焼けた後の再建で、昔の面影はとどめていません。幸い土蔵が焼け残ったため多数の宿駅関係の貴重な資料が保存されています。

(歴史の道調査報告書1)

じょうしょうじほんどう・くり・さんもん

定勝寺本堂・庫裏・山門

■基本データ

住所	木曾郡大桑村須原831-1	 <small>マップQR</small>
アクセス	JR「須原駅」から徒歩10分	
営業	8:30~17:00(冬季は16:00頃) (定休日) 無休	
料金	大人300円、子ども100円	
連絡先	定勝寺/TEL0264-55-3031	
指定等	国重要文化財(1952年)	

須原宿にある国指定重要文化財(本堂・庫裏・山門)の定勝寺は、木曾三大寺中の最古刹です。嘉慶年間^{かけい}に木曾家第11代の源親豊公が祖先菩提のため木曾川畔に創建しました。その後、木曾川の洪水により3回流失し、慶長3年に現在の場所に移建されました。

また、定勝寺には戦国時代木曾谷を支配した戦国大名「木曾義昌」の位牌が安置されているほか、東洋一の木曾ひのき製「定勝だるま」大坐像も見ものです。

定勝寺で金永という人物が、そば切りを振舞ったという、日本で一番古い文献があり、木曾谷が蕎麦の特産地であることを示しています。

そばきりの発祥

「そば切り」という言葉が日本で最初に史料で確認できるのが、定勝寺の1574年(天正2)の仏殿事記録にあります。、仏殿と奥縁壁の修理と唐戸を作らせ、この仏殿の作事記録には調達された資材、大工や鍛冶など諸職人の延べ人数と作料、酒や食事代、振る舞いの料理に至るまで詳細に記されており、その中に「そば」に関する記述が見られます。

そばきり発祥の説は他にもありますが、信州そばの歴史を研究している関保男氏によると「この史料は現在のところ信濃ばかりでなく、そば切りに関するわが国最古の史料」とのことです。

(参考資料:浄戒山定勝禅寺発行ブックレット)



本堂

禅宗寺院にみられる方丈形式の本堂で、入母屋造り、平入りの六間どり方丈。方丈とは一丈(約3m)四方の部屋の意で、禅宗寺院の住持や長老の居室をさします。

室内は、仏間のみが板敷でうぐいす張りになっており、他は畳張りで18畳の室中(仏間の前室)、その左右に8畳、12畳の間があります。

正面の両開両折の棧唐戸は狭間や透かし彫りで飾られ、三室を仕切る長押(なげし)上は竹の節欄干、仏間と室中間の長押上には吹き寄菱欄干が使われています。天井は鏡天井に張られ、正面入口のうずまき彫刻のある海老紅梁が見事です。

庫裏(くり)

庫裏は寺の食事を準備する場所(台所)、または住職やその家族の住む場所をいいます。

1654年(承応3)建立。切妻造り妻入りで、禅宗庫裏の定法に従って大きな妻壁を正面に見せます。入口を入ったところは土間と広い板の間で、大きな炉が切っておりあります。東側居間の書院の次の間には定勝時形式と称する珍しい違い棚。御座の間の長押上の壁の千羽鶴の絵は、大修理の際に張り重ねられた壁紙の中から発見されたもので、相当に古いとのこと。

山門

雨落(あまおち)石をめぐらし、自然石の上に柱が立っていて、上部にある木鼻は桃山建築の特徴を表しています。木口が丸くえぐられてくちばしのようにになっているのはシカミと呼ばれ、屋根は切妻造り檜皮葺(ひわだぶき)で、鬼板がつけてあります。1661年(万治4)に建てられました。

*雨落石:軒先から落ちた雨水の跳ね防止を意図して考えられた手法。

*切妻造(きりつまづくり、きりつまつくり):屋根の最頂部の棟から両側にかけて地上部に向かい二つの傾斜面が本を伏せたような山形をした屋根。雨水を二方へ流す形状が切妻造。一方へ流すのは片流れ。四方へ流すのは、寄棟造・宝形造・入母屋造があります。





猫寺の由来●定勝寺

大昔の定勝寺は今の小学校(旧須原小、現須原地区館)の下新国道より川寄りにあった。再度の洪水で現在の地に移ったと聞く。其の頃は、木曾川は川幅も狭く川向へ渡るにも丸太橋位であったらしい。いつ頃の住職であったか解らないが川向に法要があり、帰り道松の根元に一匹の仔猫がうずくまって居るのを見た。

和尚は今しも降り出さんとする夕立雨、かわいそうに、川の水が増水してくれば、命も危いにと衣の袖にかかえて連れ帰り以来寺で飼う事永年。不思議にこの猫は、長生し住職三代に及べり。猫三代飼へば化けると言ふ猫も既に老境に達したが、最近檀家の家畜を荒し、日毎に苦状が寺へ舞い込むが初めは和尚も畜生の事であるから聞き流しにして居たが、増々檀家の怒は、強くなるので思案の結果僧籍に有る身では殺生も出来ず、此の上寺で飼ふ事は許されず、寺より追放する以外にないと考え、方丈へ連行き今迄に無いごちそおを与え、汝猫族よ和尚三代に仕えたが、此頃のいたずらでは、是れ以上当寺に置く事は許されん此の「ごちそお」を腹一杯食べ何処へなりとも行が良いと引導を渡した。全部食べ終えて一声二声ニャーンと意味有りげに、方丈の縁下へ姿を消し以来猫の事は、すっかり忘れ去っていた。

春先のどかな或日和尚が書院で読書の折つい昼寝をし、其時の夢に近い中に尾張藩の殿様が他界する葬儀のさい中に一大異変が起きる。汝和尚よ葬儀の場所へ行き、一段と声高らかに読経せよ和尚の読経無くて異変は治まらん、必ず日時を違えず行けと、念を押し先に寺を、追放され鳴いた時と同じ様に、一声鳴いた。其の声で和尚は夢から覚めた。

数日にして尾張藩の殿様が他界し何日の葬儀と話を聞いた。和尚は数日前書院で見たゆめとぴったり当たるので、さては三代飼った猫が夢枕に立ち余りにも不思議で有ると、早速旅支度を整え尾張を差して出発した。

葬儀場近くなると今迄晴渡った初夏の空は次第に黒雲が現われ今にも大粒な雨が降り出さん空模様、葬儀の真只中天の一角より雷光と共に異様な怪猫が納棺めがけて襲いかからんとした。

人々はあれよあれよと、うろたえる時定勝寺住職はひときわ高い声で読経を唱えるや、たちまち異様な怪物は姿を消し、暗雲も霧散して、元の晴天となり葬儀は終了した。

此の異変の最中に一段と高き読経を致した者は、何処の旅僧であったか後日調べた結果、木曾須原定勝寺和尚と解かり、その功により尾張藩より百石と上の山を賜り故に猫寺と云ふ。

(須原分館発行復刻版「須原」より)

はくさんじんじゃ

白山神社

■基本データ

- 住所 木曾郡大桑村大字殿1755-1
 アクセス JR「大桑駅」から徒歩約30分
 連絡先 大桑村教育委員会 / TEL 0264-55-1020
 指定 国重要文化財(建)(1937年)



マップQR

白山神社を正面に、左に熊野、伊豆、右に蔵王の四社殿が並びいづれも一間社流造いっけんしゃながれづくり松皮葺、見世棚造など鎌倉建築の技法を知ることができます。現存する社殿建築としては長野県最古のものです。

1334年(元弘4)に建立され、社殿は一間社流造で装飾的意匠が加わっていない簡素な造り、見世棚造となっています。

白山本殿のみ総立ちにおいてやや優れ、垂木の数は18本と念が入っています。

郷司小雀部光友ごうじ だいかんじんの大勧進。大工橋宗重むねふだの創建棟札が歴史の始まりを伝えています。

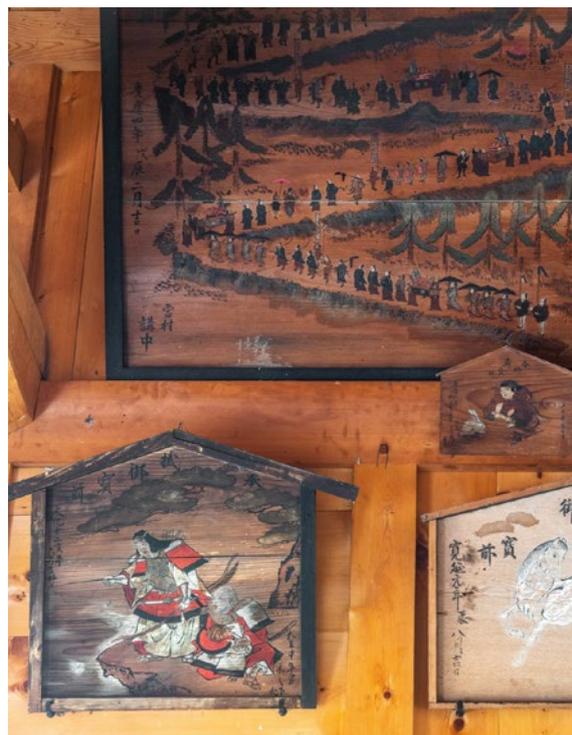
1937年(昭和12)国指定重要文化財に指定されました。



祭神 菊理媛命。こちらの神様は、縁結びの神様とも呼ばれていて「菊理姫尊」(「きくりひめ」とも「くくりひめ」ともよばれています。『日本書紀』の異伝(第十の一書)に一度だけ出てくる神様です。

イザナギノミコトとイザナミノミコトを仲直りさせたとして縁結びの神様とされています。

石階段をのぼって約5分、かわいい狛犬が迎えてくれます。こちらは1878年(明治11)に寄進されたもの。鎌倉末期の社殿、江戸時代から奉納されている絵馬も大型のものがああり、見ごたえがあります。



1 須原宿の水舟

水舟とは、丸太をくり抜いて作った水汲み場のことです。須原宿は江戸時代、本陣、問屋、30軒ほどの旅籠や茶屋が立ち並び、豊富な湧水をひいて宿内の17箇所に水舟が設けられていました。現在も5カ所ほどで水舟が残っています。



2 鹿島神社

須原の鎮守で、宿の入口の道ににあります。小木曾荘の地頭真壁氏によって勧請されたものと考えられています。戦国領主木曾氏の崇敬をうけていたもので関係資料が残っています。

蔵に保存管理の「四神旗 蒼竜・白虎・朱雀・玄武」「乗鞍」「鐙」は村有形文化財。

境内にそびえる大杉は、歌川広重画 木曾海道六十九次「須原夕立の図」の大杉と思われます。樹齢800年、高さ42m、周囲7m余。村指定天然記念物。

(歴史の道調査報告書1より)

歌川広重画 木曾海道六十九次「須原夕立の図」
..... 4章-71P参照



水舟(西尾酒造前)



岩出観音絵馬

3 岩出観音

岩出観音は木曾街道69次版画の英泉画「伊奈川橋遠景」の背景に描かれている堂として有名であり、馬産地木曾の三大馬頭観音として庶民の崇敬を受けています。現在の堂は江戸中期のもので、懸崖宝形造り(けんがいはうぎょうづくり)です。

(歴史の道調査報告書1より)

4 大桑村歴史民俗資料館

この資料館の建物は、村内の檜をはじめ木曾五木を使い、伝統的な小屋組み技法によって建てられています。

館内には、村内で出土した縄文時代から近世までの土器や遺品、近代から現代までの生活用品・民具が展示されています。また、大野遺跡から出土した人面装飾付有孔鏝付土器、愛称“悠久のほほ笑み”は、その顔の大きさが日本一という貴重な土器で2018年(平成30)に長野県宝に指定されています。

人面装飾付有孔鏝付土器「悠久のほほ笑み」
..... 2章-12P参照



40宿場町

のじりじゅく

野尻宿

中山道
木曽路

建物・町並み

大桑村

■基本データ

住所 木曽郡大桑村野尻

アクセス JR「野尻駅」から徒歩すぐ

連絡先 大桑村観光協会
／TEL 0264-55-4566



マップQR

野尻宿が設けられたのは、他の木曽の宿と同じように天文・弘治の頃と考えられる。江戸時代後期の記録によると、1842年(天保14)には宿内の家数108戸、人口986人、本陣1軒・脇本陣1軒・問屋2軒、旅籠19軒という規模でした。

野尻宿は、寛政、文政、明治に相次ぐ大火に見舞われ、大半の家が焼失し、宿場の面影は少なくなっています。

野尻宿の位置・町並み

須原宿へは1里30町23間、三留野宿へは2里18町の距離にあります。宿を火災から守り、人馬の使用に供するために、上町から中町を通り、竹の沢へ合流する用水が引かれていました。

野尻宿は七曲りと言われるように、外敵を防ぐためにところどころ大きく曲げてあります。

この宿は、江戸方・京方それぞれ宿のはずれに「はずれ」という屋号の家があります。宿の長さは、木曽では奈良井宿に次ぐ長い街並みです。江戸方から倉坂を登りきって、左手に曲がり突き当たったところが高札場跡です。高札場の石垣が残っており、その上に民家が建っています。そのそばに南無妙法蓮華経の碑(高さ2.1m)があります。

野尻宿駅付近には、まだ大戸の残る古い民家や民宿を営む大きな木造の家が残っています。

(木曽～歴史と民俗を訪ねて～より)

本陣・脇本陣

旧本陣の森家は1894年(明治27)の大火で焼失しました。

この森家には、太田南畝も泊まっています。「野尻の駅の本陣森庄左兵衛門が家にとまる。ここも板ばめにして壁なし。されど10月9日牧野備前守といへる札あるをみれば、去年京尹より執政にめさせられし時、一夜やどしまゐらせし所なり。げに旅にしあれば、かかるいぶせき所にもやどらせ給うものかな。よもすがら雨ふる音、谷川の流れとひびきをあらそへり。」…壬戌紀行…

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曽路11宿

第5章
明治以降の木曽檜活用、
森林鉄道

第6章
木曽の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

1880年(明治13)6月27日明治天皇が京都巡幸の際この本陣を御小休所としました。

野尻駅から東へ100メートルほどの所に、旧脇本陣の木戸家があります。1600年(慶長5)関が原参戦、徳川秀忠は3万8千の軍をもって敵地木曾谷を通過。その先陣を山村良勝とともに務めた小笠原信濃守忠修の二男宗勝は良勝より野尻問屋半分を与えられ、姓を木戸彦左衛門と改名、代々襲名して庄屋職を兼ねました。1709年(宝永6)古谷久左衛門が、また1767年(明和4)森仙左衛門が庄屋をつとめています。

木戸家には、近世の木曾を知る上に大切な史料が、数多く所蔵されています。

交通関係の文書や宿絵図、土地や村関係の書類や山林絵図、問屋役を示す文書や大名宿泊の木札など、貴重な資料が多数あります。

① 七曲り(ななまがり)

野尻宿は狭く曲がりくねった町並みが特徴。外敵を防ぐために所々大きく曲げて作られた道は“七曲り”と呼ばれています。

② 龍泉庵

街道から現在の大桑小学校に向かって少し登った所に龍泉庵があります。龍泉庵は、定勝寺の飛び地境内で、野尻家益の館址でした。江戸時代初期になって、その後裔という野尻太郎左衛門が龍泉庵を創立したと伝えられています。その後1690年(貞享3)木戸彦左衛門が田畑を寄付して再建しました。境内には1774年(安永3)に建立された地蔵菩薩像(高さ202cm)があります。この地蔵は、中山道最大です。

龍泉庵はふるさとの童話作家酒井朝彦とのかかわりもあります。朝彦の伯母が定勝寺等海和尚に嫁ぎ、そこへ父を亡くした朝彦が、6歳から16歳まで暮らしました。等海和尚夫婦は晩年ここ龍泉庵で暮らしました。朝彦は、戦争中、家族で龍泉庵に疎開しました。

(歴史の道調査報告書1より)



③ 高札場跡(こうさつばあと)・いぼ石

江戸時代には高さ1丈6尺(約4m)、横3間(約5.4m)、奥行1間(約1.8m)の高札が掲げられていましたが、現在はその石垣が残るのみです。そのそばに高さ約2mの「南無妙法蓮華経」の碑があります。台座になっている大きな石は「いぼ石」と呼ばれ、その昔、イボのできた人がこの石に触れるとイボが治ったという言い伝えがあります。

④ 須佐男神社(すさのおじんじゃ)

祭神は建速素戔鳴尊(たけはやすさのおのみこと)(須佐男命)(古事記:須佐之男命日本書紀:素戔鳴尊)後世には、牛頭天王と同一としています。須佐男神社は当初、牛頭社と言われていました。掲額の表面に「天王」、裏面に1661年(寛文元)9月の文字が見え、1715年(正徳5)の災害前のもので、遺物の中ではもっとも古いものです。

● 須佐男神社例大祭

毎年7月14日・15日に開催。御輿に移御された御神体が白装束の添守によって町内に担ぎだされます。「小休石」はお祭りの小休止で御神体が置かれる石で、この石の前で舞楽が行われます。



龍泉庵地蔵菩薩



大桑村の歴史と民話 ● 須佐男神社

昔、京都八坂神社の僧に「チョウサイ坊」と言う者がおった。ところがこの僧は故あって追放されるにあたり、窃にご神体を持ち出して中山道を下り、野尻につき万納宅に宿った。一夜、僧は、万納に向って、祇園八坂様の御神体を奉持せる旨を打ち明け、これを祭祀してはと勧む。これを聞いた当主万納は大いに喜び謹んで拝受し、直ちに己の所有なる古宮の山林中へ齋祀せり。このときに当たり万納は、祭典の諸準備を整え、ご神体を奉持して横町附近まで来たが、なお祭祀に必要な一品を忘れ来ることに心付き、それを取りに帰らんとしてあたりを見廻したるに、幸いにも清浄なる平定な岩石のあるのを見、ここにご神体を安置して、私宅に急ぎ戻りて不足の品を携え来たり、滞りなく祭祀の式典を終われりという。

この古事より、例年の祭典の際は神輿は必ず、この石の上でお小休みし給うと。御輿奉持（上げ下ろし）のときに「チョウサヤ、ボウサヤ」と言うは、京都より奉持せる僧の名を呼びて行わるのだと伝う。（大桑村の歴史と民話）

大桑村の歴史と民話 ● 八人石（地名）

1663年（寛文3）美濃国の山伏2人と信濃国山伏8人がこの地で相争い、美濃国の山伏一人が死亡したところから、山村代官が知るところとなり、信濃国山伏8人が石の上で処刑された。これにちなんで、この辺りを八人石と名付けたという。（大桑村の歴史と民話）

5 妙覚寺

国道19号線で道の駅「大桑」を南進し、切通しをすぎると左側小高い所に楼門が見えます。これが妙覚寺です。

定勝寺の法末寺ですが、創建年代は明確ではありません。鐘楼門は1953年（昭和28）の建立で新しく石段・塀・植込みとよく調和しています。また、庭も寺有輪と結んで立派な庭です。

境内の「コウヤマキ」「チャンチン」は村の天然記念物に指定されています。（木曾～歴史と民俗を訪ねて～より）

のぞきど森林公園

JR野尻駅から国道をこえて、谷あいの道を5kmほど登った地点にある標高900mの眺望のよい高原です。

ここは、7～8,000年前といわれる縄文早期の遺跡が発見されました。また、古代には与川を経て長野・伊奈川へとつづく古道の通っていた場所とも言われています。

ます65ヘクタールの広大な地域にはオートキャンプ場、バンガローやバーベキューハウスが設けられています。（木曾～歴史と民俗を訪ねて～ 木曾教育会郷土館部編著）

日本遺産木曽路 構成文化財

29 阿寺溪谷 …………… 7章-149P参照



41宿場町	みどのじゆく
中山道 木曾路	三留野宿
	建物・町並み 南木曾町
<p>■基本データ</p> <p>住所 南木曾町読書</p> <p>アクセス JR「南木曾駅」から徒歩5分</p> <p>連絡先 (一社)南木曾町観光協会 /TEL 0264-57-3123</p>	
	 マップQR

中山道が設置される以前から交通の要衝として、かつては妻籠宿と並び栄えた宿場です。

1881年(明治14)の大火でほとんどが焼失し、その後に建てられた出梁造りやうだつのある家が往時を偲ばせます。江戸から41番目の宿場。

三留野宿の位置・町並み

三留野宿は江戸方からいうと紅坂「べにざか(べんざかとも)」を登り詰めたところからはじまります。宿の入口に枳形があり、それを通して西側に高札場がありました。

そこから現在は新町・上仲町・下仲町・坂の下と続いています。1704年(宝永元)には本町という地名があり、1824年(文政7)には新町・上町・中町・下町・坂の下というようになっており、他に市神・坂口という地名も使われていました。

新町の部分はゆるやかな登りとなっておりますが、上仲町・下仲町と比較的急な坂道となっております。坂の下が摺鉢の底で、再び登りとなって宿を出て行きます。枳形は京方の入口にも設けられていました。

町並みの長さは1692年(元禄5)の道中奉行高木守勝への書上げによると2町40間とあり、天保期より25間長かったようです。家が街道に沿って並んでいる鉄砲町と呼ばれる町並みをなしていました。これによると、新町から坂の下までのいわゆる宿内には、東側に40軒、西側に42軒の計82軒が並んでいました。そのうち、本陣・脇本陣を除いて肩書の付いている家が36軒あり、その内訳は、百姓4、小百姓11、伝馬請役3、人足13、茶屋3、旅籠・鍛冶各1となっています。

江戸方入口にある七兵衛等のように、宿の出入口で営まれている茶屋を棒鼻の茶屋と呼んでいました。肩書のない家は伝馬役・歩行役を勤めながら旅籠を営んでいたものと推測されます。また、間口の規模別分布状態を示すと、4~5間の家が36軒で、44%弱を占め最も多く六間以上の家17軒を合わせると53軒となっています。

三留野宿の本陣・脇本陣

三留野宿の本陣は代々問屋の鮎沢家が勤めていました。鮎沢家はその系図によると、三尾将監の流れをくみ、木曾川西岸の、木曾南端から東濃地方にかけての地域の、木曾家の最前線を固めていた原家の一族です。近世になってからは、三留野宿問屋・本陣を勤めるとともに、享保の改革までは田立村の下代官でもありました。本町（現在は下仲町）にあり、建坪120坪半で、門、玄関、上段の間という本陣の三つの特徴をもったものであり、家の右半分が大名家等の休泊のための造りになっていました。

脇本陣は宮川家です。宮川家は始め年寄でしたが1806年（文化3）から三留野村の庄屋を勤めるようになり、幕末に至っています。脇

本陣の間取図は存在していないので、その全貌を知ることが出来ませんが、間口17間、奥行8間半、建坪90坪、門構、玄関附で、本町にありました。

●宿の機構

一宿に二人ずつの問屋が任命されていました。近世の宿駅は貨客の継立てや、その休泊のために設置され、これら人馬の継立て業務の最高責任者が問屋です。

庄屋が領主である尾張藩、その代官の山村家の支配下であったのに対し、問屋は幕府の道中奉行設置後は、その支配下にありました。

三留野・妻籠両宿ともに2軒ずつの問屋があり、三留野宿は勝野・鮎沢の両家が、妻籠宿は島崎（中町）・林（下町）の両家が勤めていました。

1806年（文化3）に三留野村の庄屋が勝野家から宮川家に替った際に、一時間屋も宮川家に移りましたが、間もなく問屋の方は勝野家に戻りました。また妻籠宿においても1744年（延享元）に庄屋を勝野喜助が勤めていますが、これも一時的な現象でした。

三留野宿・和宮ご降嫁

和宮の降嫁が広く世間に伝わると、世の中はさらに騒がしくなりました。降嫁の途中で宮を奪い返す動きがあるとの風説まで流れました。この風説に動かされて、江戸への道筋は、東海道から急拠中山道に変えられました。その結果道筋となる中山道の宿場・在郷はもとより、近隣の国々まで大変な騒ぎとなりました。

道中調査のため役人衆が多く入って来て、三留野宿に和宮がお泊りになることなどが決められました。降嫁の一行は江戸からの迎えが15,000人、京の付き人が10,000人、警衛の諸藩の武士が15,000人、その他助郷の人足・通し雲助など入れて計80,000人に及ぶ大行列でした。

既設の旅籠屋では到底間に合いません。そこで三留野宿の場合は、町裏の田んぼに仮小屋を急造することになりました。

田立村に建設が割り当てられた仮小屋は、建坪40坪から130坪までのもの35軒で、その建築材も田立村に割り当てられ、田立で不足した資材は隣の川上村で伐ることになり、その木材の運搬には川上の他に、加子母・付知の村々が動員されました。

仮小屋の建築は田立の他に、柿其・与川・蘭・湯舟沢・山口の村々にも割り当てられました。また、仮小屋の建築中大風で小屋が倒れ、尾張の人夫が多数怪我をして帰国したことが『大黒屋日記』に見えるので、仮小屋がけには近在の者だけでなく、遠くからも動員されていたことがわかります。

道作りも大々的に行われました。三留野の建石沢から羅天までの6つの橋が田立の割り当てで、500人余が出動しています。また田立から出した物品は、明松たいまつ4,980・わらじ300・薪30・わらなわ12束などで、これらを作りまた運搬した人足は1,169人でした。

このように、この通行のため田立から出動した人員は、延べ28,719人半でした。また、木曾下四宿（野尻・三留野・妻籠・馬籠）へ、10月29日から11月4日までの間に出た人足総数だけでも22,587人、馬は669疋となっています（和宮は11月1日、三留野宿泊りで下向していきました）。

人足は定助郷の伊那をはじめ、尾張・美濃さらに遠くは越後の頸城郡からも376人が来ていました。これらから和宮通行がいかに大きかったかがうかがえます。

『大黒屋日記』はこの行列を「前代未聞」と記していますが、80,000人余の通行とあっては、こんなことで表わすより言いようがなかったのでしょうか。この通行は雨の中の強行軍で、過労と寒さで行き倒れた人足も大勢いたと伝えられています。



天白公園



福沢桃介記念館

桃介橋・読書発電所 …………… 5章-126P参照

観光・見所

① 天白公園(てんぱくこうえん)

公園内には、ミツバツツジの群生地、桃介橋、福沢桃介記念館・山の歴史館、悲しめる乙女の像があり、見所いっぱいです。

住所:長野県木曾郡南木曾町読書

料金:無料(なぎそミツバツツジ祭開催中は協力費が必要)

定休日:無休 駐車場:あり

連絡先:南木曾町観光協会 TEL0264-57-3123

◎ミツバツツジの群生地(町の天然記念物・町花)

約400株のミツバツツジが群生し、4月中旬から見ごろ。ナギソミツバツツジはその名のとおりこの近辺にしか見られない珍種です。

◎桃介橋(国の重要文化財)

◎福沢桃介記念館・山の歴史館

開館日:3月中旬~11月末9:30~16:30

休館日:毎週水曜日

料金:大人500円 中学生250円 小学生以下無料

◎読書発電所(国の重要文化財)

●和合の枝垂梅

江戸時代、木曾谷有数の酒蔵家遠山氏の庭木として愛育されてきた古木。

●園原先生碑

三留野東山神社神官の家に生まれた園原旧富は、江戸中期の神学者で尾張・美濃・信濃に門人多数を擁していました。

●三留野宿本陣跡・枝垂梅

本陣の庭木だった枝垂梅の古木と、明治天皇御膳水が名残を留めています。

●廿三夜塔

二十三日の遅い月の出を拝み、豊作などを祈る民俗信仰の塔です。



三留野宿本陣枝垂梅



2等覚寺(とうかくじ)

山門に立派な仁王像があります。円空堂で韋駄天像など3組の円空仏が拝観出来ます。

営業時間:円空堂は8:00~17:00

料金:境内自由(円空堂は拝観100円) 定休日:無休

連絡先:TEL 0264-57-2445 駐車場:あり/50台



かぶと観音

かぶと観音 2章-19P参照

◎古典庵・与川の秋月(木曾八景)

仲秋の名月はここから眺めると、周囲の地形とあいまって大きく見事です。またここは、江戸時代初期に僧庵「古典庵」のあったところでもあります。

木曾八景 7章-143P参照

◎白山神社の大杉

大杉は2本あり、一本は目通り周囲8.2m、ほかの一本は6.7mの巨木です。また、春と秋の例祭には神社に神楽獅子が奉納されます。

柿其溪谷 7章-151P参照



構成文化財³⁰

つまごじゆくほぞんちく

妻籠宿保存地区

42宿場町

中山道
木曾路

つまごじゆく

妻籠宿

建物・町並み・重伝建(宿場町)

南木曾町

■基本データ

- 住所 木曾郡南木曾町吾妻
- アクセス JR「南木曾駅」から徒歩40分、
保神・馬籠行きバスで10分(妻籠下車)
中津川ICから約30分
- 連絡先 (公財)妻籠を愛する会／TEL 0264-57-3513
(一社)南木曾町観光協会／TEL 0264-57-3123
- 指定 国重要伝統的建造物群保存地区(1976年)



マップQR

中山道の42番目の宿場。蘭川東岸に位置し、隣接する43番目の宿場・馬籠宿と併せて観光地としてよく知られています。

江戸時代ののんびりした雰囲気伝える町並みが美しく保存されており、1976年(昭和51)に日本初の重要伝統的建造物群保存地区に選ばれ、町並み保存運動のさきがけ、木曾路ブームの推進役となりました。保存地区面積は1245.4haです。

宿場内の下町、中町、上町と続く町並みは明治以降たびたびの火災で焼けており、江戸期の建物が多いわけではありませんが、昔の姿を再現することに努めたことで往時の景観を彷彿とさせています。枳形から南の寺下エリアは、木曾路

のなかでも奈良井と並んで保存状態が極めて良い地区です。

家の多くは平入り・出し梁・格子戸の造りであり、デザインが統一されているため宿場の雰囲気一体感があります。

宿場の歴史

つまごじゆく
妻籠宿は室町時代、東濃の岩村を本拠とする遠山氏によって木曾谷の南の備えとして整備した山城妻籠城の麓に形成されました。江戸時代中期、規模は南北約250m程と木曾路11宿では小さな方ではありましたが、江戸中期には人口は800人を超えていました。これは、31軒もの旅籠と地場産業に従事する人口が多かったことによります。

徳川家康から中山道の宿場に指定されたのは1601年(慶長6)でしたが、それ以前から当地を支配していた木曾氏が、南部における美濃や伊那に対する拠点として重視していたといわれています。1642年(寛永19)の記録によれば、妻籠村の家数は54軒、人口は337人(男154、女183)でした。

●妻籠を愛する会

妻籠宿の町並み保存運動の中心となっているのは公益財団法人「妻籠を愛する会」です。1968年（昭和43）の設立以来、家や土地を「売らない・貸さない・こわさない」という3原則のもとに、妻籠の観光開発は、自然環境も含めた宿場景観の保存以外にはありえないという考え方を確認し、地元住民を中心とした保存事業を徹底しています。

具体的には、宿内一部の石畳の復元、道標や標示板の設置、高札場の復元、中山道の公衆便所設置、宿内の電柱を裏通りに移すといった活動をしてきました。宿場景観の保持に努めています。なお、3原則は住民憲章に明記されています。

「妻籠の町並みが火事で焼けることなく残ってきたのは、江戸時代に一晚に4回火の用心をし、そのうち3回は（家の者を起こして）火の元の確認をせい、というお触れが出ていたからだといわれています。

その伝統はずっと守られ、いまでも3軒にひとつ消火栓があるほどです。妻籠は景観保全に力を入れ、むやみに観光地化しなかったことが、地域としての今の成功につながったと思います。観光地化しないことが最高の観光開発であるということです。

とくに欧米からのお客さんはウォーキングを好み、昔の姿がそのまま残っていることに価値を見出してくれます」

（妻籠を愛する会）

●馬籠峠トレッキング

中山道は妻籠－馬籠間で「馬籠峠」を越えることになります。この峠越えのトレッキングコースは人気で、近年は欧・米・豪を主とする外国人旅行者が多くいます。令和元年度はこのコースを歩く旅行者の実に7割近くが外国人旅行者となっています。

<馬籠峠を越える旅行者数（ ）内は外国人旅行者>

2016年度45,400人 (23,200人)	2017年度47,900人 (26,100人)
2018年度49,800人 (31,400人)	2019年度56,900人 (37,800人)
2020年度11,500人 (1,100人)	2021年度13,600人 (900人)

① 日本最初的人力車

光徳寺の庫裏（くり）には、明治初期の遂応和尚が考案し、乗っていた車付駕籠が展示されている。日本初的人力車ともいわれる乗り物で、和尚はこれに乗り、京都まで行ったことがあるとの伝承が残っています。

② 黒縄屋のモデルになった上丁子屋

十返舎一九『続膝栗毛』で、京都から善光寺へ向かう途中、妻籠で弥次喜多が宿泊する黒股屋のモデルが上丁子屋です。実際に十返舎一九が宿泊したといわれ、馬を繋ぐための小さな輪を今も見ることができます。

明治天皇の巡幸

1880年（明治13）明治天皇巡幸の折に、脇本陣奥谷が御小休所となりました。ここで山菜のシオデ（幻の山菜、山のアスパラガスと呼ばれる。群生しないため大量に採取できない）を食された明治天皇は「これを籠いっぱい欲しい」と所望されたといわれます。明治天皇は「上段の間」で休まりました。



③ 汗かき地蔵（延命地蔵）

「1813年（文化10）のある日、蘭川の河原の大きな石に地蔵の寝姿が現れたため、村中が大騒ぎとなった。そこで、光徳寺住職の中外和尚と村人たちとで地蔵をこまごまで運び上げて祀った」という言い伝えが残っています。

4月23、24日におこなわれる例祭の頃、お地蔵様は女性の業苦を代わりに引き受けるためにびっしょりと汗をかくだと信仰され、汗かき地蔵と呼ばれています。

ディスカバー・ジャパン

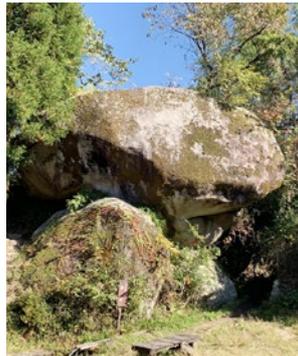
1970年の大阪万博終了後、国鉄（現JR）が始めた「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンは人々のレジャー欲を駆り立て、当時創刊された女性誌『an・an』『non・no』を手元に旅行を楽しむ「アンノン族」が各地にあふれました。

このブームの中で木曾路は大きな注目を集め、『平凡パンチ』の表紙を描いたイラストレーター・大橋歩を起用した木曾路のCMも制作されました。この影響を強く受けたのが妻籠で、5年の間に妻籠を訪れる観光客は10倍近くになったともいわれます。



4 郵便資料館

島崎藤村『夜明け前』にも開局当時の様子が描かれています。妻籠郵便局に併設され、資料約270点が展示されています。料金不要。(土・日・祝休館)



5 鯉岩

妻籠宿入り口左側。『木曾路名所図会』に描かれた、中山道名三石のひとつ。当時は鯉の滝登りのように直立していましたが、1891年(明治24)の濃尾大地震で上部が横倒しになりました。(町指定 名勝)

6 藤原家住宅

大妻籠集落にある、17世紀半ばまでさかのぼる古い建築物。希望者は見学可能。料金不要。(県宝)

● 妻籠宿案内

妻籠宿案内人の会のガイドが案内してくれる。案内人1名につき15名まで。

案内料は各コース、有料。②～④は施設入館料が加わる完全予約制(10日～2週間前に予約)。「妻籠宿案内依頼書」にてFAXまたは郵送で申し込み下さい。

妻籠宿案内人の会 / Tel&Fax.0264-57-3513

- ①お気軽コース 30分
- ②本陣コース 45分
- ③脇本陣奥谷本陣コース 60分
- ④歴史探訪コース 90分

7 男滝女滝

吉川英治の『宮本武蔵』で、武蔵が修行し、またお通との恋物語の舞台となった滝。小説では男垂(おたる)の滝となっています。右奥に女滝があります。

日本遺産木曾路 構成文化財

- ⑫史跡 中山道……………4章-61P参照
- ⑬妻籠城跡……………2章-30P参照
- ⑭一石栃立場茶屋……………4章-62P参照

● 妻籠 南木曾ハイキングコース

妻籠宿内水車小屋前-天白公園のコース。距離は3.8km。

■主要参考文献 / 『妻籠宿』(小寺武久 中央公論美術出版社 1989)

『中山道 風の旅 軽井沢-馬籠編』(テレビ埼玉・群馬テレビ編 さきたま出版会 2004)
『木曾-歴史と民俗を訪ねて-』(木曾教育会郷土館部編著 信教出版部 2010)

はやしけじゅうたく

林家住宅

■基本データ

- 住所 木曾郡南木曾町吾妻2190
 アクセス JR「南木曾駅」から徒歩40分
 保神・馬籠行きバス10分(妻籠下車)
 中津川ICから約30分
 連絡先 南木曾町博物館 / TEL 0264-57-3322
 指定 国重要文化財(2001年)



マップQR

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)第7章
その他
(観光宣伝など)

妻籠宿で、代々、脇本陣・問屋を勤めてきました。將軍家茂の御簾中として御降嫁した皇女和宮は、中山道ご通行の折に妻籠宿で昼食をとられました。現在の建物は1877年(明治10)にそれまで禁制であったヒノキをふんだんに使い、当時の粋を集めて建てたものです。また、島崎藤村の初恋の相手「ゆふ」さんの嫁ぎ先でもあります。



林家住宅(脇本陣奥谷)



妻籠宿本陣

島崎藤村と本陣・脇本陣奥谷

「木曾路はすべて山の中である。あるところは「木曾路はすべて山の中である。あるところはそば」^{そば} 峠づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入り口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いていた。」

この有名な文章で始まる『夜明け前』を書いた島崎藤村(本名:春樹1872-1943)は、馬籠に生まれましたが妻籠にも縁が深く、本陣は母の生家、最後の当主は実兄・広助でした。脇本陣奥谷をつとめていた林家は、『夜明け前』では扇屋得左衛門の名で登場します。

また、藤村の詩「若菜集～初恋」の女性と言われる、幼馴染の「ゆふ」さんが馬籠から嫁いできた家でもあります。

●南木曾町博物館

妻籠宿内にある博物館で、脇本陣奥谷(林家住宅・国重要文化財指定)と、江戸時代後期の間取図をもとに復元された妻籠宿本陣、資料館の3館。

- 住所:木曾郡南木曾町吾妻2190
 営業時間:9:00~17:00(最終入館は閉館15分前)
 休館日:12月29日~1月1日
 料金:脇本陣奥谷+資料館(大人600円 小人300円)
 妻籠宿本陣(大人300円 小人150円)
 全巻共通券(大人700円 小人350円)
 連絡先:TEL 0264-57-3322



43宿場町	まごめじゆく 馬籠宿
中山道 木曾路	建物・町並み 中津川市

■基本データ		 <small>マップQR</small>
住所	岐阜県中津川市馬籠	
アクセス	JR「中津川駅」から 北恵那バス馬籠行(30分)～馬籠終点 中央高速バス馬籠バス停(神坂P.A. 内)から徒歩20分 中津川ICから約30分 中津川IC(木曾福島方面)→国道19号線 沖田交差点→馬籠(25分) 【無料駐車場利用 ※普通車300台・大型30台】 馬籠観光協会(馬籠宿観光案内所) /TEL 0573-69-2336 開館時間 8:30～17:00(冬期は9:00～17:00)	
連絡先	馬籠観光協会(馬籠宿観光案内所) /TEL 0573-69-2336 開館時間 8:30～17:00(冬期は9:00～17:00)	

中山道の43番目の宿場で、木曾路11宿最南端、美濃側の入口として栄えていました。急峻な坂道に築かれているため、宿場内の民家は石垣を築いて屋敷地を確保していました。大雨から守るために敷かれた石畳や、宿場に敵の進入を防ぐため街道を鉤の手に曲げた枅形などが、当時の雰囲気漂わせています。

歴史的背景

馬籠宿は尾張藩の領地で、江戸からの距離は83里6町4間といわれ、街道は南北に貫通していて、町並みは約600m続きます。

1843年(天保14)年の中山道宿村大概帳によると、本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠18軒、家数69軒で、宿場の規模は小さかったといえます。街道が急な尾根に沿った急斜面を通っているため、石垣を築いて屋敷を造る、坂のある宿場が特徴です。

馬籠宿の大火

馬籠宿は度々火災に見舞われていますが、最も古い火災記録は、1639年(寛永16)2月11日に発生した大火で、宿内の31軒のうち20軒が焼失しました。この後江戸時代には大火と言われる火災が2度発生しており、1858年(安政5)の大火では47軒が焼失し、1860年(万延元)の大火では16軒の家屋と6棟の土蔵が焼失しました。

明治時代以降も2度の大火に見舞われています。特に1895年(明治28)の大火は馬籠宿最大の火災で、64軒の家屋と14棟の土蔵を焼失し、それまでの江戸時代の宿場としての馬籠集落の遺構が消滅しました。



馬籠宿枅形付近

しまざきとうそんたく

島崎藤村宅

(まごめじゆくほんじん)あと

(馬籠宿本陣)跡

■基本データ

- 住所 中津川市馬籠4256-1
- 連絡先 藤村記念館 / TEL 0573-69-2047
ホームページ <http://toson.jp>
- 指定 県史跡(2005年)



マップQR



歴史的背景

馬籠宿の本陣島崎家は、相模国三浦郡久郷村の三浦氏を先祖とし、1558年(永禄元)島崎重通が馬籠に移り住み中興の祖となりました。1600年(慶長5)関ヶ原の戦いには馬籠の砦を固め、その功績により馬籠の代官を勤めるようになりました。島崎家の屋敷は現在の位置よりも落合寄りにありましたが、1639年(寛永16)の火災により現在の位置に移り、1703年(元禄16)からは本陣・問屋・庄屋を兼ねるようになりました。

1860年(万延元)の火災により本陣の建物は焼失しましたが、隠居所は火災を免れ、その後、1861年(文久元)本陣の建物は再建されました。

明治維新を迎え宿駅制度は廃止。1872年(明治5)島崎藤村が生まれ、9歳まで馬籠で暮らしましたが、1881年(明治14)勉学のため上京しました。1893年(明治26)本陣の建物と土地を売却して島崎一家は上京。

1895年(明治28)馬籠宿の大火により本陣の建物は焼失しましたが、隠居所だけは火災を免れ現存しています。

ふるさとの生んだ文豪・島崎藤村の生家跡であり、中山道木曾路の馬籠宿本陣跡という交通史上の遺跡としても重要です。さらに、島崎藤村の代表作であり近代歴史文学の記念碑的著作である『夜明け前』の舞台となった場所です。

1969年(昭和44)7月3日長野県史跡に指定され、その後、岐阜県中津川市への越県合併により2005年(平成17)9月6日に岐阜県史跡に改めて指定されました。そして、2020年(令和2)6月19日に日本遺産に追加認定されました。

●島崎藤村

1872年(明治5)筑摩県馬籠村(現岐阜県中津川市馬籠)に父正樹・母縫の7人兄弟の末っ子として生まれました。そして9歳まで馬籠で育ち、勉学のため上京します。明治学院卒業後、明治女学校、東北学院、小諸義塾で教師を務めながら、詩集『若菜集』『一葉舟』『夏草』『落梅集』を発刊します。処女詩集『若菜集』は日本近代詩の輝かしい出発を告げる画期的な位置を占めるものとなりました。

1906年(明治39)日本の自然主義文学の先駆けとなる『破戒』を出版し小説家に転身します。その後『春』『家』『嵐』『新生』などを刊行していきます。

1929年(昭和4)から1935年(昭和10)の足かけ7年間にわたって「中央公論」に『夜明け前』を連載します。「木曾路はすべて山の中である」という有名な書き出しで始まる『夜明け前』の中心舞台は木曾馬籠の本陣で、主人公は父正樹でした。幕末から明治維新の激動の日本をはじめ、木曾路や中津川宿など広範囲にわたって物語は展開されていきます。



第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

●藤村記念館

1945年(昭和20)藤村と交流のあった英文学者菊池重三郎氏は、戦火を逃れて馬籠に疎開し、隠居所を寓居としており、菊池氏と馬籠の人々の出会いが藤村堂建設の発端となりました。そして1947年(昭和22)「文豪島崎藤村を顕彰するものを造りたい」と考えた馬籠の青壮年により、ふるさと友の会が結成され、勤労奉仕により藤村堂が建てられました。

設計は建築家谷口吉郎博士によるもので、回廊と障壁と冠木門(かぶきもん)からなる奈良朝様式の建物です。1950年(昭和25)に財団法人藤村記念郷が発足しました。1952年(昭和27)に長野県下の小中高大学からの寄付等により、展示施設の第一文庫が作られ、全国に先駆けた文学館となりました。1955年(昭和30)博物館相当施設の指定を受け、展示施設の充実のため1971年(昭和46)第二文庫を、1983年(昭和58)には第三文庫を建設しました。

文化財の隠居所建物は2006年(平成18)解体修理が行なわれ、2010年(平成22)には第二文庫を立て替えました。

●藤村の藤村文庫の想い。 「つくるのであれば馬籠本陣の隠居所に・・・」

1936年(昭和11)、木曾教育会が紀元2600年記念事業として藤村記念文庫の建設を思い立ちました。

1940年(昭和15)に上京して藤村に相談したところ「作ってくださいならばあの隠居所に・・・」との言葉がありました。しかし1941年(昭和16)日本は太平洋戦争に突入し、藤村記念文庫建設の話は頓挫しました。



『夜明け前』原稿

■主要参考文献／

『図録島崎藤村』(藤村記念館編2009)

『島崎藤村生家の建築』

(NPO 法人 信州伝統的建造物保存技術研究会編 藤村記念館発行2006)

『藤村記念館だより No.114 号』(藤村記念館発行2006)

『藤村記念館50年誌』(藤村記念館発行1997)

『藤村記念郷30年誌』(藤村記念館発行1979)

『山口村誌上・下巻』(山口村1995)

『木曾馬籠』(中央公論美術出版 菊池重三郎1977)

『新潮日本文学アルバム 島崎藤村』(新潮社1984)



●水車小屋

樹形の隣に、大きな水車小屋が建っており、現在は水車を利用して小水力発電を行い、宿場内の照明などに活用されています。

●陣場展望台

恵那山と中津川恵那方面が一望できる絶景の場所。『夜明け前』直筆原稿の碑などがあります。

●峠集落

峠集落は妻籠宿と馬籠祝の間宿(あいのしゅく)として発展し、藤村の『夜明け前』にも登場する牛方(うしかた)の家屋等の建造物群が保存されている集落です。

●馬籠の文学碑

馬籠宿には中山道に沿ってたくさんの文学碑等が建っています。

- ・「是より北木曾路」藤村揮毫
- ・芭蕉の句碑「送られつ 送りつ果ては 木曾の穂(あき)」
- ・正岡子規の句碑「桑の実の 木曾路出づれば 麦穂かな」
- ・島崎藤村詩碑「母を葬るの歌」
- ・島崎藤村詩碑「初恋」
- ・山口誓子の句碑「街道の 坂に熟柿 火を点す」
- ・十返舎一九の句碑
- 「浚皮のむけし女は見えねども栗のこわめしここの名物」
- ・正岡子規の句碑「白雲や 青葉若葉の 三十里」



① 高札場(こうさつば)

馬籠宿の坂を上りきった所を陣場といい、ここには高札場が建てられていました。現在は高札場が復元されており、『正徳元年御高札之写』の資料から、1711年(正徳元)の高札が6札(親子兄弟札、キリシタン札、毒薬札、火付札、駄賃札(2札))掲げられています。

② 永昌寺(えいしょうじ)

1665年(寛文5)創建の臨済宗の古刹で、『夜明け前』では万福寺の名で登場します。

本陣島崎家の菩提寺であり、島崎藤村の遺骨は終焉の地である、神奈川大磯の地福寺に埋葬されていますが、遺髪、爪などは、永昌寺に埋葬されています。藤村の夫人と娘の墓石は藤村がデザインしたといわれています。

本堂脇のお堂には「木造阿弥陀如来坐像」(中津川市指定有形文化財)と円空作による「木造聖観音立像」(中津川市指定有形文化財)が安置されています。



③ 榎馬屋資料館(つちまやしりょうかん)

榎馬屋は湯舟沢村の庄屋を務めていたため、江戸時代以降の村政に関する資料が多く保存されており、古文書を中心に展示されています。



④ 清水屋資料館(しみずやしりょうかん)

代々馬籠宿役人を務めていた原家は島崎藤村とも親交が深く、藤村に関する資料が数多く保存されています。また、7代目当主が収集した古美術品も多数あり、これらの資料が展示されています。

第5章

明治以降の木曽檜活用、森林鉄道



じんぐうびりん

神宮備林



かつて、宮内省御料局木曾支庁(1905設置)が、伊勢神宮^{しきねんせんぐう}の式年遷宮用のヒノキを確保、育成を目的とした林、および指定された地域です。現在の長野県木曽郡と岐阜県中津川市の阿寺山地にあります。

伊勢神宮の神宮林の備え(予備)という事から名づけられました。現在は神宮備林という名ではなく、国有林の一部の扱いです。しかし、旧神宮備林、神宮備林、旧御料林、御料林などの名称でも呼ばれています。



御杣始祭 伐採



三紐切り



三紐切り

しきねんせんぐう

伊勢神宮の式年遷宮

「式年」は年数の限りという意味で、伊勢神宮に限らず他の神社でも20年を区切りとして社殿を中心として造り代えてきました。この祭祀制度が21世紀まで続いているのは、皇室の祖神とされている伊勢神宮だけとなっています。

伊勢神宮の式年遷宮の記録が残っているのは、七世紀後半の白鳳時代の天武天皇の頃とされています。奈良・平安・鎌倉時代まで伊勢神宮所有の宮山、宮域から御造営材を出していましたが、やがて、材がなくなり室町時代の1345年（興国6）頃から他国の山から御造営材を出すようになりました。

伊勢神宮（正式名称「神宮」）は、内宮と外宮から成り、20年に一度「式年遷宮」を執り行います。この式年遷宮では新たに神殿を立て替えて御神体を移します。伊勢神宮の遷宮は様々な行事を要し、これまで62回、約1,300年にわたって連綿と伝えられてきた日本の伝統文化です。

この遷宮に使用される木材のうち、御神体を収めるための器となる材は「御樋代木」といわれ、この御樋代木をとる木材が「御神木」と呼ばれます。御神体に最も近づく御神木の伐採には、「御杣始祭」と呼ばれる特別な行事が行われます。



御木曳行事

御神木は、内宮と外宮の2本を必要とし、それぞれが無節の上質な材であること、清らかな流れに近い清浄な土地にあることなど、数多くの要件を満たさなくてはなりません。また、伐採では2本の先端が交差するように倒すため、お互いが届く距離に生えていなくてはなりません。

数多い要件を満たして選ばれた御神木は、三ツ紐切り（又は三ツ尾切り）といわれる伝統的な手法で伐倒されます。木の幹に三方向から斧を入れ、3箇所のアツルを残して伐倒することで、木材を傷めず、倒す方向も決めやすいという古来の技術です。

伐倒された御神木は、先端を菊の十六紋にかたどり、南方面などに文字を彫り込む作業が行われます。上松駅前では、御神木を奉安し芸能祭が奉納されたり、奉曳車に乗せられた御神木を地元住民などが参加する御木曳行事も行われます。この行事が終わると伊勢神宮に運ばれていくことになります。これを「御奉送」と呼び、御神木が立ち寄る各地域でも神事や祭礼が開催されます。

神宮備林と 御料局木曾支庁

かつて尾張藩の管轄であった木曾の山林は、明治維新後に政府へと引き継がれ大部分は「官林」となりました。しかし1889年(明治22)に皇室財産の「御料林」に編入されたため、木曾福島に新たに置かれた宮内省御料局木曾支庁(1903年設置)が管理運営を担いました。1906年(明治39)に御料林の一部が「神宮備林」となってからはその管理も行い、1920年(大正9)6月3日に第58回御^{きもとざい}杣山木本祭(翌59回からは御^{みそまはじめさい}杣始祭に名称変更)では、上松町の台ヶ峰打越沢から御神木を伐り出しました。

御料局木曾支庁庁舎(1908年から機構変更により宮内省皇室林野管理局)は、大正時代末まで執務に使用されましたが、1927年(昭和2)の福島大火で焼失したため、残念ながら当時の写真が残るのみです。



御料局木曾支庁庁舎(明治時代)

国有林の時代

1947年(昭和22)に、林政統一が行われ、木曾の森林は国有林となりました。

現在も、木曾谷から式年遷宮で使われる御用材を伐り出しております。

1985年(昭和60)には小川入国有林98林班で、2005年(平成17)には小川入国有林80林班で「御^{みそまはじめさい}杣始祭」を行いました。

御杣始祭は、式年遷宮の祭典の一つで、伊勢神宮の御神体を安置する器を造る、御^{みひしろ}樋代木を伐採する儀式です。御杣始祭で伐られた御神木は、化粧がけをし、長さ6.6mに伐られ、赤沢から上松駅まで運ばれ御木^{おきひ}曳きが行われます。その後、御神木は木曾川に沿って伊勢まで運ばれます。



神宮美林

あかざわしぜんきゅうようりん

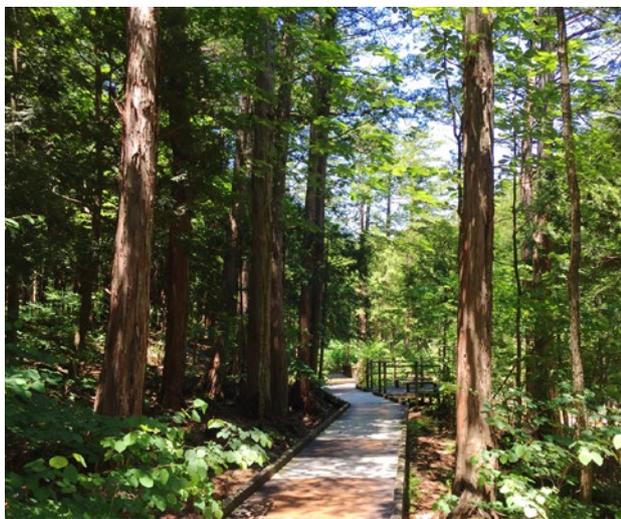
赤沢自然休養林

■基本データ

- 住所** 上松町小川入国有林内
- アクセス** JR「上松駅」から県道473号線を西に15km。路線バスで約30分。塩尻IC、中津川ICから90分、伊那ICから80分。
- 面積** 740ha **標高** 1,080~1,558m
- 開園期間** 4月下旬~11月上旬
- 連絡先** 赤沢自然休養林総合案内(上松町観光協会、上松観光開発(有)) / TEL 0264-52-1133
上松町教育委員会 / TEL 0264-52-2111



マップQR



敷地内には日本森林学会が選定する「日本林業遺産」に認定された木曾森林鉄道(1975年運行終了)の保存施設、森林鉄道記念館があります。観光路線として、森林鉄道記念館-丸山渡(往復2.2 km)が運行され、乗車しながら赤沢の美林を見学できます。

赤沢自然休養林は、上松町の南西部に広がる林野庁管轄の国有林で針葉樹林です。樹齢300年以上の天然木曾ヒノキが林立していますが、原生林ではありません。

面積は759.56ヘクタール、標高は駐車場付近の1,080mから、1,558mに至ります。

付随する公園地の名称でもあります。もともとは伊勢神宮などの御神木・建築用材を産出する森林地でした。

古来から檜などの良質な木材を産出し、伊勢神宮の式年遷宮の際にはここから選定されたご神木が用いられます。

日本三大美林のひとつで、林野庁の「森林セラピー基地」にも指定されています。観光客向けに整備されており、快適に自然環境を楽しむことから、都会から多くの観光客が訪れます。

木曾木材の中心地である上松町のみならず、木曾路を代表する体験型施設として、広大な敷地内に、整備された歩道を歩き森林浴を楽しむ8つの散策コース、森林セラピー体験施設などを備えています。

林業を支えた森林鉄道を体感



赤沢森林鉄道記念館

「赤沢森林鉄道記念館」は、森林鉄道の起点にあります。当時活躍したアメリカ製ボールドウィン蒸気機関車の1号機を始め、貴賓車、理髪車、モーターカーなどが見学できるほか、現役時代の写真も展示されています。また、運がよければ運行している機関車の整備を間近に見られます。廃止された鉄道路線の一部が復活されており、当時の車両で運行している赤沢森林鉄道に体験乗車することも可能です。

長野県木曾郡上松町小川入国有林内 赤沢自然休養林
営業時間9:00~16:00休日荒天日、11月~4月は冬季休業
料金資料館入館無料、普通車600円、赤沢森林鉄道乗車体験
往復2.2 km 1便当たり5両・定員100名
大人800円
4歳~小学生500円、団体割引(15名以上)あり
TEL0264-52-1133(上松町観光協会)

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

構成文化財④

建造物

きゅうていしつりんやきよくきそしきよくちようしゃ

旧帝室林野局木曾支局庁舎

■基本データ

- 住所 木曾郡木曾町福島5471-1
- アクセス JR「木曾福島駅」から徒歩約25分、伊那ICから約40分(30km)
- 連絡先 木曾町教育委員会生涯学習課／TEL 0264-23-2070
管理人室直通／TEL 0264-23-2033
- 指定 町有形文化財(2012年)



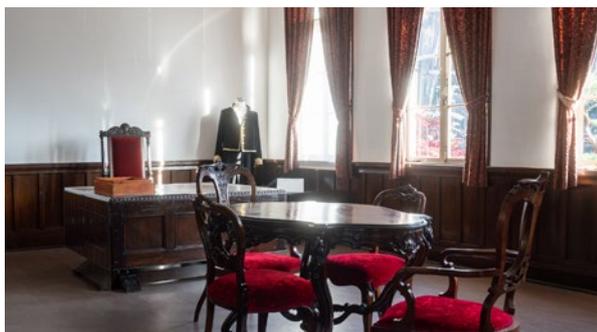
マップQR



福島大火で焼失した庁舎の代わりに、1927年(昭和2)に現地で再建されたのが現在まで残る帝室林野局木曾支局庁舎です。この庁舎を中核として木曾ヒノキを基軸に森林鉄道等による御料林としての近代的経営が行われ、1947年(昭和22)以降は現在の林野庁へと引き継がれました。先代の焼失からわずか半年で建てられた庁舎ですが、^{しょうしや}瀟洒な佇まいは木曾山の歴史と皇室の威光を今に伝えています。

旧帝室林野局木曾支局庁舎は、木造の本館、鉄筋コンクリート造の倉庫、汽缶(ボイラー)室が一体として残っています。全体としても近代の林野行政を知る上で貴重な建築です。

建築様式を知る上でもアール・デコの意匠がみられ、さらに、設計図面・棟札等が残っており、多数の名建築を輩出した宮内省内匠寮の設計で、請負が東京の業者であることが分かる資料もあります。



木曾の森林文化を長く伝えられる文化施設として、また木曾町内の近代化遺産としての重要な位置付けが明確となっていくことから貴重な文化遺産です。木曾町ではこの貴重な建物を2010年(平成22)に取得し、町のシンボルとして復元改修を行いました。

そして2014年(平成26)に一般公開を開始し、4年後に林業遺産の認定を受けました。御料林の歴史を後世に伝え、観光交流等に利活用する「愛称:御料館」として、多くの来訪者を迎えています。

御料館

1階には幅広い世代にも親しめるように「木育ルーム」を設置。県産材の良質な「ひのきのおうち」ほか、様々な木のおもちゃで自由に遊ぶことができ人気のスポットです。

2階の展示室では明治13年の「木曾谷模型」を展示しています。作者は御嶽行者で布教に尽力した児野嘉左衛門(ちごのかざえもん)です。内務省山林局木曾出張所が発注し、東京上野の第二回内国勸業博覧会に出品されました。周囲13mの巨大なジオラマで木曾谷全体を立体的に表しています。材料は天然木曾ヒノキです。



塩尻市・木祖村・木曾町・王滝村・上松町・大桑村・南木曾町・中津川市

きそのしんりんてつどう

木曾の森林鉄道

■基本データ

- 住所 上松町小川入国有林内
 アクセス JR「上松駅」から
 県道473号線を西に15km。路線バスで約30分。
 塩尻IC、中津川ICから90分、伊那ICから80分。
 開園期間 4月下旬～11月上旬
 連絡先 上松町観光協会／TEL 0264-52-1133
 上松町教育委員会／TEL 0264-52-2111

木曾森林鉄道の歴史

木曾森林鉄道は、大正初期から1975年(昭和50)まで、木曾地方で運用されていた森林鉄道の総称です。木曾ヒノキをはじめとする木材の搬出に用いられ、歴史と規模の大きさ等から、国内の森林鉄道の代表的存在でした。

1900年初頭、日本各地で鉄道網が整備されていきました。木曾郡内でも国鉄中央線が名古屋から塩尻までを結び、近代化の波が訪れていました。そんな時代の中、これまで河川を利用して運材は、水力発電所の建設により行えなくなり、木曾の木材もまた鉄道を利用して輸送されるようになりました。

1909年(明治42)、上松駅を起点とする森林鉄道小川線の工事が着工。1916年(大正5)、本格的な機関車と軌道を用いた森林鉄道「小川線」が開通します。上松と赤沢を結んだ小川線は木曾森林鉄道活躍の幕開けでした。

以降、王滝線、阿寺線、小木曾線、西野川線などつぎつぎとレールが敷かれていきます。



王滝の森林鉄道

最も長距離で輸送力が大きく、木曾谷はもとより日本の森林鉄道の代表的存在として語られるのが王滝森林鉄道です。王滝線の建設は帝室林野局によって1917年(大正6)に着工されました。鬼淵停車場を起点に王滝川に沿って水ヶ瀬までの25.3kmが開通したのをきっかけに、以降、御嶽山南麓の三浦までの幹線約16.7kmの延長、さらに瀬戸川、うぐい川、滝越から分岐する各支線も合わせて、王滝、三岳、開田の3村にまたがる広大な御料林内の鉄道網が1930年(昭和5)までに完成しました。



写真提供：中村秀己氏

機関車には、アメリカ製の蒸気機関車ポールドウィン号が活躍し、大正・昭和には最新のディーゼル機関車、ガソリン機関車が導入され、木曾の森林鉄道の全盛期の昭和30年代には、木曾谷全体で幹線・支線併せて57路線、総延長は428kmを数え、作業軌道を入れると500kmともいわれています。これは東海道本線東京～関ヶ原と同距離に匹敵します。

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)第7章
その他
(観光宣伝など)

滝越地区(たきごしちく)

長野県最西端の滝越地区は木曾森林鉄道の中で一番奥の集落です。美しい緑と豊かな水、釣りやカヌーが楽しめるスポットとしても知られていますが、水交園に滝越の暮らしを支えたやまばと号とロータリー除雪車が展示されています。

やまばと号は滝越地区にあった分校が1959年(昭和34)に廃校となった為、本校まで通学

するのに1975年(昭和50)まで運行していたスクール列車でした。中は床も壁も木で作られており、可愛らしい子供サイズのイスが並んでいます。

鉄道のレールがいたるところに残っている滝越は、森林鉄道ファンの中でもとても特別なものとなっています。

松原スポーツ公園の保存車両

住所:木曾郡王滝村



モーターカー4号機



ディーゼル機関車132号機

滝越の水交園の保存車両

住所:木曾郡王滝村滝越5005



ディーゼル機関車119号機



関西電力ロータリー式除雪機

森林鉄道の保存車両展示、見学することができます。

「りんてつ倶楽部」によるレストア、ボランティア保存活動

1991年から毎年5月～11月の月に1度(年に5～6回)、旧松原停車場付近にある松原スポーツ公園内でレストア活動を行っています。王滝村内の保存車両もレストア増備しつつあり、今後の継続とエンドレスの線路を敷設。蒸気機関車“ボールドウィン”を走らせる目標で活動しています。

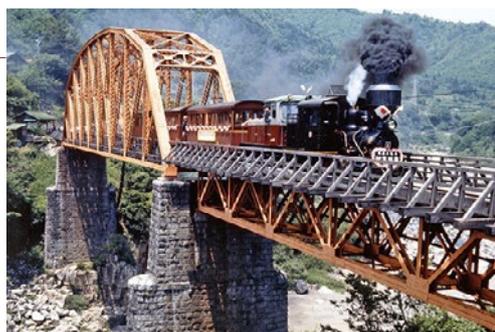


やまばと号用(7t)機関車

保存車両の写真提供:高橋滋氏

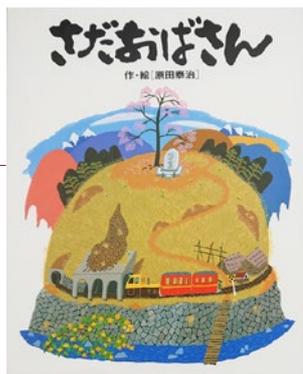
鬼淵鉄橋(おにぶちてつきょう)

木曾郡上松町にある「鬼淵鉄橋」は、全長が93.8mあり、1913年(大正2)に小川森林鉄道が着工されたときに作られてから1975年(昭和50)まで、森林鉄道の鉄橋として使われました。王滝森林鉄道は、日本で最後まで運行された路線で、最終列車では鬼淵鉄橋の上でフィナーレが行われました。また、鬼淵鉄橋は、森林鉄道の橋としては日本最古、最大規模、構造材は輸入品ではなく八幡製鉄所で生産された国産の鋼材であり、それをういて日本人の土木技師三根奇能夫(1880～1950)が設計し完成させた純国産第一号のトラス橋と言われています。まさに知られざる名橋。森林鉄道が消えてしまった今、計り知れない意義を持つ文化遺産といえます。



王滝森林鉄道を描いた原田泰治の絵本

王滝森林鉄道が廃線になる前年の1974年(昭和49)、日本の原風景を描く画家、原田泰治が木曾谷を訪れました。実際に王滝森林鉄道に乗り、その取材をもとに創作された絵本が「さだおばさん」です。村人に愛された行商のおばさんと王滝森林鉄道の心あたたまる物語です。



講談社刊

電力王・福沢桃介の偉業達成の地

木祖村で雪解け水を集めて、一筋の流れとなった木曾川は、岐阜県境の手前で西へと流れを変え、変化に富んだ景観を現出します。この両県境にまたがる一帯は、電力王と呼ばれた福沢桃介が、壮大な夢を描き、日本の電力業のみならず、広く産業界を発展させるまでのサクセスストーリーの舞台となった場所です。

1868年(明治元)、維新の幕開けとともに生まれた福沢桃介は、慶應義塾大学在学中に福沢諭吉の養子となり、卒業後にアメリカへ留学。その後、31歳のときに利根川水力電気株式会社の発起人となり、42歳で木曾川での発電事業に着手します。

桃介橋(ももすけばし) 国重要文化財/国近代化遺産

この一帯で最も目を引くのが、電力王の名を冠した桃介橋です。1922年(大正11)9月に完成。木曾川の水力発電開発に力を注いだ大同電力が読書発電所(1923年完成)建設の資材運搬路として架けたものです。

全長 247m、幅2.7mで、三本の主塔と高い木製のトラスを備えたデザインが印象的で、木製の吊り橋としては日本有数の長大橋。中央を支える大階段から中洲に下りられるような工夫もあります。

一時は老朽化による廃橋の危機もありましたが、地域住民から保存の声があがり、1993年(平成5)に修復され生活道路として活躍する現役の橋です。国道19号から桃介橋を渡ると天白公園があり、モダンな洋館が見えます。洋館は桃介と貞奴が過ごした別荘で、現在は記念館として公開されています。



桃介橋

当時は、近代化に向け日本の産業界が一気に加速を遂げた時代で、動力源としての電力への期待も高まりつつありました。

そこで桃介は、水量が豊富で落差の大きな木曾川に目を付け、1919年(大正8)に竣工した賤母(しずも)発電所を皮切りに、わずか7年間で7つもの発電所を完成させました。桃介はまた、日本の女優第一号の川上貞奴さだやっことのロマンスでも知られます。二人はしばしば南木曾町にある別荘に長期逗留していました。

木曾川開発について、桃介が語ったこと

「木曾川は、上流に貯水池が出来る。途中非常な急勾配があつて水路式発電所が出来る。一番終ひにはダムが出来る。御料林であるから水源は千古に尽きない。而も大阪名古屋のマーケットに近い。恐らく日本の水力地点として、これに越すものはなからう。これを擇んだのは私の卓見で大成功と言へるが、工事を始めるとなると無鉄砲に早くやって、矢張り株主に迷惑をかけたやうなことで、功罪相償って差引き何も残つておはしない。」

—『福澤桃介翁伝』

読書(よみかき)発電所 国重要文化財

桃介橋の下流には、桃介が1923年(大正12)に完成させた読書発電所があります。水路式発電所として完成当時は国内最大出力を誇り、半円形の窓やレリーフをしつらえた本館は文化的価値が認められ、平成6年に国の重要文化財に指定されました。これは発電施設として、また稼働中の施設としては初の指定でした。同時に指定された柿其水路橋は、桃介橋から5kmほど上流の柿其川に架かるコンクリートの迫力あるアーチ橋で、上部に水路を渡しています。読書発電所へ水を運ぶために造られ、現存する第二次世界大戦前の水路橋の中では最大級だとか。ここでもまた、桃介の夢の大きさに出会うことができます。



読書発電所



柿其水路橋

第6章

木曾の暮らし、
風土、宗教(御嶽山信仰)



木曾の食文化 木曾の伝統料理・郷土食

2013年(平成25)12月、ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食;日本人の伝統的な食文化」。現在では、「海外における日本食レストランの増加」や「訪日外国人観光客からの郷土料理を食べることへの期待」など、世界からも和食は注目されています。

農林水産省では、2019年(令和元)「うちの郷土料理～次世代に伝えたい大切な味～」全国の郷土料理の調査と郷土料理のいわれ・歴史やレシピ等、また、郷土料理を生んだ地域の背景等を次世代に継承する目的でデータベース化が推進されています。



構成文化財③7 食文化 木曾地域全般

てうちそば 手打ちそば

■基本データ
指定 県選択無形民俗文化財

冷涼な気候で、米や小麦が栽培しづらい高冷地の農産物として育てられてきたのが「そば」でした。朝霧のかかるような高冷地では、霜に弱い蕎麦を霧がやさしく守ってくれるため美味しいそばができます。そば切り(細い麺状のそば)発祥の地としても有名で、一本棒・丸伸ばしという古くから伝わるそば打ち方法です。

日本遺産木曾路 構成文化財

③蕎麦切り発祥の里……………2章-27P参照

そばの歴史

定勝寺の古文書、番匠作事日記・1573年～1577年(天正元～天正5年)に「振舞ソバキリ」金永、「ソバフクロツ千淡内」ほかに強飯(おこわ)、清酒、豆腐、白米など記されています。大桑村の定勝寺の仏殿修理工事にそば切りを振る舞ったという記録が残っています。これは歴史的に一番古い史実とされています。

1706年(宝永3)の「風俗文選」によると、本山宿から「そば切り」は全国各地へ広まったとされています。また御嶽山修験者の携帯食として重宝された「そば」は開田高原の特産品でした。

すんきそば

「すんき漬け」を温かいそばの上に乗せたものが、すんきそば。

そばつゆの出汁、そばの旨味、すんき漬けの酸味と旨味が絶妙に絡み合った、木曾地方ならではの昔から食べられている郷土料理です。



木曾地方に古くから伝わる郷土そば、「すんきそば」



「とうじそば」

開田高原「とうじそば」

開田高原では「とうじそば」という独特の食べ方の蕎麦があります。御嶽山麓の寒村で昔から来客に振る舞われたお蕎麦です。具とつゆが入ったお鍋に、とうじ籠に入れた蕎麦をひたし、蕎麦を温めて食べます。鍋にくぐらせて食べるもので、風情があります。

すんきづけ

すんき漬け

■基本データ

- 発祥 木曾地方
 成立時期 未詳
 指定 県選択無形民俗文化財「長野県味の文化財」(1983年)
 インターナショナルスローフード協会「味の箱舟」(2007年)
 農林水産省「地理的表示保護制度(GI)」に
 「すんき」として登録(2018年)

赤カブの葉を塩を使わずに乳酸発酵させて作る木曾地方の伝統的な漬けものです。通常の漬けものは塩漬けした後に乳酸発酵させるものがほとんどですが、木曾地方では「米は貸しても塩は貸すな」といわれるほど塩が貴重だったため、乳酸発酵のみで作られました。

すっきりとした酸味があり、単に「すんき」ともいわれます。カブ菜の豊富な繊維質による整腸作用によって、便秘が解消され、美肌効果をもたらすといわれ、植物由来の生きた乳酸菌発酵食品であり、健康栄養食品として注目されています。

原料となる赤カブには、王滝村の王滝カブ、木曾町開田の開田カブ、木曾町三岳の三岳黒瀬カブ、上松町の吉野カブ・^{あしじま}芦島カブ、木祖村の細島カブと6種あり、いずれも信州の伝統野菜に認定されています。

すんき漬けは、冬季限定の漬けもので秋の終わり頃から冬にかけてつくられます。かぶ菜は寒くなるとおいしくなり、乳酸菌が活動しやすいといわれることから、霜が降りるのを待ってから収穫します。数十年前は、囲炉裏のまわりですんきを仕込み、寒さが厳しい木曾地域では、凍ったすんきを桶から取り出して食べていました。



木曾町あげての地域おこしに活用

木曾町は2011年(平成23)、「すんき」に代表される木曾の地域資源を科学的に研究、その資源を活かした地場産業を研究するため、御料館(旧帝室林野局庁舎)内に地域資源研究所を立ち上げました。すんき乳酸菌の保護、すんきから分離される乳酸菌を中心にした素材研究、各種企業を通じて商品開発を行っています。

すんきを活かした商品としては、乳飲料やドレッシングなどが開発されています。

世界的な評価

すんきと材料である赤カブが2007年、イタリアに本部がある「インターナショナルスローフード協会」より、「味の箱舟」に認定されました。「味の箱舟」とは、世界各地で消滅の危機にある優良な食品を記録し、味覚を再発見すると同時に未来へ届けていくという食の遺産のことをいいます。日本では15品目目にあたります。

基本的な作り方

赤カブの葉を長いまま、あるいは刻んで熱湯につけた後、「種すんき」といわれるすんきを入れて、乳酸発酵させます。種すんきには、乾燥すんき、冷凍すんき、すんきの漬け汁のほか、ヤマブドウ、ズミ、ヤマナシなどの果実を叩いてつぶし、発酵させたものなどが単独、または併用して使われます。

乳酸発酵には温度管理が非常に重要なので、保温性のある木桶を使うか、ポリ桶の場合は新聞紙や風呂敷などで保温します。加温しすぎると、腐ってしまい、保温が弱いと乳酸発酵せずに酸味が生まれません。

8月頃に播種、10月下旬から11月上旬に収穫し、その後漬けこみ、2月下旬頃までに食べ頃となります。

- ①赤カブのカブの部分を取り、茎と葉を洗って水気を切り、さつと茹でます。カブは酢漬けにし、株の根元は刻んで茎菜とともに茹でます。
- ②桶の中に湯通ししたカブ菜とすんき種を交互に加えます。
- ③最後に手で押し込み、桶のまわりを新聞紙や風呂敷などで包み、一晩おきます。
- ④翌日、べっこう色になっていたら、成功。
- ⑤冷暗所に置いて、1週間位後から食べられます。

木曾の朴葉巻

■基本データ

発祥 木曾地方

成立時期 平安末期

指定 県選択無形民俗文化財(2001年)

木曾地域の名物の一つで、古くから子供の成長を祈り、端午の節句(木曾地域ではひと月遅れの6月5日)の祝いの日につくります。

「朴葉巻」は、米の粉に熱湯を入れてよくこね、中にあんを入れて、朴の葉で包んで蒸したもので、「木曾の朴葉巻」として長野県選択無形民俗文化財に指定されています。

端午の節句といえば柏餅ですが、標高が高い木曾地域には柏の木がなく、代わりに、朴の葉を使うようになりました。

昔からそれぞれの家庭には朴の木があり、6月初旬頃になると、朴の若葉が伸びて大きく広がるので、ものを包むのに適するようになります。小枝の先に5、6枚の葉がついており、切らずに繋げたまま1枚毎に餅を包みます。

餅の中には、小豆あんやつぶしあんを入れ、新しい井草や藁を用いて葉をしぼります。蒸しあがった朴葉巻は、さわやかな若葉の移り香が特徴的な祝い餅です。

今では、ゆず味噌あん、白みそ胡桃^{くるみ}あんなどもあり、各家庭や店で工夫され、町中のあちこちの店でも「朴葉巻」がたくさん並び、木曾地域独自の初夏の風物詩となっています。



朴葉巻の歴史

朴葉巻の由来は、平安末期に信濃源氏の一族だった木曾義仲の時代に、戦に出る際に朴の葉を利用して味噌や米を包んだのが始まりだといわれています。

また、読み方については木曾地域でも「ほおば」と「ほうば」に分かれるところですが、学術的な送り仮名は「ほおば」で、発音は「ほうば」が一般的のようです。

朴の木は、モクレン科の落葉高木で、山地で見られる樹木の中で、最も大きい葉と花を付けます。大きい葉は長さ40cm、巾25cmもあり、朴葉は防腐効果をもつことから古くから食べ物を包むことにも使われていました。

「朴葉メシ」、「朴葉寿司」、「朴葉味噌」など朴の葉を利活用した伝統料理が数多く残されています。いずれの料理も、朴の葉の香りが食欲をそそります。



6月頃の朴葉の若葉

ごへいもち 五平餅

食文化

木曾・伊那地域のほか、岐阜県、
富山県、愛知県、
静岡県などの中部地方

■基本データ

成立時期 江戸時代中期頃には既にあった

指定 県選択無形民俗文化財(1983年)



奈良井宿独特な形をした五平餅
ゴマとみそで仕上げた味噌だれ味

五平餅は、半搗きにしたうるち米を串に刺し、味噌や醤油ベースのタレをつけて焼いたもので、木曾・伊那地域のほか、岐阜県、富山県、愛知県、静岡県などの中部地方の山間部に伝わる郷土料理です。

様々な形のものがあり、「わらじ型」「小判型」「筒型」「団子状」など細かく分けると10種類ほどあるといわれています。由来は、形が神道の祭祀で捧げられる「御幣」に似せて供えた、五平(若しくは、五兵衛)という人物が飯を潰して味噌をつけて食べた、約400年前に美濃の国から飯田へ峠越えして来た老人が伝授した、その老人の名が「五平」だったなど様々な説があります。



上松町の五平餅 小判型で味噌だれ

五平餅の歴史

起源は明らかではありませんが、江戸時代中期頃には既にあったといわれています。

五平餅文化は、「塩の道」沿いに分布しており、塩尻市が境目となっています。北信地域はおやき文化が根付いており、五平餅は木曾地域や南信地域を中心に食べられています。伊那地域は暖かく竹藪が多いため、米を刺す串は竹串を使うことが一般的です。

木曾地域では、以前は木曾五木のヒノキの串を使っていたといわれており、自然環境の相違がそこから窺えます。

昔は米が貴重だったため五平餅はハレの日の料理として食べていたもので、当時は、五平餅は大変なご馳走でした。あまりに美味しくて「1人で5合は食べてしまう」という意味で、その美味しさを「五平五合」と表します。



木曾地域ではヒノキの串が使われることが多かった
味噌を塗って焼いた団子状の五平餅

タレは、各地域や家庭によって様々ですが、醤油・味噌ベースのタレをぬったり、季節によって、ごま、山椒、柚子などを加えたりもします。信州の特産品である胡桃くるみをすりつぶしてつくる「胡桃味噌くるみ」は代表的な味で、素朴な味付けが信州らしい一品です。

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

おおびら(大平)

食文化

■基本データ

発祥 木曾地方

成立時期 江戸時代中期頃には既にあった

昔から宿場の料理として食べられ、冠婚葬祭などの際に大鍋で作られ振る舞われてきた郷土料理です。

「おおびら」とは「大平」とも書きますが「大平」すなわち「大いなる大地」を意味し、大地の恵みである数種類の野菜を集めて煮込んだものと解釈されています。

鶏肉、里芋、しいたけ、こんにゃく、人参、大根、しらたき、ごぼう、油揚げ、ちくわなどを用いて作られる煮込み料理の一つで、乱切りや角切りにした具材を鰹節や昆布の出汁で煮込み、醤油、酒などで調味します。



祝い事の際には末広がりの形に切る三角形、仏事の際には四角に切り赤い人参を入れないなど、祝い事、仏事により材料の切り方が変わります。

笹巻き

食文化

■基本データ

発祥 木曾地方

成立時期 江戸時代中期頃には既にあった

いわゆる笹団子で、細長い団子にくるみやあんこが入っている素朴なお菓子です。

道の駅木曾福島では地元のおばあちゃん達手作りの「笹っ子」がお土産に人気です。



みたけずし

三岳寿司

食文化

■基本データ

発祥 木曾郡木曾町三岳地区
成立時期 大正時代

「三岳寿司」は、鮭、大根、人参を糍と塩・酢・砂糖で漬け込んだ発酵食品です。木曾町三岳地区の郷土料理で、年末に作ってお正月に食べるごちそうです。

三岳寿司の始まりは、大正時代と言われています。木曾町三岳は、霊峰御嶽山の麓の村。御嶽山を信仰する人々が全国から登拝のために集まり、その際のおもてなし料理の1つが、この三岳寿司だったそうです。

イタドリ

食文化

■基本データ

発祥 木曾郡南木曾町
成立時期 不明

南木曾でイタドリを食べるようになったのは、南木曾に根づいた、ろくろ細工の職人である木地師たちが始まりです。

良材を求めて山を転々として歩いていた木地師は、いたどりをはじめ、さまざまな山菜を加工して美味しく食べる名人でもありました。

それから半世紀ほど経つうちに、だんだんとその新鮮な食感や美味しい食べ方が知られるようになり、土地に根づいた食材となっていました。

イタドリは、漢字で書くと「虎杖」。茎に「虎」の毛皮のような模様が現れること、大きくなると「杖」にしても丈夫なくらいであることから、この名前があるそうです。イタドリの若葉を摘んで傷口に当てると血が止まり、痛みが取れるので「痛み取り」からイタドリの名前がついたとも言われています。

イタドリの別名や方言はものの本によると500以上もあるとか。スカンポ、サシボ、ゴンパチなど、それだけ昔から親しまれてきた植物なのでしょう。

特に、春4～5月に採取できる柔らかい新芽は、煮物や炒めものにして美味しくいただけます。

まんねんすし

王滝村の万年鮓

■基本データ

- 発祥 木曽郡王滝村一円
- 成立時期 未詳
- 指定 県選択無形民俗文化財(2000年)



王滝村の万年鮓 写真王滝村教育委員会

長野県伝統的郷土料理 王滝村の行事食・ハレの食

王滝村の万年鮓は山の中ならではの食材岩魚を使った馴れ鮓です。正月料理・行事食として発達しました。

岩魚(他の川魚でもよい)の内臓を取り、多量の塩で漬け込み、食べる1ヶ月前に塩出し、酢飯を詰め、樽の中に重ね並べ重石を置いて発酵させて作ります。

その他の郷土食

朴葉寿司

田植えの時に香りが良くなる朴葉には殺菌効果があり、身近な材料で作ることができるので、忙しい田植え時のお弁当にも使われました。

木曽谷と下伊那南部の山村では、朴葉飯、朴葉強飯、朴葉結び、朴葉寿司、朴葉巻などがつくられました。

木曽の地酒

木曽路では古くから酒造りの文化があり、4カ所の酒蔵があります。なかでも「木曽路」「七笑」「中乗さん」「木曽のかけはし」は木曽を代表する地酒です。また、木曽のどぶろく特区で造られた「木一」「駒の夕映え」「男滝」「女滝」も木曽らしい逸品といえます。

あかたつ

信州の伝統野菜に認定された、南木曽特産の赤茎里芋の茎の漬物です。明治時代には栽培されており、中京方面から伝播したと思われ、現在は木曽、上下伊那で栽培されています。茎が赤紫色の唐芋の葉柄を塩漬けや酢漬けにして食用にしています。皮をむき、塩漬けした後、甘酢や調味液で漬け、しょうが汁をかけて食べます。地元では産後見舞い品として使われています。島崎藤村の小説「家」に「あかたつ漬け」の記載が見られます。

そまびとじる 杣人汁

山で木を切る人(杣人)が、山で暖をとりながら食べた料理です。現在は入れる具も多くなりましたが、そば粉と山のキノコが主体の汁物です。

御嶽山とその信仰

きそおんたけさん

木曽御嶽山

王滝村

木曽町

■基本データ

標高 最高峰 剣ヶ峰 3,067m

所在地 木曽郡木曽町・王滝村、岐阜県下呂市・高山市

種類 成層火山



きそおんたけさん

木曽御嶽山（御岳山とも表記される）は標

高3,067mの独立峰。北から^{ままとだけ}継子岳（2,859m）、^{まりしてん}摩利支天（2,959m）、^{ままはだけ}継母岳（2,867m）、^{けんが}剣ヶ^{みね}峰（3,067m）、王滝頂上（2,936m）。

登山口は、JR木曽福島駅を起点に長野県側には、黒沢・王滝・開田の3つがあります。

剣ヶ峰が頂上とされ、御嶽神社奥社が^{まつ}祀られています。山頂部には一から五までの火山湖があり、総称して「五峰五池」とも呼ばれます。二の池は日本最高所にある湖と言われ、四の池周辺は高山植物の宝庫と言われています。山岳信仰の対象であり、富士山や立山、白山と並んで古くから庶民の信仰を集めました。現在も全国に100万人とも200万人とも称される信者がおり、夏季には10万人以上の信者が登拝します。

御嶽山噴火災害とその後

2014年9月27日に起きた御嶽山の噴火では、死者58人、行方不明者5人という戦後最大の火山災害となりました。当時、登山者の救助・捜索は困難を極め、警察、消防、自衛隊など延べ15,000人による19日間に及ぶ捜索活動が行われています。（その後、2015年に長野県による9日間の捜索活動実施）

この噴火災害では、噴火予知とその情報伝達、火山防災に対する意識の欠如という点で課題を残しています。御嶽山を「おやま」として崇め奉り、心の拠り所として生活の糧としてきた私達にも広く影響と課題を残しました。地域に暮らす私達は、犠牲者を悼み、哀悼の意を捧げ続けるとともに、二度と同様の災害が生じぬよう、噴火災害の教訓を後世に伝えていく必要があります。

※ 2022年（令和4）8月、御嶽山ビジターセンターが開所しました。写真や映像により噴火時の様子を伝えるとともに、噴石により壊れた山小屋壁面を展示するなど、木曾に訪れる人達に噴火災害を伝承しています。

御嶽山は一部区画の入山が規制されており、登山前の詳細確認が求められています。

入山規制についての問合せ先：

王滝村役場 総務課／TEL 0264-48-2001

木曽町役場 総務課／TEL 0264-22-3000

御嶽信仰

御嶽山は霊峰として名高く、神の座す山として古くから信仰の対象となってきました。麓の人にとっては毎日のように見上げる故郷の山であり、開田・三岳・王滝の小・中学校歌には「御嶽」が入っています。

全国各地に御嶽と名のつく山はありますが、「おんたけ」と呼ばれるのは木曾御嶽山だけとされます。

悠然とした山姿からおんみたけざおうごんげん王御嶽座王権現と呼ばれ、その頭がつまって「おんたけ」となり、近世になり木曾御嶽信仰が全国的に拡大されるとともに、これが公称となりました。「山は富士、嶽は御嶽」と呼ばれることもあります。



御嶽山、開山の歴史

御嶽山の開山は諸説あり、702年(大宝2)に信濃の国司・高根道基が開いたと伝わります。1161年(永暦2/応保元)には後白河法皇の勅使が登山参拝をしたと言われ、古くから信仰登山が行われていたことが分かります。当初は修験道場として栄え、平安・鎌倉・室町と時代がくだるにつれて民間信仰として集団登拝する風習が生まれたと考えられています。

当時の登拝可能な山では、富士山に次ぐ名山で、中部日本の山岳が見渡せ、西方遠くには伊勢の海を望むこともできる地理的位置は、神秘的な霊場としての条件を備えていたと言えます。

1784年(天明4)には尾張の行者・かくめい覚明によって黒沢口が開かれ、限られた修験者だけでなく一般の人々も水行を行えば登山できるようになりました。

1794年(寛政6)には武蔵国の行者・ふかん普寛が王滝口登山道を開き、御嶽講による集団登山を指導したため、御嶽信仰は全国的に広まりました。

講(講社)とは、信仰を目的とした民間結社で、御嶽を崇拝し信仰登山を行う御嶽講は、幕末には大小300を超えたとされます。

なお、ふたりが開山した登拝ルートにちなみ、西日本に多い覚明系信者は黒沢口から、関東に多い普寛系信者は王滝口から登拝しています。



御嶽山登山口(田の原)

●御嶽講の登拝

御嶽講では比較的一般の人でも参加しやすい登拝を主催しています。会員への募集だけでなく、地域の神社や寺の貼り紙等でも募集しており、多くは会員でなくとも参加できます。

行程は講によってさまざまですが、多くは7月下旬～8月の盆前に1泊2日から2泊3日で行われます。

ご来光を拝むため、未明に登り始めることが多い（夜の暗闇が死の世界で、朝日を浴びて生の世界に蘇るとされる）。

参加するときの装束は、平服の上に講社の法被をはおり、たすきをかけ、鉢巻を結ぶ程度（講から貸与されることがほとんど）。

一般的な行程は以下のとおり。

- ①各講社の契約旅館に泊まる。
- ②黒沢口・王滝口の里宮に参拝する。
- ③清滝か新滝で行者や有志が水行をする。
- ④七合目の田の原までバスで行き、ここから3時間ほどかけて山頂を目指す。登るときは金剛杖を手に「サング、サング（懺悔懺悔）六根清浄」と声をかけながら歩く。
- ⑤頂上にある奥社を参拝する。時間が許せば三の池に足を伸ばし、あらゆる病やケガに効くという御神水をくむ。
- ⑥下山。往路では緊張した雰囲気があるが、下山後は精進落しとして酒や食事がふるまわれ、なごやかになる。



構成文化財⑬

自然・景勝地／文化

王滝村

木曾町

きそおんたけさんれいじんひぐん

木曾御嶽山霊神碑群

■基本データ

- 場所 木曾御嶽山周辺一帯
- 所在地 木曾郡木曾町・王滝村
- 種類 霊神碑、2万基以上

御嶽山一帯には、2万基を超える石碑があります。これらの石碑群は「^{れいじんひ}霊神碑」と呼ばれるもので、お墓ではありません。御嶽山の山岳信仰において信仰者の^{れいこん}霊魂は死後、御嶽山（おやま）を安住の地とするとされています。

御嶽講の人々により死後魂が御嶽に還るよう願って建てられた石碑群。御嶽信仰では、「御嶽に生まれ御嶽にかえる」との考えから、御嶽のふもとに「霊神碑」を建てて先祖の霊を慰めます。

木曾御嶽本教では碑を造れない信者のため、三岳に^{それいでん}「祖霊殿」を建立し、毎年、慰霊大祭^{さいこう}を齋行しています。

●親しまれた覚明行者

修行の途中、喉が渴いた覚明行者が地元の人に水をたのむと、ぬるい水が出てきた。訳を尋ねたところ、近くに水がないため遠くまで汲みに行っているという。気の毒に思った覚明が錫杖で地面を掘ると水が湧いた。いまでもこの水は「覚明さまの水」と呼ばれ使われている。（上松町池島）

覚明が「アカマツの苗が育てば必ず稲ができる」と村人に教えた。そこで苗を植え、それが育ったところで開田し、村人たちは夢にまで見た白米を食べることができた。感謝した村人たちは西野に「開田の碑」を建てて、覚明の功績をたたえている。（開田西野）

当時、一般信者の御嶽登拝は許可されていなかった。覚明はその取り締まりに屈せず多くの信者をつれて登拝を続け、1786年（天明6）に御嶽山頂の二の池付近で亡くなった。その後も信者たちは登拝をやめず、やがて信者がもたらす経済的利益に気づいた庄屋たちも嘆願に加わり、ついに1792年（寛政4）に一般信者の登拝が許可された。

おんたけじんじゃさとみや

御嶽神社里宮

御嶽神社 里宮(黒沢口)

■基本データ

- 住所 木曾郡木曾町三岳棚山
- アクセス JR「木曾福島駅」から車で約20分、
伊那ICから45km60分
- 連絡先 御嶽神社社務所／TEL 0264-46-3076



マップQR



御嶽神社 里宮(黒沢口)

- 木曾御嶽神社: 黒沢口=奥里三社
 - 奥社本宮(木曾郡木曾町剣ヶ峰頂上)
 - 里社本社(木曾郡木曾町)
 - 里社若宮(木曾郡木曾町三岳)

御嶽神社 里宮(王滝口)

■基本データ

- 住所 木曾郡王滝村東3315
- アクセス JR「木曾福島駅」から車で約20分、
伊那ICから45km60分
- 連絡先 TEL 0264-48-2660



マップQR



御嶽神社 里宮(王滝口)

- 木曾御嶽神社: 王滝口
 - 奥社本宮・王滝口(長野県木曾郡王滝村御嶽山頂上)
 - 里宮(長野県木曾郡王滝村)

室町時代後期頃から信仰を集め、江戸時代には御嶽山頂に祀られた御嶽山座王大権現おんたけさんざおうだいごんげんの里社として全国にその信仰が広まりました。

御嶽神社の里宮は、嶽麓がくろくの黒沢田中に本社すくなひこなのみこと(祭神少彦名命)と若宮おおあなむちのみこと(祭神大己貴命)があり、王滝上島に里宮くにのとこたちのみこと(祭神国常立命・少彦名命)があり、ともに御嶽神社と称していますが、江戸時代は黒沢本社、里宮は安気大菩薩ともいい、王滝里宮は王御嶽権現(または岩戸権現)と称していました。

本社には八幡大菩薩ほんじあみだによらい(本地阿弥陀如来、脇侍毘沙門天、弁財天)若宮は桶安気大菩薩を祀っており、中世においては御嶽座王権現三十八社のひとつに数えられていたものであり、それぞれ若宮と本社の祭神に配したものです。

両社とも時代ははっきりしませんが木曾氏の創建であるらしい。本社は、1554年(天文23)に木曾義在・義康父子によって再建されたもので、父子の奉納した棟札と鰐口むなふだ わにぐちが現存しています。今の社殿は1873年(明治6)関東巴講社により造営されたものです。若宮は、1385年(至徳2/元中2)木曾家親(家信)によって再建されたもので、同氏寄進の鰐口と、1565年(永禄8)木曾義昌等が奉納した三十六歌仙絵馬額とがあり、何れも社宝となっています。

御嶽神社の祭日は、古来6月12・13日でしたが、1872年(明治5)太陽暦採用により、7月18・19日に改められました。

●御嶽信仰の実情について

- ・御嶽神社はもともと地元の神社として室町時代からあり、御嶽山信仰の拠点として建てられたわけではない。
- ・18世紀に覚明や普寛によって登山道が開かれるまでは、御嶽山は庶民が足を踏み入れることの許されない特別な場所だった。
- ・御嶽山で修行を積んだ行者たちが、御嶽山信仰を全国に布教することで、信仰が広まった。
- ・江戸後期になると関東一円から登拝客が集まるようになった。当時は講社を代表する人が皆の分も代拝することが多かったようだ。その後、経済的に豊かになると集団登山が定着した。
- ・近年では高齢化による後継者不足のため講を維持することが難しくなってきたため、それぞれの講が外の人を募って御嶽山にやってくるが増えている。ほとんどの講では宗教や宗派を問わず参加できる。服装や参拝の順序に細かい決まりはない。御嶽神社からそれぞれの講に注文をつけることもしていない。
- ・7合目まで車で行けるので、登拝には多くの人々が参加しやすい。
- ・例年7月末から8月半ばの週末は集団登山客で宿が一杯になるが、平日やそれ以外の季節であればそれほど混雑はない。

（御嶽神社宮司 滝和人氏（第22代）・談）

あこたまる

阿古太丸の伝承

きたしらかわすくえしやうしやうしげより

平安時代、京都に住む公卿・北白川宿衛少将重頼は子どもに恵まれず、御嶽山に祈ったところ男女ふたりの子を授かった。女の子を利生御前、男の子を阿古太丸と名づけたが、母親は病死した。重頼は白萩御前を後妻に迎えたが、この継母と阿古太丸がうまくいかなかった。阿古太丸は奥州の親戚を頼って京より木曾路をたどり、御嶽山に参拝しようとしたとき板敷野で病に倒れ、15歳で亡くなってしまった。

京にいた重頼は、夢枕に立った阿古太丸の後を追ひ、利生御前と旅立ったが、木曾で阿古太丸の死を知った利生御前は墓前で自害してしまう。重頼は、ふたりの霊を御嶽大権現のもとへかえすと、自らも後を追った。

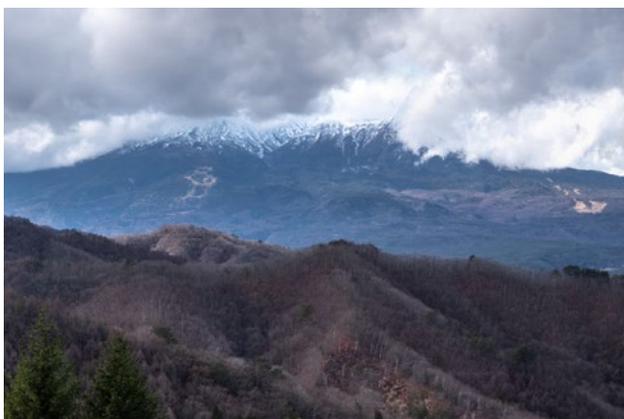
この話を知った天子は重頼父子を御嶽大権現のそばに祀り、信濃の国のすべての国司が御嶽に登って供養をした。いまも木曾福島からただ1箇所、御嶽山が見えるとされる。板敷野の隅には、阿古太丸を伝える小さな塚が残っている。

なお、木曾町には別の言い伝えもある。重頼は利生御前とお供を従えて山頂に向かったが、8合目で御前を見失い、9合目で霧にまかれながらなんとか参拝を果たした。そのとき重頼が扇を落とした場所を扇ヶ森、下山の際に泊まったところを白川といい、後に人々は白川権現社を建てて重頼たちを祀ったという。

さらに玉滝村では、阿古太丸の継母は子供の霊をとむらうために玉滝に身を潜めて生涯を過ごしたとされ、村人たちは阿古太丸の霊を継子岳に、継母の霊を継母岳に祀ってとむらったという伝説が残されている。

御嶽信仰への復帰運動

1869年(明治2)、維新政府の政策で、仏教(宗教)と神道(神社)の混交を禁止し分離する方針によって、御嶽権現の称を廃し、仏体を除いた御嶽神社と、民間信仰団体である講社の2つの信仰形態がとられるようになりました。しかし、戦後、御嶽神社を主体とした本来の御嶽信仰への復帰運動が起こり、登拝を重視する黒沢御嶽神社を中心とする「木曾御嶽本教」ができ、総本庁が黒沢に設置されました。



地蔵峠

史跡
木曾町



長野県木曾郡木曾町新開

御嶽山を眺めるビューポイントです。木曾福島方面から開田高原に向かう途中にあり、展望台が設置されています。

飛騨街道最大の難所であった海拔1,335mの峠道は、1940年(昭和15)までに唐澤滝上

まで完成しましたが世界大戦で中断され、戦後になって車道が完成しました。

地蔵峠一帯の尾根には安山岩の溶岩が露出しており「地蔵峠火山岩類」と呼ばれ、100万年ほど前に西野本谷奥県境にそびえる鎌ヶ峰付近で噴火した時の溶岩といわれています。



御嶽山・古道遊歩

史跡
王滝村



連絡先: 王滝村観光案内所 / TEL 0264-48-2257

「御嶽古道」は歴史が香る山麓の道です。清流のせせらぎを聞きながら日ごとに代わる樹木の色、可憐な山野草、生きものたちに出会う自然の中で心も身体も生き返るよう。御嶽

山麓の変化に富んだ、トレッキングが楽しみな遊歩道です。信仰登山などで歴史的に歩かれてきた道を軸として、トレッキングが楽しめる6つの遊歩道コースが整備されています。

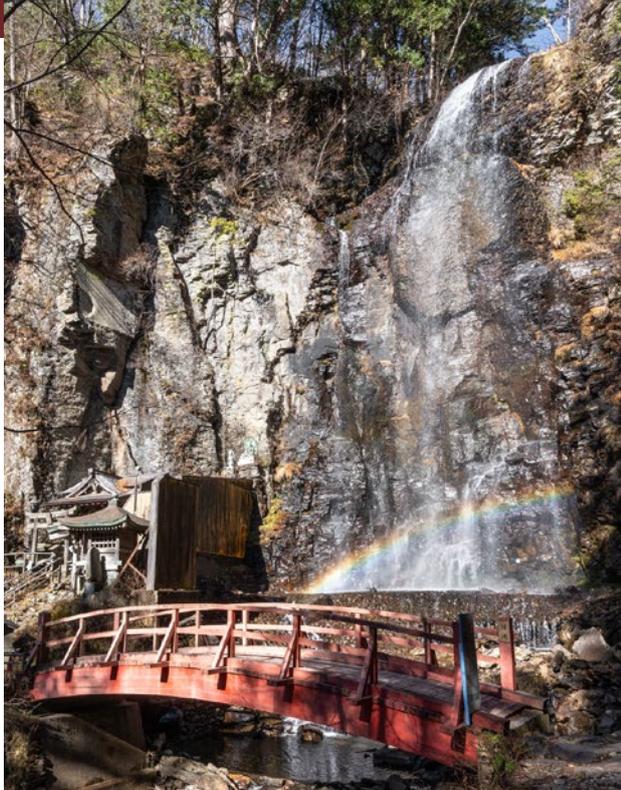
きよたき しんたき
清滝 ⑳ **新滝** ㉑

■基本データ

- 住所 木曾郡王滝村
- アクセス JR「木曾福島駅」から車で約50分
- 連絡先 王滝村観光案内所/TEL 0264-48-2257

里宮から御嶽山へ向かう道を辿り、三合目に現れるのが「清滝」と「新滝」です。

江戸時代、水行だけの軽精進でも御嶽登拝ができるようになり、庶民の信仰も集め、木曾谷を訪れる人を増加させました。

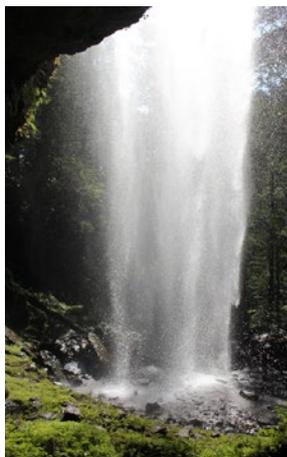


清滝

深い森を背景に宿す荘厳な谷合から轟音をとどろかせる「清滝」は、古くから御嶽山を信望する行者が御山に登拝する際に必要とされる100日間の精進潔齋する行場でした。

車道からも姿が望める滝で、往時から信者が最も滝行を行った滝であり、清滝不動明王、清滝弁財天が祀られています。

滝の高さは約30m、水量も豊富で、真冬には氷柱が出現しさらに荘厳な赴きを魅せます。



新滝の裏側



冬の清滝

「新滝」は「清滝」から尾根一つ越した深い森の中にあり、いまなお御嶽開山当時の雰囲気を残しています。

流れ落ちる滝の裏側に小さな岩祠があり、新滝不動明王、八大龍王が祀られ、修行全国から集う行者が岩窟に籠り、御嶽山登拝の前に必ず心身を清め、修行した神聖な場所です。かたわらには行者のこもる洞窟、長期修行のための行小屋もあります。

冬になると滝の流れが繊細な氷柱となって、一層神秘的な表情に変わります。

新滝

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教（御嶽山信仰）

第7章
その他
（観光宣伝など）

ひやくそうがんそのひ

百草元祖の碑

■基本データ

- 住所 木曽郡王滝村此の島100-1
- アクセス JR「木曽福島駅」からバスで約40分
伊那ICから車で約60分
- 連絡先 王滝村観光案内所／TEL 0264-48-2257
長野県製薬株式会社／TEL 0264-46-3003

昔、百草の伝承は全て口伝でした。しかし記録は必要だと村人が計らい、どうい経緯で伝わってきたのかをしっかりと残すために作られたのが「百草元祖の碑」です。

元は御嶽神社旧参道にあったものを長野県製薬株式会社敷地内に移築されました。

百草元祖の碑には嘉永2年(1849)、胡桃澤弥七と小谷文七が普寛行者の遺法(過去から現代に引き継がれている法)を共に謀りて“百草”を作るに始まる」と記されています。



百草元祖の碑の拓本



昔の百草は竹の皮に包まれていたそうです



百草本舗の額

■長野県製薬株式会社
御岳百草丸薬制部／小谷宗司さん



「百草」は、三岳黒沢口を開いた尾張の行者・覚明と、王滝口を開いた武蔵国の行者・普寛によって伝授されたといわれ、御嶽信仰の普及とともに、「御神薬」として行者たちによって全国の信者に配布されるようになったと伝えられています。

御嶽山で採れるキハダの内皮(黄柏:オウバク)から抽出されたエキスが「百草」で、オウバクは苦味健胃薬で消化を助け、胃腸の調子を整えるとともに食べ過ぎ、飲みすぎ、胃のもたれ、食あたり、眼病、捻挫、打撲など様々な症状に用いられ、人々はこれを「百種類の薬草を使ったと同じくらいの効果がある」あるいは「百の病を治す万能薬」として貴び、「百草」と名付けたともいわれています。

現在では御嶽山に生息する数多くの薬草を調合し、さまざまな伝承薬が作られています。

百草丸の販売と工場見学

長野県製薬株式会社
および
日野製薬株式会社
では
製造工程の工場見学
が可能です。



*工場見学はそれぞれの製薬会社様にお確かめください。
また、木曽郡内の各お土産店などで百草を販売しています。

第7章

木曽の自然・景勝地 木曽八景と溪谷美



第1章
日本遺産とは
日本遺産木曽路

第2章
江戸時代以前の
木曽の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曽路11宿

第5章
明治以降の木曽檜活用、
森林鉄道

第6章
木曽の暮らし、風土、
宗教（御嶽山信仰）

第7章
その他
（観光宣伝など）

木曽八景

木曽八景は、近江八景になぞらえて尾張中納言宗勝のころ（1743年前後）、尾張藩の書物奉行をしていた松平君山が木曽路を訪れ作ったともいわれ、一説には尾張の俳諧師、横井也有ともいわれています。木曽の北部より次の八景があります。それぞれ、風景画とともに歌が詠まれています。

徳音寺晩鐘 徳音寺の晩鐘（とくおんじのばんしょう）

木曽義仲の菩提寺「徳音寺」。夕暮につく暮れ六つの鐘の音が晩秋の山々に響く風情は郷愁と旅情をかきたてます。

「遠近ハ聞も さためぬ山風の
さそふまなる 入相のかね」

徳音寺（木曽町）
住所：長野県木曽郡木曽町日義2326番地6

徳音寺は1168年（仁安3）、義仲が母小枝御前を葬った寺です。境内には義仲・巴御前らの墓があります。四季を通じて趣ある様子が楽しめますが、春には桜の美しい場所としても有名です。付近には義仲の資料を展示している義仲館（徒歩すぐ）などもあります。

木曽七福神では中山道各宿場町ごとに福の神をお祀りする「木曽七福神霊場」が開設されています。徳音寺では毘沙門天の御朱印を拝受できます。

御嶽暮雪 御嶽の暮雪（おんたけのぼせつ）

三岳・王滝・開田にまたがる古くからの信仰の山、御嶽の五・六月頃の残雪が薄紫色の山肌に美しい模様を描き情緒があります。

「志なのちや むかはぬ不二のおもかげを
ここぞみたけの ゆきの夕はえ」

御嶽山（山麓周辺の地域）

標高3,067mの剣ヶ峰を主峰に、五峰五池を擁して雄大な裾野を広げる御嶽山。

古くから富士山、立山、白山などと並ぶ霊峰として知られ、多くの登拝者・登山者を迎えてきました。心のよりどころとして、また自然の恵み豊かな御嶽山は、敬いと親しみを込めて“おやま”とも呼ばれる木曽を代表する山です。

掛橋朝霞 棧の朝霞（かけはしのあさがすみ）

上松より4キロメートルの地点にある棧は、初夏のころの木々の緑、木曽川の藍、花崗岩のさまざまな形が朝もやの中にかすんで見える風景が一番よいといわれています。

「朝日影 にほえるみねは 猶晴れて
たによりかけむ きそのかけはし」

木曽の棧（上松町）
住所：長野県木曽郡上松町

かつては、危ういものの代名詞として古くから歌枕にも詠まれ、中山道一の難所と言われた場所。木曽川の絶壁に数百メートルにわたって架けられた藤づるで編んだ棧橋でしたが、現在は旧国道の下の石積みにわずかに街道の面影をとどめるに至っています。

寝覚夜雨 寝覚の夜雨(ねざめのやう)

堂々と流れる梅雨の木曾川にあって、寝覚の床が雨霧にしぐれる光景は神秘にして詩情あふれる美しさがあります。

「七とせの あとおや おもうたれか又
ねさめの床の 雨のよすがら」

寝覚の床(上松町)

住所:長野県木曾郡上松町

上松町周辺は、花崗岩地帯。その地形を木曾川の流れが削り、姿を現したのが寝覚の床です。花崗岩特有の割れ方が、大きな箱を並べたような不思議な造形をもたらしました。また明治以降は水力発電や用水の引水で木曾川の水面が低下し、岩の巨大さがより引き立っています。1923年(大正12)に国の名勝に指定され、現在は国定公園に指定されています。

風越晴嵐 風越の晴嵐(かざこしのせいらん)

上松町を眼下に見おろす風越山は、頂上周辺は見渡す限りのススキの原。緑の草山を夏風の吹き越していく様は雄大なながめです。

「吹くもまた あらしはよはき たえだえに
くもはれ残る 風越しの春」

風越山(上松町)

住所:長野県木曾郡上松町

風越山は典型的な里山で、江戸時代には、当時の山麓の様子が木曾八景に数えられました。草原を夏の風が吹き渡り、爽やかにそよぐ美しさを伝えたといわれます。しかし近代化とともに酪農家も減り、里山の需要がなくなってくると、木曾八景の美しさも失われていきます。かつて夏の風にそよいだ草原は雑木に覆われ、カヤの平の名残は山頂付近にわずかに残るのみとなりました。

駒ヶ岳夕照 駒ヶ岳の夕照(こまがたけのせきしょう)

木曾の各町村からながめられます。秋から春まで、白雪の駒ヶ岳連邦が、夕日に映えて赤紫色に照り輝くさまは幻想的な美しさです。

「おしめ人 入目を山の 名にしおふ
ひきゆく駒の すくる光を」

木曾駒ヶ岳(木曾路の各地)

「日本百名山」に数えられる中央アルプスの主峰。標高2,956mの山頂からは南アルプスや御嶽山、富士山も一望でき、高山植物や雲上の絶景は目を見張る美しさを呈します。

木曾谷の東に見せる険しい山容も印象的です。

小野瀑布 小野の瀑布(おののばくふ)

上松駅より約3キロメートル。中山道の名所であり、広重・英泉の合作による浮世絵「木曾海道六十九次」にも描かれています。落差は約20 m。昔よりこの街道で知られた名所ですが、今は昔の面影はあまり残っていません。

「名にたてる 木曾^{あさきぬ}の麻衣 そめなして
雲井にさらせ たきのしら糸」

小野の滝(上松町)

住所:長野県木曾郡上松町小野

国道19号線のすぐ脇に流れ落ちる滝です。1910年(明治43)には滝の上に鉄道が架けられました(中央本線)。この橋脚も表にはコンクリートなどを最小限にとどめ、石積みを用いて風情を醸し出しています。国道沿いには小さいながら駐車場があり、滝のすぐ側へ近づくことができます。葛飾北斎も「諸国瀧廻り」で描いています。

与川秋月 与川の秋月(よがわのしゅうげつ)

戦国時代の僧庵「古典庵」の故地から眺める月が、周囲の地形と相まって大きく美しいことから木曾随一といわれ、中秋の名月には秋月観月会が行われます。

「秋ふかき 高根のしげみ わけ過て
よかわにすめる 月そさやけき」

与川地区(南木曾町)

古典庵住所:長野県木曾郡南木曾町読書

与川の秋月観月会は、毎年中秋の名月の日に行われるイベントで、木曾八景としても有名な与川の秋月を大勢で楽しむ場です。与川では周囲の地形と相まって大きく見事な月を眺めることができます。当日は電車の到着に合わせて南木曾駅から無料バスが運行されます。

ねざめのとこ

寢覚の床

■基本データ

- 住所** 木曾郡上松町上松1704
- アクセス** JR「上松駅」から徒歩22分(約1.7km)、バス(倉本行き)で5分(「寢覚の床」又は「中山道ねざめ」下車徒歩5分)塩尻IC、中津川ICから60分、伊那ICから50分 町営駐車場(無料)、民間駐車場(無料または有料500円)
- 駐車場** 上松町観光協会/TEL 0264-52-1133
- 連絡先** 上松町教育委員会/TEL 0264-52-2111
- 指定** 国名勝(1923年)
中央アルプス国定公園区域に指定(2020年)



マップQR



木曾川の激流が、長期間にわたって花崗岩の岩盤を侵食してできあがった奇岩が有名な観光スポット。スケールの大きさ、奇抜さから木曾路を代表する景観であり、「木曾八景」のひとつです。

浦島太郎が目覚めた場所という伝説があることからその名前があり、同地には玉手箱を開けたあとまで描かれた浦島太郎の物語が残されています。

現在では木曾川の水が発電所に取り入れられるため水量が少なくなり、やや箱庭的な印象に変化してきました。

●地質上の特徴

花崗岩の方状節理(規則的な割れ目)と表面にできる甌穴(円形の穴)の形状が特徴的であり、地質学上、日本を代表するものといわれています。甌穴とは、河底や河岸の岩石の表面にある亀裂などに小石が引っかかり、川の流れによって何度も回転して穴を掘ったものです。

●石の名称

寢覚の床ではそれぞれの石に、形をなぞらえた名称がつけられている。

- ・床岩……浦島堂のかたわらの平らな石
- ・獅子岩……床岩の奥にある石
- ・大釜・小釜……獅子岩の向こう側の、甌穴のある岩
- ・屏風(びょうぶ)岩……流れに沿って壁のような岩(その他、烏帽子岩、象岩、腰掛岩などがある)

●明治天皇の巡幸

1880年(明治13)6月27日、寢覚の床で御小休みされた。

関連する観光コンテンツ

●臨川寺

松尾芭蕉、正岡子規、種田山頭火の句碑、姿見の池などがあり、寢覚の床への降り口があります。宝物館には浦島太郎が置き忘れたという釣竿や硯を展示されています。

住所:木曾郡上松町上松1704
拝観料:200円(宝物館は入館無料)
営業時間:8:00~17:00 無休

●寢覚の床美術公園

寢覚の床に隣接。野外彫刻(空充秋氏)、日時計のモニュメントなどがあります。

●小野の滝

中山道の名所であり、木曾八景の一つ。「木曾海道六十九次」にも描かれています。1910年(明治43)には滝の上に鉄道が架けられました(中央本線)。落差は約20m。国道沿いに小さな駐車場あります。

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

●後日談のついた浦島太郎の伝説

昔、丹後の国、竹野郡浦島というところに太郎という少年がいた。ある日小舟で沖へ釣りに出た太郎は大きな白亀を釣り上げたが、お供のものが亀を殴り殺そうとしたので、太郎はそれを止めて海へ返してやった。

太郎が家に帰ろうとすると美しい少女が現れ、「私は先ほどの亀です。命を助けていただいてありがとう」と言い、太郎を龍宮城へ案内した。そこで龍王や乙姫にもてなされ、月日のたつのも忘れて遊んだ太郎だったが、ある日鷄の声を聞いて故郷を思い出した。

いとまごいを申し出ると、龍王から「故郷が嫌になったら再び戻ってくるように」と、弁財天像、万宝神書、そして「いかなることがあっても開けてはいけない」という玉手箱を贈られた。

太郎が故郷に帰ると見知らぬ人ばかりで、龍宮城で過ごすうち地上では300年の年月が経っていたことを知る。太郎は驚き、万宝神書を開いてみると、飛行の術や長寿の薬方などが書かれていた。それを読んだ太郎は足の向くまま諸国の旅に出た。

木曾の寢覚の床までやってきた太郎は、その美しい風景が気に入り、寢覚の里に住んで好きな釣りを楽しんでいた。あるとき、里の者に昔の思い出話をして、話のついでに玉手箱を開いてみせた。すると中から紫の煙が立ち昇り、太郎はたちまち300歳の顔になってしまった。人々も驚いて、近くの池の水に姿を写して見た。

それ以降、この池は姿見の池と呼ばれるようになった。太郎翁はその後、人々に霊薬を授けていたが、天慶年間にどこかへ立ち去ってしまった。里の人が太郎翁の立ち去った跡へ行ってみると、弁財天の像一体が床岩の上に残されていた。これを祠(ほこら)に祀って寺を建立したのが、臨川寺だという。

*十返舎一九『続膝栗毛 木曾街道』に次の記述がある。

「此ところに臨川寺といふ景地あり。寢覚の床といふこれなり。
むかし浦島太郎釣をたれし所なりと云伝う」

●浮石

木曾川沿いに作られた棧(かけはし)を、土地の人は波計(はばかり)棧と呼んでいたが、この棧と寢覚の床の間を行ったり来たりしている石があった。「浮石」といわれたこの石は上松の方に流れていったかと思うと、いつのまにか棧に戻っている。石が流れると必ずどこかで災害が起こったので、村人たちは心配していた。

ある日のこと、浮き石を見下ろす「弥生の茶屋」でこの話を聞いた旅の僧は「私の法力で、あの浮き石を止めてしんぜよう」と、主人から紙をもらい、歌を書いて長い間お経を唱えた。

波計や弥生の糸につながれて浮いたる石の流れこそせぬすると、浮石はびたりと止まり、それきり動かなくなった。村に不幸は起きなくなり、浮石の不安もいつしか消えてなくなったという。

●寢覚の床の主

寢覚の淵に住む主が、毎年、村の少女ひとりを人身御供に捧げさせ、生贄のない年は農作物がとれなかった。ある年、老夫婦の大事な娘に白羽の矢が立った。老夫婦は近くに住む行者に相談し、イノシシの腹子を丸揚げにして藤づるでしばり、それをエサに大勢で主を釣り上げ退治した。主は六尺もあるオオサンショウウオだったという。

●橋がない理由

昔、村人たちが相談し、対岸に橋をかけたことがあった。橋が出来上がり、村人たちが渡ろうとしたとき、不思議なことに、それまで渦を巻いて流れていた木曾川の水が急に鏡のようになって、おそろしい牛の顔が浮かび上がってくるのが見えたため、誰も渡ることができなかった。それ以来、寢覚に橋をかけようとするものはないという。

寢覚の床、文人達の描写

●島崎藤村の描写

「昼食の時に寢覚に送ろうとして道を急ぐことは、木曾路を踏んで見るものひとしく経験するところである。そこに名物の蕎麦がある。春とは言ひながら石を載せた板屋根に残った雪、街道の側に繋いである駄馬、壁を泄れる煙……寢覚の蕎麦屋あたりもまだ冬籠りの状態から完全に抜けきらないやうに見えていた。」

(『夜明け前』で蕎麦屋の風景を描く一説)

「寢覚は浦島のお話をかりて、岩のほとりのながめ深く静かなところに、浦島の釣を垂れたといふ床もある。臨川寺の弁天堂には浦島の釣竿といふのがある。そのほとりに姿見の池もあって、奇を好む旅人の必ず立ち寄る名所となつてゐる。(中略)

この竜宮の入口にも秋は暮れて、垣根に残って黄菊の花もあはれであった。」

(『一葉舟』木曾谿日記での寢覚の描写)

●正岡子規の描写

「上松を過ぐれば程もなく寢覚の床なり。寺に至りて案内を乞へば小僧絶壁のきりきはに立ち遙かの下を指してここは浦島太郎が竜宮より帰りて後に釣を垂れし跡なり。(中略)誠やここは天然の庭園にて松青く水清くいつこの工匠が削り成せる岩石は 峨々として高く低く或は凹みて渦をなし或は廻りて滝をなす。いか様仙人の住処とも覚えてたふとし。」

(『かけはしの記』での寢覚の描写)

島崎藤村・正岡子規・については

……………4章-68-69P参照

●「信濃の国」

長野県民に親しまれてきた「信濃の国」にも次のようにうたわれている。

「尋ねまほしき園原や 旅のやどりの寢覚の床
木曾のかけ橋かけし世の 心して行け久米路橋」

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

きそのかけはし

木曾の棧

■基本データ

- 住所 木曾郡上松町上松
- アクセス JR「上松駅」からバスで5分
塩尻IC、中津川ICから60分、伊那ICから50分
- 連絡先 松町観光協会／TEL 0264-52-1133
上松町教育委員会／TEL 0264-52-2111
- 指定 県史跡(1966年)



マップQR



木曾の棧の歴史

棧は険しい崖に沿って棧道を架け、人ひとりがやっと通れる道でした。松尾芭蕉が『更科紀行』で詠んだ「かけはしやいのちをからむつたかずら(棧や命をからむ蔦葛)」の句は、碓氷峠、太田の渡しと並び中山道の難所であった棧の状況をよく表しています。1647年(正保4)に通行人の松明の火で焼失しましたが、1648年(慶安元)、木曾を支配していた尾張藩は、木曾川の河原に長さ102m、道幅6.7m、高さ13mの巨大な石垣を築き街道を完成。建設費は当時の金で873両と言われ、19世紀(1800年代)前半で町方奉公人の年給は男2両、女1両の記録があり、江戸初期の一両の価値はそれより高いと考えると、数億円規模の工事だったと推察できます。

1966年(昭和41)、国道の改修で2本の橋脚の間14.5mだけを残し、約90m近い石垣は擁壁で埋め立てられました。石垣の一部が残ったのは、木曾路の写真集を刊行した沢田正春氏の働きかけによるものです。

また、岩に刻まれた磨崖碑^{まがいひ}が残されており、対岸には松尾芭蕉、正岡子規、種田山頭火が詠んだ句碑があります。

棧は、県歌『信濃の国』において、「旅のやどりの寝覚の床 木曾の棧かけし世も」と歌われているように長野県の名所であると共に全国的な遺構です。



信州デジタルコモンズ/
2代目安藤広重 諸国名所百景「信州木曾の雪」

あてらけいこく

阿寺溪谷

■基本データ

住所 木曽郡大桑村野尻阿寺国有林内

アクセス JR「野尻駅」から
タクシーで5分。徒歩約20分

連絡先 伊那ICから60km、80分
大桑村観光協会／TEL 0264-55-4566



マップQR

大桑村野尻の阿寺橋を渡った先にある阿寺溪谷。砂小屋山に源を発する阿寺川が流れる溪谷で、全長約15kmある清流の両岸には木曽五木が生い茂ります。

四季折々に表情を変える溪谷美のなかでも、流れる水の美しさは格別。エメラルドグリーンの清流はここならではの。上流部では、顔を洗うと色白美人になれるという言い伝えのある「美顔水」が湧き出ています。

犬帰りの淵や熊ヶ淵、六段の滝など見どころが随所にあり、飽きさせません。ウォーキングコースとしても整備されており、一番奥にキャンプ場があります。時間にあまり余裕がない場合は、吊り橋と六段の滝が楽しめる約1時間の遊歩道コースがあります。

JR野尻駅から溪谷入口まで徒歩約20分です。

山の神祭り

木の伐採に携わるひとを「杣(そま)」といい、切り出した丸太を沢から流す小谷狩、木戸側に流す大川狩、筏流しをおこなう人を「日雇(ひよう)」といいました。

人里離れた山奥で出稼ぎ生活続ける彼らにとって唯一の慰安は月に一度の山の神祭りであったといい、この日は揃いの法被で木曽節を唄い踊ったという。

千畳岩(せんじょういわ)

大きな岩盤のため、こう呼ばれる。この下で耳を澄ますと、川の瀬音が反響して、まるで頭上に溪流が流れているかのような錯覚を受けるといい、「瀬音岩」ともいわれています。

■主要参考文献／『木曽～歴史と民俗を訪ねて』(木曽教育会郷土館部編著 信教出版部 2010)
『おおくわナビ 大桑村観光協会公式HP』



林鉄記念碑

阿寺溪谷の入口にあります。1923年(大正12)にアメリカ製のミニSLによる森林鉄道が開通し、切り出された材木の運搬は筏流しから鉄道に変わりました。



その森林鉄道も自動車道の整備が進みトラック輸送されるようになり、1966年(昭和41)に廃止されます。

鉄橋跡では、水の流れに小石が回転してできた「甌穴(おうけつ)」が見られます。

雨現(うげん)の滝

右岸の岩上にあり、雨が降ると現れます。

狐ヶ淵・狸ヶ淵(きつねがふち・たぬきがふち)

狐や狸が自分たちの化け具合を確認するためにこの淵を鏡代わりに映し見ていたという伝説から、名づけられました。

ヒノキ美林

1894年(明治27)に植林されたヒノキ林です。

犬帰りの淵



猟師が犬を連れてこの谷に入っても、この淵までくると犬は恐れて渡ることができず、仕方なく引き返すことになるためこの名が付いたといえます。

樽ヶ沢(たるがさわ)の滝

沢水が岩を落ちながら、らせん状に流れ落ちる落差約6mの滝。橋の真下にあるため、見落としてしまう人が多い。

六段の滝



対岸の林の中にある六段の滝。

第1章
日本遺産とは
日本遺産木曽路

第2章
江戸時代以前の
木曽の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曽路11宿

第5章
明治以降の木曽檜活用、
森林鉄道

第6章
木曽の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

島木赤彦の碑

諏訪出身のアララギ派歌人、島木と伊藤佐千夫が木曾路を訪ね、阿寺温泉に泊まった後に詠んだ歌が刻まれています。「京の山長良夏川すずしけど木曾の林に思入りたり」ほか。

吊り橋

赤彦の碑からウナリ島までの遊歩道にある吊り橋は、全長25m、川床からの高さ8.21m。主ケーブルから吊り材で桁を吊るす形式で、地元産のヒノキなどが使われています。ワイヤー支柱は大桑村の電柱のワイヤーを再利用して地元住民が建てました。

牛ヶ淵

牛の形に似ていることから、名づけられました。この溪谷で唯一の蒼く深い淵です。

熊ヶ淵

このあたりには熊が多く、親子連れでこの淵で水遊びをする姿が時々見かけられたことから、呼ばれるようになりました。水底まで透けて見えるほど透明度が高く、美しい。

吊り橋のある遊歩道

渓谷にかかる2つの吊り橋をつなぐ形で遊歩道が整備されています。

下の吊り橋から遊歩道を回り、上の吊り橋に出て車道側を下ってくると、約45分で周遊できる(六段の滝も見る場合はプラス15分)。道の分岐で階段を下っていくと、六段の滝を目の前で見ることができます。遊歩道内は未舗装の山道で、所々アップダウンがあるため、注意が必要です。

阿寺溪谷の民話と伝承●ウナリ島

阿寺川の中にある長さ30m、幅10m程の島。昔、駆け落ちした男女が人目を忍んでこの地で暮らしていたが、ある日女が毒キノコを食べてもがき苦しんだ。男は夜の山道を里まで走り降りて薬を手に入れて戻ったが、女はすでにこと切れており、男は声をあげ嘆き悲しんだ。今でも雨で増水した夜になると、苦しんだ女のうなり声と男の鳴き声が聞こえるという。

●吉報の滝

阿寺川にそそぐ落差約25mの滝。泊まり込みで働いていた昔の山人たちには、里の様子はなかなか伝わってこなかったが、この滝の音がよく聞こえる日は里から良い知らせが届いたという。せせらぎの音とともに単調な生活の慰めとなったところから、いつのまにかこう呼ばれるようになった。

●砂小屋の冷水

阿寺溪谷キャンプ場内、森林奥の岩間から湧き出てくる清水はこの溪谷内でも最もきれいで冷たい。昔、この山を管理するために遠く尾張藩から派遣された役人たちの妻が見違えるほど色白になって帰ってくるため、その訳を聞いたところ、この清水を朝夕使っていたという。

この清水が「美顔水」といういわれです。

2010年(平成22)に「信州の名水・秘水」に選定されました。

●阿寺国有林ハナノキ(カエデ科)

高さ30m、直径1mになる落葉高木。4月頃に紅色の花をつけます。希少野生動植物保護条例・指定希少野生動植物に指定。

過去の台風などの影響で枯死が懸念されたため、2005年度(平成17)に独立行政法人林木育種センター「林木遺伝子110番」に登録され、挿し木苗木の増殖が依頼されました。2009年(平成21)に里帰りしたハナノキの苗木が植樹され、大桑村と木曾森林管理署南木曾支署、ボランティアとが保存・保全活動に取り組んでいます。

●阿寺溪谷キャンプ場

阿寺国有林内にあり、渓谷の清流を臨む緑豊かなキャンプ場。信州の名水・秘水に選定された湧き水「美顔水」が流れ出ています。

連絡先:阿寺溪谷エコくらぶ/TEL 0264-55-2013 (8:00~17:00)

●フォレスパ木曾

中央アルプスを一望する木曾川畔にある温泉リゾート。宿泊施設「あてら荘」、グラウンドゴルフコース、バーベキューコテージ、テニス、ゲートボールなどの屋内スポーツジムなどがあります。

住所:木曾郡大桑村野尻939-58 連絡先:TEL 0264-55-4455

柿其溪谷

自然・景勝地

南木曾町

■基本データ

- 住所 木曾郡南木曾町読書
 アクセス JR「南木曾駅」からタクシーで10分
 中津川ICから約45分
 連絡先 (一社)南木曾町観光協会
 /TEL 0264-57-3123



マップQR

木曾川の支流、柿其川のV字谷の秘境、柿其溪谷は数ある木曾路の溪谷の中でも特に美しいと言われ、吊橋より上流8kmにわたって深い谷を埋めた巨大な花崗岩が滝や瀬や淵を織りなす景勝地です。春にはツツジ・シャクナゲ、秋には紅葉が旅人の目を楽しませます。

十二兼駅から自然歩道を通して、牛ヶ滝(写真下)まで4.5km、さらに奥へは林道を歩いていきます。特に、恋路のつり橋から牛ヶ滝までの約300mの遊歩道がおすすめです。

花崗岩をくりぬいて柿其川本流が落下する牛ヶ滝のながめは壮観。林道を徒歩40分のところに、展望台からの眺めが爽快な霧ヶ滝があります。

柿其峡(木曾川)

清冽な柿其川が木曾川本流に流れ込む出合の一带、「南寝覚」ともいわれる「寝覚の床」のミニチュア版で、木曾川の広い河原を形成する花崗岩の柱状節理が浸食されて、美しい姿を見せています。別名、中河原峡とも呼ばれています。国道19号「柿其入口」交差点から入ってすぐの柿其橋からも、よく望めます。(十二兼駅から徒歩約10分/850m)

八剣神社

境内の大杉は木曾では珍しい熊野杉で樹齢570年余。1955年(昭和30)頃までは四本の杉が合体していたため「よすぎ」と呼ばれていました。現在は2本が残っています。(町天然記念物)

柿其水路橋(国の重要文化財)

桃介橋・読書発電所とともに国の重要文化財として指定されており、現存する戦前の水路橋の中では最大級のものです。

■引用資料HP／ぶらりなぎそ(一社)南木曾町観光協会



きこりの家

江戸末期の1864年(文久4)に建てられた民家を解体復元。自炊しながら昔の生活が体験できます。

柿其温泉(溪谷の宿いち川)

柿其溪谷入口にある温泉で、入浴・食事・休憩・宿泊ができる施設があります。泉質は単純弱放射能冷鉱泉。(要予約)

牛ヶ滝

巨大な花崗岩が壮観な景勝地。牛ヶ滝展望台への遊歩道はお勧めのコースです。



霧ヶ滝

牛ヶ滝からいったん戻り、林道を徒歩40分。展望台からの眺めは爽快です。



イボとり観音(十二兼・中山観音)

この観音堂にある木の靴でこするとイボがとれるといわれています。毎年8月14日には観音堂境内を出発して十二兼をまわって歩く百万遍念仏(町の無形民俗文化財)が行われています。



第1章
日本遺産とは
日本遺産木曾路

第2章
江戸時代以前の
木曾の暮らし

第3章
尾張藩による森林保護
と地場産業の奨励

第4章
宿場の賑わい・繁栄
中山道・木曾路11宿

第5章
明治以降の木曾檜活用、
森林鉄道

第6章
木曾の暮らし、風土、
宗教(御嶽山信仰)

第7章
その他
(観光宣伝など)

冊子制作協力団体・関連一覧

町村・団体

木曾町教育委員会 生涯学習課 文化芸術係
上松町教育委員会 社会教育係
南木曾町教育委員会 文化財町並係
木祖村教育委員会 教育振興係
王滝村教育委員会 総務係
大桑村教育委員会 生涯学習係
塩尻市教育委員会 文化財課 文化財係
中津川市 文化スポーツ部 文化振興課 文化財保護係
(公財) 妻籠を愛する会
奈良井区観光文化委員会
藤村記念館

協力者（順不同）

楯 英雄 氏
遠山 高志 氏
田上 次男 氏
中村 秀己 氏
高橋 滋 氏

企画・編集

木曾地域文化遺産活性化協議会

(事務局) 木曾広域連合地域振興課

〒399-6101 長野県木曾郡木曾町日義 4898-37

電話 0264-23-1050 FAX 0264-23-1052

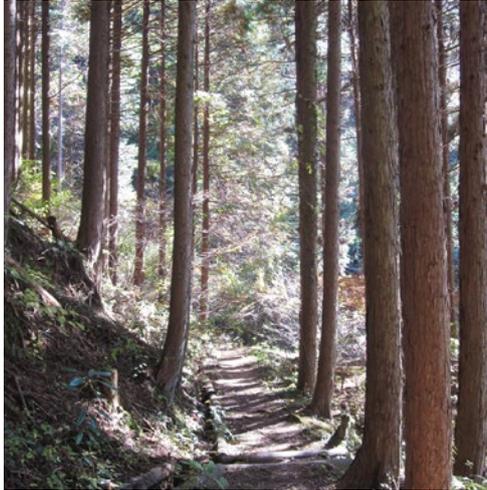
Email chiikisinkou@kisoji.com

※この冊子は、長野県 地域発元気づくり支援金を活用して作成しました。 【2023年2月 発行】

※冊子内の画像・イメージ等は関係者の許諾を得て使用しています。二次利用は禁止します。



桃介橋



与川道



大妻籠から下り谷への中山道



田立の花馬祭り

